

みりー御食膳
いはまちー五百
町のらー祈り
わぎへー我家
枕詞
なぎさー無し、
起る
赤駒のーはらの
枕詞
はたまちー二十
町
たへきー手段
ひつぎのー刈
り跡に生えたる
稻の穂、たのみ
の序詞
たのミー田の
實、頼み
うからやからー
同一族
たてなめてー橋
をなちてー橋
軍の君ー徳川家

其瑞籬の 影うつし いはひこし世は 皇の 神のみことの おほみやの つほね
のかずに つかへつる そのしるよしに はらからの 人につたへて すべ神の
みけにそなふる いほまちの なはしろ水の たえやらす 任せ給ひし 文永き
年の名におふ 御しるしを うけつぐまよに 久かたの 乾の元の としにさへ
しるしたまへる みことのり うけかさね来て 君が世を 千世萬世と いのらへ
ば わぎへの氏も おのづから 世々につたへて みしるしの ありとはいへど
夕附日 さすがに時世 うつろへば かひもなぎさの 波風の しぐめるまよに
赤駒の はらばふ田居の 畦をはなち みぞさへわかす いほまちの 名のみのこ
りて はたまちも あらずなりぬる ことをしも 思ひなけけど せんすべの た
づきもしらす ひつぢほの たのみもあらず しかれども うからやからの 多け
れば 神にもつかへ ものよふの 道をもふみて おのがじし 時にあふひを
松がえの 猶世をへつつ 梓弓 引馬の里に たてなめて 軍の君の はた雲の
おこり給ひし 引馬野に くさむすかばね 露霜の 消なば消ぬべく 負征矢の
雪とみだれて あらましき あらしの風を ふせぎつる かひしありとて 物かづ

康をいふ
雲宵のー消に掛
る枕詞、つゆし
もにあらずつゆ
もにあらずつゆ
く消え易き霜の
意
みとしるー御戸
代、神社所屬の
田地
あがちー分ち
ことあげすー言
に擧げてのべ立
つ
身ながら心にー
我身なら我心に
つぶしーとー只
率直に
たごこと記ーた
だこと歌の體に
言葉を飾らざ
またも云々ー又
も來まじとはど
ろも思はれぬや
はり又來たし
たちのいそぎに
旅立ちのごた
ごたに紛れて
ことにはー口で
は
さからんー離れ

け いたどきまつる 此神の みいきほひある しるしとて 神のみとしろ また
さらに あがちたまひて 氏は いまもつたへつ もろびとの 數ならねども
まれに來て われもことあけす、岡のべの 神代のことば 松ぞしるらむ
かぎりあればあすは立ちなんとするに、 妻子のまどひ來て、くれぐるとなごりをしむに、
身ながら心にまかせねば、 人やりならぬわかれ路こそわりなくかなしけれ。つまなる者
の、 手ならひのやうに書きつけたるをとりて見れば、
あふからに別れむことも忘られてうれしかりしぞ今はくやしき
とおもふ心をつぶしとつどけたるも、 なかくにて、 われもたごことに、
あふからに別るようさはありながら又も來じとはえこそ思はね
濱松の名をたのめば、 こりすまの海ならでと書きさしぬ。此外にもありつれど、 たちの
いそぎにもらしつ。 十一日曉にたちいづ。 こん年また歸らむことをいひて、
こむ年とことにはやすくちぎれども思へばとほき月日なりけり
海山をだにいくへともなくこえさからん悲しさ、 老人のかなしみ給ふにそへて、 妻子は
らからの名残、 とりあつめたるわが心のうちいはんかなきに、 胸つとふたがりて、 おく

とつあつめたる
何もかも一つ
になりたる
さかさまうし
思ひの霧心の
苦しさに打撃を
こと

深山もさやに
萬葉「笹の葉は
み山もさやにさ
やげども吾は妹
思ふ別れ來ぬれ
ば」

木ぐれ—木の暗
山田の云々—新
古今「おしねか
く山田のくろに
置くかびの下こ
まで—詣で

がれする身とは
知らずや—古來
蚊火の字を充て
たり
朝霞云々—萬葉
「朝霞かびやが
下に鳴くかはづ
聲だにきかばわ
れこひめやも
この歌かびやに
あらずかひやに
て置室なりとの
説あり
葛天氏の民—支
那太古の王に葛
天氏あり其民純
朴粗野なりし也
白氏文集三十六
不出門の詩及び
陶淵明五柳先生
傳等に見ゆ
そば—し—角
立ちて圓滑なら
ぬこと
和泉式部がこと
ば—古今著聞に
和泉式部が童の
あを(裳の一種)
をかりし事見
ゆ、そのあをに
青を掛けていへ
る也

りにしたひ來たる人々に物もえいはず、朝ほらけのそかひの梢なつかしく、さかさまに
も乗らまくて、かへり見がちに行くに、思ひの霧はふたがれど、空いと晴れて、風もし
づかなれば、天龍川におりたちて、いとてさしわたすもあやにくなりや。けふは懸川の
宿の鈴木のがしがもとにゆかり有りてやどりぬ。政名などいふ人もまぢうけにたり
とて、とく來て物がたりするに、夜いたく更けにければふしぬ。たれもみな歌よみつれ
ど、あだしことにまぎれてかへしせず。さやの中山の朝霧分くるほど、風たちていとわ
びし。深山もさやにとひとりごたれて、猶横ほれるさまの、おもふ方のため今の間にう
かるべしと思へば、足もいそがれず。菊川の里にいたりぬ。

咲きにけり今越えくれば菊川のさとうちかをる山の下かせ
名におひて菊いとおほかり。大井の社行手にをがみて、藤枝の宿にやどる。青島の何が
しくすしなどまで來て、物語などしばらくして歸りぬ。曉ふかく出でて岡邊わたりをゆ
くに、山もとの木ぐれに、所々ほかけの見ゆるを、夜ふかく出できたる里人にとへば、
鹿火なりといふ。山田のくろにおくかび是なりけり。山賤の思ひめぐらさでいひなれた
る詞こそまことなりけれ。猶谷かけ行手の田面に、うすく霧わたれるが中に、むらく

立ちのほる烟に、朝霞かびやが下おもひしられて、いと興あるあけほのなり。うつの山
のむかしの道はと、山畑にそば刈るをのこにはするに、しらすとのみなさけなけにい
らふ。にくむ人もあれど、しらするぞ誠ならんかし。世の中にあらんとする人は、おも
てをよくし、ことばをたくみにするに、そのまよに心うる事のたがはざるぞすくなきな
どいへば、葛天氏の民も、山の中にはあるぞかしとてわらふ。

世の人の心や賤が山はたのそば—し—きぞ誠なるらん
ねむたかりつるめもさめぬるに見れば、つたかへでの紅葉いとことなり。和泉式部がこ
とばもおもはれてをかし。

あをかりしうつの山路は夢ならしきむる現に紅葉をぞ見る
今宵は十三夜なるに、清見が關にこそやどらめとおもへど、日高し、契るばかりの日數
もはべるはなど、人々のいふに、わりなくて過ぎぬ。歌もよみつれど、なか—にても
らしぬ。くら澤などいふ坂をくだるほど、伊豆の山にやあらん、海よりあなたの峯に月
はいでたり。海の面は夕日の色のまだかすかにほへる、波の上に月の光のほのくくと
かさなりたるは、紅のきぬに海賦のうすものの裳のひかれたらんと見ゆ。島のかげなど

なかくしてて
書きつけん事も
却つて煩はしけ
れば
海賦―海部の義
ともいふ、大波
にみるも貝など
摺りたる模様
よそは云々―他
の暮れはてて物
見えずなりたる
目を移せば富士
の夕日に輝きて
見ゆるに驚くと
也
八聲の鳥―鶴

ちりもあざ―少
しもかくらさず
ちりひびより云
云―富士は八咫
芙蓉と形容せら
る、蓮は泥中よ
り出づれば斯く
詠ぜり
によび―苦吟し

ちりもあざ―少
しもかくらさず
ちりひびより云
云―富士は八咫
芙蓉と形容せら
る、蓮は泥中よ
り出づれば斯く
詠ぜり
によび―苦吟し

はすそごにもかよひて、よにたとしへなき心地するが、見るく暮れはつるもをかしきを、ふじのねはひとり猶夕日のいる雪にはえて、中空にかどやきたるは、よそはくれはてにけるめうつしにおどろかる。

山々はくれぬる雲のそらに猶夕日をのこすふじのしら雪

くれはてよ由井の宿にやどる。今夜ばかりはまたもあらじ、夜ふかく月に濱づたひせんとて立ちいつ。月は海ごしの山のはちかくなりて、波の上は鏡の如く平らかにあきらかなれば、三保が崎、伊豆の山々、残りなく見わたさる。入江のむらの八聲の鳥も耳なれぬこちせらる。

しどろなる里のわらやの数みえて明けゆく月に鳥がねぞする

明けゆくまよに、今日は富士のねに雲のちりもあず、ゆくく見むとて、馬にてぞ過ぐる。

いつの世のちりびちよりかなり出て富士は蓮の花とみゆらん

いにしへになぞらふる長歌よまんとて、馬の上によびつれど、ねむたさにさだかにもつづけられねば、又こそとおもひて、なかばにてやみぬ。三島にやどりぬ。夜をこめて箱根

路をのほる。

たれかする古郷へだつ山々を月にながむる夜のあはれは

分け入るまよに、身に入りかへる深山の秋風、鹿の音ながらうち吹くめるを、聲きく時ぞとはかよるをりこそと覺ゆ。此山をしも越えば、古郷は空さへ見えじとおもふに、更に名残おほゆる明方なり。たうけの宿をすぎゆけば、杉村のをぐらきに霧立ちこめたる袖のしめりもたどならず。

古郷のそらさへ見えぬ箱根山こゆる驛のすどろにぞうき

山々のもみぢは、いろくのゆはたをたちまじへたらんが如く、世にはそむべくもあらぬ梢ども、草の葉さへしぐれあり。いかで旅ならで見ばやとぞおもふ。下りてよりは何のふしもなし。藤澤の他阿上人ははやくむつまじきわたりなれば、立寄らまくおもへど、あすははやく入るべきにて過ぎぬ。戸塚の宿にやどれり。おもひつどけつる事も、つかれにければ、筆ならで枕をぞとる。十七日のひるつかた品川わたりにいたる。はるばるとのぞめば、舟よりかちよりつどふ物の多かるに、かしこき御いきほひのあふがれて、旅のつかれもおほえず。

ナトろ―鈴に坐
る即ち何ともい
へずの意を兼ね
ゆはだ―纏帳、
しぼり染
ふし―見るべき
趣
入るべき―都へ
舟よりかちより
―或は舟にて或
は徒歩にて

うくたから舟
をいふ

大君のとはのみやこの八十のつにところせきまでうくたからかも
ふるびにたるかな、家持が集にやいれましとて、人々からふ。

岡部日記終

後の岡部日記

賀茂眞淵

むゆかなんふべ
き一六日路也

にてをーにて行
かん、をば上と
同じき強辭
いくそばく一幾
何

ゆふ一結ぶ、ゆ
はへる

九月十日、にはかにおもひたちて遠江にまかる。此道大かたにむゆかなんふべきを、いかにぞや雲風もけしきだちて、たどならねば、川ども水のこよろをおそりて、にはかに五日にてをとおもひなりてけり。戸塚と藤澤とのうまやのあはひ行くほど、しびてふ魚を、馬に二つ三つなどおふせつと、いくらともなくこなたざまに來。さるにてもいくそばくぞと問ふに、七十まりの馬の數なりといへり。これは大磯小磯などにてつりにけるになん。古事記などの歌には、おほをよししびつくあまとも、萬葉集には、しびつるともあるよ、いかにぞとて、そのものに問ふに、およそ七月のころよりとしぐつるめり。舟どもおのが浦々こぎいでて、かれがあるあたりによせつと、ふとさは馬の荷ゆみらんばかりの芋綱の、長さはいく千ひろともなきが、そのさきにかれがこのめる小魚を釣にさ

そこはかとなく
一どこといふ事
なしに
たぎりたり

をこぶり入る
ひきずり込む
ふと一ぶツツリ
と

のうらぎ一和漢
三才圖會の説に
よれば又さいち
ともいひ大さは
八九寸

うたへ一官に訴
國府一靜岡

してうちいるれば、くひてそこはかとなく沖にもてゆくを、行くまに／＼ゆるしやれば、つひには必ずまたこなたさまにかへり来るを、またかへり来るまに／＼引きたぎつゝ、ほど／＼舟ちかくよせたる時、うちのぎとて、木の先によこさまに釘をいだしたる物を手ごとにもちて、かれが頭にうちつけて、うめきて舟にをこぶり入るなり。はじめに沖さまにゆく時、さかひて引けば、いかにある綱も、ふとくひきるめるによりて、ゆくまにまにやるなめれば、いとながき綱なりけり。またもりといふほこして、舟よりつくありとぞ。めづらしくもあるかな、むかしの書はまことなりけりと、いよく思ひしらる。又のうらぎ、にべなどいふ魚は、とり／＼に大なる物にて、のうらぎはしびの如くにて、うろこあり、にべは石もちといふ魚のおほきになりたるなりともいへり。頭のうちに石ありといふなり。さて此魚のかしらの脳を煮たるもて、弓は作るなりけり。かれ市にもて來れば、うたへまうして皆めさるめり。かしらはとどめられ、身をば賜ふとなむ。十日駿河の國府にいたりぬ。萬葉集に、
燒津べにわが行きしかば駿河なるあべの市路にあへるこらはも
とよみたるは、こよの事なりけり。此國府は、すなはちむかしのあべの市なるべし。こ

燒津一靜岡の西
方三里餘、山を
距てたる海岸に
てこの海邊とは
いふべからず
音一評判
かつと一纏に

くが一陸上

なり所一田庄

かたる一乞食

人ぐさ一人民

にひばり一新墾

この海べに燒津といふ所今もあなり。國府をすぎて阿部川のこなたをさわたりといふ。今年五月のころ、あべ川の上つ瀬に、水はふれ堤きれて、行きかひもたえにきと、むさしまで音はやく聞えし所なり。今はその水口のうへに、よこさまに石こめたる籠を多くさしいだしてければ、水はむかふさまによりてながるれば、こなたへはかつ／＼落つるなり。それがみさかりに、瀧もけに落ちけんあとも見えて、ほど八町ばかり、長さは六十町ほどにて、やがて海にいたれりといへり。いくそばくの里の草木はみくづとなり、人は魚とこそなりけめ。そのをりのことを聞くに、或は家ながら流れ行くに、老いたるもわかきも、たすけ給へところをかぎり呼べど、くがに見る人いかで／＼と手かく物からすべなく、あるは命をばからくのがれしも、なり所も家もあらず、老いたるは子をうしなひ、わかきは親にはなれて、かなしみあへりとぞ。今もさるたぐひの人のかたるとなりて、そこら道にふしてなけくなど、路行く人のこよろぐるしと思はぬはなし。すべてちかき年頃、いづこにても水のわづらひぞおほかめる。これをおもふに、かくのみ御世の治りにたれば、おのづから人ぐさも多く、またはよく心得ぬ人は、にひばりの田のいで來れば、ほどにつけつゝ物ゆたかになりぬとのみおもふ故に、こよにかしこに多く

さては—其結果
田どころ—田地
やしなひ々々—
肥料

よこぎまに—邪
に、誤りて—
まだしき—まだ
早き—
あふ人も云々—
伊勢物語に山伏
にあひたる記事
あるによりて昔
けり
うつゝのやみ—
現実ながら現実
ひとも思へぬ心迷

のにひばりをのみなすめり。およそ草木のある野山には、おほかたの雨ふりたるには、つちにしみ入りて、ながるゝ水はすくなきを、かの山もやぶも、にひばりになれとば、漣をかまへて水をひとつに流すめれば、つちにしまぬのみかは、にぎりさへうち添ひて、いきほひますくつよく、おしくだして末にながれ集りては、いかなる堤もたふべくもあらず、さてはかゝる事こそいでくめれ。田どころといふ物は、もとよりある所をよくやしなひたてよこそよろしき物を、ともすれば租税の多かるると、にひばりにのみ民の心をうつして、よきやしなひぐさをもかしこにはこび物すれば、かれはしばらくよろしきに似たれども、もとの田どころいよ／＼うすくなりて、おのがなりはひのたのみだに、自然にすくなくなりもてゆくぞかし。やむごとなきあたりにしろしめさす事にはあらぬを、しもによこぎまに申すことなどやあるらん、なげかしき事にこそ。けふ未の時ばかりより、村雨さよとふりて、うつの山雲むして、くらう道も見えぬは、むかしおほゆれど、つたのもみぢもまだしきに、あふ人もけふはなし。うつゝのやみにて越えぬ。藤枝のうまやにいたれば、日くれて雨はいよ／＼うつが如し。大井川はいかにぞと問はするに、さのみたはやすくは水のいで侍らねば、さやはいそぎ給ふべきなどいへど、さき／＼も

さやは—そんな
に何も—あん
あをだら—あん
なだの意、ちは
亥二つ—十時半
を備し備ひて
妹ならねど—萬
葉—あぶりほす
人もあれやもぬ
れぢぬをいへに
はやらせ旅のし
るしに—などを
思ひて書けるに
や
けに—尙一層
心いられこそせ
め—じれつたく
思ふなるべし

かぞいろのしる
し—父母の位牌
しらくて—新し

ためしのあれば、うまやにいそぎて、うまあをだら調せさせて、雨にきほひていでぬ。鳴田のうまやまでいたりしは、亥二つばかりなりけり。大かた人もねたるを、しひてもよとしてわたりぬ。こよひは十三夜なれば、あづまの友だちは猶月めですらんを、此くるしきに歌もなし。金谷にやどりして、妹ならねどぬれたる物あぶりほす。こよろ落居つれば、すこしをかしさも出できぬ。さるあひだに、風さへ大いに吹きいでぬ。まことによくこそわたりつれとて、従者もよろこびあへり。明日なん古郷にいたるべきを、かなたにて此川の渡瀬いでこんをまたば、たなばたよりけに心いられこそせめと、うれしき事またなし。この道はすべてしかなり、すこしもしもいそぐほどの事ならば、いよ／＼いそぎて川をばわたりぬべき事にこそあれ。十四日空晴れて、懸川まで来るに、はら川といふ河の橋おちたりとて、しる人あるかたに入りてやどりて、十五日につきぬ。人々うれしと思ひて、いかでけふしもおはしけん、川はいかに侍りけん、その夜にわたりたる事をば思ひかけずいぶかるなりけり。さて岡部の家にゆきて、かぞいろのしるしをがむに、ことし陸月廿三日になん母はうせ給ひにければ、まだおはさぬものとも覺えぬを、そなへものの具どもしらくてあるを見るも、いはんすべなく、泪のみすよみてよよと泣か

くいのやちたび
—あまたとび後
悔すること

る。去年の冬まるりこざりしおこたりを、くいのやちたびおもふもかひなし。御はかに
まうでて

とみ—至急
やをら—静に

野べの霜消えせぬほどにはざりしわが身の罪ぞおき所なき
とまうすを、たど松の秋風のこたふるこゑをのみ聞きてさりぬ。さるはことし二月の三
日になん、とみの事とて文の來れるを、おどろきて見れば、早く正月二十三日の朝、く
ちつねならずとて、すこしふし給ひしに、やをらおきて手水めし、人々をよびて、一人
をうしろにおきてかゝへしめ、佛のかたにむきて、あみだほとけをとなへ給ふこゑ、二
こゑ三こゑのうちに、ねむりたまへばすなはちたえ給ひぬるを、かたへの人々もねむり
給ふにやとおもふやうにて、何のくるしさも見え給はず、そこらの人々、さても珍らか
にこそ終とり給ひにけれ、としごろ神佛をたふとみ、すべて人をもおふなくいたづき、
まづしき者をばあはれみ、ものこふかたるなどの來れる聲を聞きては、みづから物まる
るを食ひさして、あたへしめなどし給ふめる報になんといひあへりとぞ。去年の冬いた
るべきを、やむごとなき事ありて、正月にといひかはしをるほどに、此三月なん東に御
八講行はせ給ふに、東にはまれなれば、さるべきつかさぐにも、其事しり給はぬに二

あふなく—身
の程を盡して
物まらる—食事
する
やむごとなき事
—止むを得ざる
事
御八講—法華八
巻を講ずる式

くはしく聞えよなどあれば、ふるき書どもとうでて、それに筆くはへなどして、やむこ
となき御かたぐへ参らするに、よるひるいとなくて、む月はすぎぬ。さるをかよる事
を聞きて、くやしなどいふもかぎりなし。もよをつかみあしずりして泣くもあやなきわ
ざかな。かくては何事をかはせむとて、うち籠りをを、枝直通泰など來りて、よし今
はかひなし、母君もとより佛の御事をこそたふとみ給ひつれ、御八講の事まうすは、お
のづからなる宿世なるべし、此事きはめておろそかにしたまふまじきなり、喪のうちの
おこなひに叶ふべしとすよむれば、かた手はなみだながら、猶筆とりて、書きはてよ奉
りぬ。その後はいそぎのほりてもなにかひかあらんとて籠りををるに、この九月におも
ひ立ちぬるなり。

いと—暇

宿世—前世より
の因縁

五社—濱松にあ
る神社
し身—喪中の身

二十六日は五社の遷宮あり、神主民部少輔はもとよりのちぎりふかよればまるるべきを、
此身にしあればうちこもりをりぬ。されど祝詞の案はせよかすとあるに、けにもかりの
御うつろひの時もまるりあひて書きつればとて、こたびには似つかねど書きぬ。少輔は
もとより此道の人ながら、此をりしもいとく事しければ、もとむるなりけり。
十月十日、阿波守國滿が家に人々集りて歌よむ。此たびはたはむれ歌はいはじとおもひ

つれば、心ならねど、川水鳥といふ題を、

あはれまた今年も冬の山河にいつしか来つゝうかぶ水鳥
かくて覺えず日かず經ぬれば、東よりもよほしての文しきりなれば、二十日あまりに立
ちなんとす。例の妻子など名残をしむ。後の親といふもいと老いたれば、むねのみふた
がりて日をおくる。母の御墓にまかりまうしにまうでて、こゝろのうちには、

なくくも別れしときをわかれにて別るゝ親のなきぞ悲しき

とおもひつゞけらる。いとしもかなしく、え立ちさるべからねば、やゝ久しくうづくま
りをるを、日くれぬと從者のいふに、かへり見がちにてさりぬ。此みはかは、岡部村の顯
海寺といふ寺の山になんあなる。この所今は伊場とぞいふなる。むかし文永乾元などの
繪旨にも、そののち東よりの御しるしなどにも、遠江國數智郡岡部郷とぞありける。

後の岡部日記終

もよほし—催促
まかりまうし—
暇乞ひ
なくくも云々
泣く泣く別れ
しが最後の別れ
にて今や別るべ
き親のなきが悲
し
文—元—龜
川—後—二條—兩帝
の年號

菅笠日記

本居宣長

上の卷

ことし明和の九年といふとし、いかなるよき年にかあるらむ、よき人のよく見て、よし
といひおきける、吉野の花見にと思ひたつ。萬葉一に「よき人のよしとよく見てよし」といひし吉野よく見よよき人よく見つゝそもくこの
山分衣のあらまはしは、二十年ばかりにも成りぬるを、春ごとにさはりのみして、いたづ
らに心のうちにふりにしを、さのみやはと、あながちに思ひおこして、出でたつになん
有りける。じさるは何ばかり久しかるべき旅にもあらねば、そのいそぎとて、殊にするわ
ざもなければ、心はいそがはし。明日たよんとての日は、まだつとめてより麻きざみそ
そくりなんど、いとまもなし。その袋にかきつけける歌、
うけよなほ花のにしきにあく神も心くだきし春のたむけは
ころは三月のはじめ、五日の曉、まだ夜をこめて立出でける。市場の庄などいふわた

あらまし—豫定
さのみやは—さ
うさう遷延すべ
きにあらず
いそぎ—用意、
支度

そひー添、そば

よべー昨夜

うちつけにー率
爾に、只もう何
の心構へもなく
などの意

いつきの宮ー齋
宮、伊勢奉祀の
女王

あらぬー間違ひ
たる

群行ー齋宮の伊
勢へ下向せらる

りにて、夜は明けはてにけり。さてゆく道は、三渡りの橋のもとより、右にわかれて、川のそひをやよのほりて、板橋をわたる。此わたり迄は、事にふれつよ、をりく物する所なれば、めづらしけもなきを、このわかれゆくかたは、阿保ごえとかやいひて、伊賀の國をへて、はつせにいづる道になん有ける。此道も、むかし一度一度は物せしかど、年へにければ、みなわすれて、今はじめたらんやうに、いとめづらして覺ゆるを、よべより空うちくもりて、をりく雨ふりつよ、よものながめもはれくしからず、旅衣の袖ぬれて、うちつけにかこちがほなるも、かつはをかし。津屋庄といふ里を過ぎて、はるばると遠き野原を分け行きて、小川村にいたる。

雨ふればけふはを川の名にしおひて清水ながるゝ里の中道

この村をはなれて、みやこ川といふ川、せばき板橋を渡りて、都の里あり。むかしいつきの宮の女房の、言の葉をのこせる、忘井といふ清水は、千載集に齋宮の甲斐「わかれゆく都の方今その跡とて、かたをつくりて、石ぶみなど立てたる所の、外にあんなれど、そはあらぬ所にて、まことのほ此里になんあると、近きころわがさと人の、たづねいでたる事あり。けにかの歌、千載集には、群行のときとしるされたれど、ふるき書を見るに、す

ること
頼宮ー假宮

ゆかしくてー見
たく思ひて
ふりはへてもー
わざくても
させるー格別こ
れといふ

さてーそのまゝ
にして
天花寺の城ー伊
勢登志郡中川村
大字宮古の南敷
町にあり、寺は
天平年間僧賢標
の草創、城址は
往昔蘭大納言築
城、源實朝の時
久我三郎の居り
し所と傳ふ

べていつきのみこの京にかへりのほらせ給ふとき、此わたりなる登志の頼宮より、二道に別れてなん、御供の女房たちはのほりければ、わかれ行くみやこのかたとは、そのをり此里の名によせてこそはよめりけめ。なほさもと思ひよる事どもおほかれば、年ごろゆかしくて、ふりはへても尋ね見まほしかりつるに、今日よき序なれば、立ちよりたづね見るに、まことに古き井あり、昔よりいみじきひでりにもかれずなるとして、めでたき清水なりどぞ。されどさせるふるき傳へ事もなきよし、里人もいひ、又たしかにかのわすれ井なるべきさまとも見えす、いと疑しくこそ。なほくはしくもとひきかまほしけれど、此度はゆくさきのいそがるれば、さて過ぎぬ。此わたりの山に、天花寺の城のあと、又かの寺の伽藍の跡なるとのこれりとかや。又かの小川村の神とて、此里に社いふに、八太といふ驛あり。八太川、これも板橋なり。雨なほやますふる。かくてはよし野の花いかどあらんと、ゆくく友どちいひかはして。

春雨にほさぬ袖よりこのたびはしをれむ花の色をこそおもへ

田尻村といふ所より、やうく山路にかよりて、谷戸大仰なといふ里を過ぎゆく。こよ

とまりにし一跡
に留りて一所に
來ちざりし
きしー並び

とこをとめ一萬
年新造、永久に
少女にてありた
しと也
縣居の大人一賀
茂眞淵

うくひず一憂く
乾ず、下に註せ
る古今の物名に
よりて驚をわさ

と斯くいへる
也、「く」凡て
原本のまゝ、
たむけー手向、
峠也
わりなく一理な
くの義、無茶苦
茶にとも解すべ
く、心進まぬな
がらせんかたな
くとも解すべか
らん

あやしー不思議
なる形也

まで道すがら、ところ／＼櫻の花ざかりなり。立ちやすらひては見つゝゆく。

しばしとてたちとまりてもとまりにし友こひ忍ぶ花のこの本

大のき川、大きなる川なり。雲出川のかはかみとぞいふ。此川のあなたも、猶同じ里にて、家ども立ちなみたり。さて川邊をのほりゆくあたりのけしきいとよし。大きなるいはほども、山にも道のほとりにも、川の中にもいと多くて、所々に岩淵などのあるを、

見くだしたる、いとおそろし。かの吹黄刀ふきのざしがよめりし、波多の横山よこやまのいはほといふは、萬葉に「川上のゆづ岩村にこけむささづつねにもがもなとこをとめて」此わたりならんと、縣居の大人あがたるのいはれしは、けにさもあらんかし。鈴鹿すずかにしも、かの跡とてあなるは、はやくいつはりなりけり。此わたりゆく程

は、雨もやみぬ。小倭こわの二本木にほんぎといふ宿にて、物なんどくひて、しばしやすむ。八太はたよりことまで二里半なりとぞ。そこを過ぎて、垣内かきといふ宿へ一里半、そのかいとをはなれて、阿保あほの山路やまぢにかゝるほど、又雨ふりいでて、いとわびし。をりしも鶯うぐいすのなきけるを聞きて、

旅衣たもととほりてうぐひすとわれこそなかめ春雨のそら

古今名物うぐひす「心から花のしづくにそほちつうくひずとのみ鳥のなくらん」ゆき／＼てたむけにいたる。ことまでは壹志郡いちしのこま、ことより

ゆくさきは、伊賀の國伊賀の郡なり。おほかた此山路は、かの過ぎこし垣内より、伊勢地といふ所まで、三里がほどつゞきて、ゆけどくはてなきに、雨もいみじうふりまさり、日さへ暮ればてよ、いとくらきに、しらぬ山路をわりなくたどりつゝゆくほど、か

からでも有りぬべき物を、なにに來つらんとまで、いとわびし。からうじて伊勢地の宿にゆきつきたる、うれしさも又いはん方なし。そこに松本のなにかしといふものの家にやどりぬ。

六日、けさは明けはてよやどりをいづ。十町ばかり行きて、道の左に、中山なかやまといふ山のいはほ、いとあやし。

河づらの伊賀の中山なか／＼に見れば過ぎうき岸のいはむら

かくいふは、きのふ越えしあほ山よりいづる阿保川のほとりなり。朝川あさかわたりて、其河べをつたひゆく。岡田別府べつぷなどいふ里を過ぎて、左にちかく、阿保の大森明神と申す神おはしますは、大村おほむらの神社などをあやまりて、かくまうすにはあらじや。なほ川にそひつゝゆく／＼て、阿保の宿の入口にて又わたる。昨日の雨に水まさりて、橋もなければ、衣かゝけてかちわたりす。水いと寒し。いせぢより此驛うぢやまで一里なり。さてはね

糸櫻―しだれ櫻

くるしき―繰る、苦しき

はやきかぎり―早き種類だけ

心ぐるしう―も氣の毒に

こし方はるかにか―過ぎ来りし遙か後方に

といふ所にて、又同じ川の板ばしを渡る。こよにてははね川とぞいふなる。すこし行き
て、四五丁ばかり坂路をのほる。この坂のたむけより、阿保の七村を見おろす故に、七
見たうけといふよし、里人いへり。されどけふは雲霧ふかくて、よくも見わたされず。
かくのみ今日も空はれやらねど、雨はふらでこよちよし。なみ木の松原なと過ぎて、
阿保より一里といふに、新田といふ所あり。此里の末に、かりそめなるいほりのまへな
る庭に、池など有りて、糸櫻いとおもしろく咲きたる所あり。

糸櫻くるしき旅もわすれけり立ちよりて見る花の木かけに

大かた此國は、花もまだ咲かず、たごこのいとざくら、あるはひがん櫻などやうの、は
やきかぎりぞ、所々に見えたる。是よりなだらかなる松山の道にて、けしきよし。此わ
たりより名張のこほりなり。いにしへいせの國に、みかどのみゆきさせ給ひし御供に、
つかうまつりける人の北の方の、やまとのみやこにとどまりて、男君の旅路を、心ぐる
しう思ひやりて、「なばりの山をけふか越ゆらん」とよめりしは、
けふかこ「此山路の事なるべし。やうく空はれて、布引の山も、こし方はるかにかへり見
らる。

このごろの雨にあらひてめづらしくけふはほしたる布引の山

引きはへ―引きのばし
しる―領し治むる
物する―通り行く
事かたか―地名に事は難しの意を兼ね
そは―組、がけ道

岩ぎしの云々―岸額に他の物より離れ孤立して

この山は、ふるさとのかたよりも、明くれ見わたさるゝ山なるを、こよより見るも、たど
同じさまにて、誠に布なとを引きはへたらんやうしたり。すこし坂をくだりて、山本
なる里をとへば、倉持となんいふなる。こよよりは、山をはなれて、たひらなる道を半
里ばかり行きて、名張にいたる。阿保よりは三里とかや。町中に、此わたりしる藤堂の
何がしぬしの家あり、その門の前を過ぎて、町屋のはづれに、川のながれあふ所に、板
橋を二ツわたせり。なばり川やなせ川とぞいふ。いにしへなばりの横川といひけんは、
これなめりかし。ゆきくゝて山川あり。かたへの山にも川にも、なべていとめづらかな
るいはほども多かり。名張より又しも雨ふり出でて、此わたりを物する程は、ことに雨
衣もとほるばかり、いみじくふる。かたかといふ所にて、

きのふ今日ふりみ降らずみ雲はるゝ事はかたかの春の雨かな

すこし行きて、山のそはより、川なかまでつらなりいでたる岩が根の、いとく大きな
るうへを、つたひゆく所、右の方なる山より、足もとに瀧おちなととして、えもいはず
おもしろきけしきなり。又いと高く見あぐる、岩ぎしのひたひに、物よりはなれて、道

覺え一似より

かた一像

ちりあのみかど
一上皇、下文は
承元三年後鳥羽
太上皇の御幸あ
りしをいふなる
べし

のうへへ一丈ばかりさし出でたる岩あり。そのしたゆく程は、頭のうへにも落ちかよりぬべくて、いとくあやふし。すこし行き過ぎて、つらくかへりみれば、いとあやしき見物になん有りける。獅子舞岩とぞ、このわたりの人は云ひける。けに獅子といふ物の、かしらさし出せらんさまに、いとよう覺えたり。さていさよか山をのほりて、くだらんとする所に、石の地藏あり。伊賀と大和のさかひなり。なばりより、一里半ばかりぞあらん。そのさきに、三本松といふ宿までは、二里なりとぞ。大野寺といふてらのほとりに、又あやしき岩あり。道より二三町左に見えたり。こは名高くて、旅ゆく人もおほく立ちよる所なりといへば、ゆきて見るに、けにことさらに作りてたたらんやうなるいはほのおもてに、彌勒ほさちの御かたとてゑりつけたる、ほのかに見ゆ。その佛の長、五丈あまり有りといふを、岩の上つ方は、猶あまりて高くたてる、うしろは山にて、谷川のきしなるを、こなたよりぞ見る。そもくこよは、むかしおりのみかどの御ゆきも有りしこと、物にしるしたるを見しこと、ほのく覺ゆるを、いづれの帝にかおはしましけむ、今ふとえおもひ出でず。さて其川にそひて、すこしのほりて、山あひの細き道をたどり行きてなん、本の大道には出ける。其間に、室生に詣つる道なども

いしぶみのしる
べ一道の方向を
示したる碑

をりたがへたる
一季節違ひなる

中 夜一夜一夜が夜

聞きふせりて
臥して居てそれ
を聞きて

うち一占ひ

山路にはた一將
(ハタ)山路にと
語を上下して見
るべし

有りて、いしぶみのしるべなくば、必ずまよひぬべき所なり。けふはかならず長谷まで物すべかりけるを、雨ふり道あしくな。どして、足もいたくつかれたれば、さもえ行かで、はいばらといふ所にとまりぬ。此里の名、萩原と書けるを見れば、何とかやなつかしくて、秋ならましかば、かりねのたもとにも、

うつしてもゆかまし物を咲く花のをりたがへたる萩はらの里

とぞ思ひつゞけられたる。こよひ雨いたくふり、風はけしきには、故郷のそらはさしおかれて、まづ花の梢やかになるらんと、吉野の山のみ、夜一夜やすからず思ひやられて、いと目もあはぬに、此やどのあるじにやあらん、よなかにおき出でて、さもいみじき雨風かな、かくて明日はかならず霽れなんとぞいふなる。聞きふせりて、いかでさもあらなんと、ねんじをり。

七日、あけがたより雨やみて、おき出でて見れば、雲もやうくうすらぎつと、はれぬべき空のけしきなるに、家あるじの心のうらは、まさしかりけりと、いとうれし。日頃の雨に、ゆくさき道いとあしく、山路にはたあなりときけば、今朝はたれもたれもみな、かごといふ物にのりてなん出でたつ。さるはいと賤しけに、むつかしき物の、程さ

みじろく身動
きす
こよなく非常
に

萬葉歌に云々
但馬皇女薨後
穂積皇子遙望
御墓悲傷歌ふ
る當はあはにな
降りそ吉隱の猪
養の岡のせきな
らなくに

へせばくて、うちみじろくべくもあらず。尻いたきに、朝寒き谷風さへはしたなう吹入
りて、いとわびしけれど、ゆき困じたる旅ごこちには、いとようしのばれて、歩ゆくよ
りはこよなくまさりて覺ゆるも、あやしくなん。もとよりあひともなふ人は、覺さう
るんの戒言ほうし、小泉の何がし、いながけの棟隆、その子の茂穂、中里の常雄と、あ
はせて六人、同じ物にのりつれたる。前後よびかはしては、物語などもし、やと後れ
先だちななどもしつとゆく。西たうけ、角柄などいふ山里どもを過ぎて、吉隱にいた
る。こよはふるき書どもにも見えたる所にしあれば、心とどめて見つとゆく。猪養の岡、
又御陵なとの事、萬葉歌に吉隱の光仁天皇の御母也かごかけるをのこに問へどしらず。里人にた
づぬるにも、すべて知らぬこそくちをしけれ。又この吉隱を、萬葉集に、ふなばりとい
ふ訓をしもつけたるこそ、いとこころえね。文字もさはよみがたく、又今の里人も、た
だよなばりといふなる物をや。そも旅路の日記に、かよるさかしらはうるさきやうなれ
ど、筆のついでに聊か書きつけつるなり。なほ山のそはぢを行きく、初瀬ちかくな
りぬれば、むかひの山あひより、かづらき山、うねび山などはるかに見えそめたり。
よその國ながら、かよる名どころは、明くれ書にも見なれ、歌にもよみなれてしあれば、

うちつけに卒
爾に、只もろ見
るといきなり
さがしき一險し
き
あざ／＼と一は
つきりと
山ぶとこる山
腹、山に圍れた
る間の道
あらぬ、此世に
のあらぬ、別天地
の

かたかけたる
かたよせ掛けた
る
くれはし一樽
橋、荒木の橋
ひぢをる一折
れ曲る

ふる里びとなとのあへらん心地して、うちつけにむつまじく覺ゆ。けはひ坂とて、さ
がしき坂をすこしくだる。此坂路より、はつせの寺も里も、目のまへにちかく、あざあ
ざと見たたされたるけしき、えもいはず。大かたこよ迄の道は、山ぶとろにて、ことな
る見るめもなかりしに、さしもいかめしき僧坊御堂のたちつらなりたるを、にはかに見
つけたるは、あらぬ世界に來たらんこよちす。よきの天神と申す御社のまへにくだりつ
きて、そこに板ばしわたせる流ぞ、はつせ川なりける。むかひはすなはち初瀬の里なれ
ば、人やどす家に立入りて、物くひなんどしてやすむ。うしろは川ぎしにかたかけたる
屋なれば、波の音たど床のもとにとどろきたり。
はつせ川はやくの世より流れきて名にたちわたる瀬々の岩波
さて御堂にまるらんとていでたつ。まづ門を入りて、くれはしをのほらんとする所に、
たが事かはしらねど、だうみやうの塔とて、右の方にあり。やとのほりて、ひぢをるよ
所に、貫之の軒端の梅といふもあり。又藏王堂産靈の神のほこらなど、ならびたてり。
こよより上を、雲爲坂といふとかや。かくて御堂にまりりつきたるに、をりしも御帳か
かけたるほどにて、いと大きな本尊の、きら／＼しうて見え給へる、人もをがめば、

清少納言が云々
枕草紙に「た
だ傍に貝をいと
高く俄に吹き出
したるこそおど
るかるれ」

聞きこし云々
話に聞きし音を
今實際に聞きた
り

今やうならぬ
當世風ならざる
古風の
なにその如何
なる
しるべ一案内

かたつかたへ
片方の方へ
大とこ僧の歌

二本の杉古川
集「初瀬川古川
のべに二本ある
杉年を経てまた
もあひ見む二本
ある杉」
うけられず信
用し難し
玉葛の君源氏
物語中の人物
なきほど不在
中

かまへ一拵へ

なべて一凡て

われもふしをがむ。さてこよかしこ見めぐるに、此山の花、大かたのさかりはやと過ぎにたれど、なほさかりなるも、ところなくに多かりけり。巳の時とて、貝ふき鐘つくなり。むかし清少納言がまうでし時も、俄にこの貝を吹きいでつるに、おどろきたるよし、かきおける、思ひ出られて、そのかみの面影も、見るやうなり。鐘はやがてみだうのかたはら、今のほり来しくればしの上なる樓になんかよれりける。

名も高くはつせの寺のかねてより聞きこし音を今ぞ聞きける

ふるき歌どもにもあまたよみける、いにしへの同じ鐘にやと、いとなつかし。かよる所からは、ことなる事なき物にも、見きくにつけて、心のとまるは、すべて古をしたらぬ、心のくせなりかし。猶そのわたりたよすみありく程に、御堂のかたに、今やうならぬ、みやびたる物の音の聞ゆる、かれはなにそのわざするにかと、しるべするをのこに問へば、此寺はじめ給ひし上人の御忌月にて、このごろ千部の讀經の侍る、日ごとのおこなひのはじめに侍る樂の聲なりといふに、いとをかまほしくていそぎまるるを、まだいきつかぬ程に、はやく聲やみぬるこそ、あかすくちをしけれ。又みだうのうちを通りて、かのつらゆきの梅のまへより、かたつかたへすこしくだりて、がくもんする大とこたち

のいほりのほとりに、二本の杉の跡とて、ちひさき杉あり。又すこしくだりて、定家の中納言の塔なりといふ五輪なる石たてり。此ごろやうの物にて、いとしようけられず。八鹽の岡といふ所もあり。なほくだりて、川邊にいで、橋をわたりて、あなたのきしに、玉葛の君の跡とて庵あり、墓もありといへど、けふはあるじの尼、物へまかりてなきほどなれば、門さしたり。すべて此はつせに、そのあとかの跡とてあまたある、みな誠しからぬ中にも、この玉葛こそ、いとくをかしけれ。かの源氏の物語はなべてそらごととぞともわきまへで、誠にありけん人と思ひて、かよる所をかまへ出でたるにや。このやとおくまりたるところに、家隆の二位の塔とて、石の十三重なるあり。こはやと古く見ゆ。そこに大きな杉の二またなるもたてり。又牛頭天王の社、そのかたはらに、昔の下水といふもあり。こよまではみな山のかたそはにて、川にちかき所なり。それよりかのよきの天神にまうづ。社は山のはらに、やとたひらなる所にたよせ給へり。長谷山口、坐神の社と申せるはこれなどにもやおはすらん。されど今は、なべてさる事しれる人しなれば、わづらはしさにたづねも問はず。大かたいにしへ名ありける御社ども、いづくのも今の世にはすべて八幡天神、さては牛頭天王などにのみ來り給へ

檜原一巻向山の
龍を檜原とい
ひ、萬葉の歌に
「巻向の檜原に
立てる春霧」な
ど詠めり、下文
の意は檜の原と
て有名なれど其
檜は見えずと也

るぞかし。此わたりすべてこぶかきしけ山にて、杉ななどは多かれど、名にたてる檜原
は見えず。此川かみには檜の木もおほしと、しるべのをのこはいへりき。かくて此山の
うちめぐりはてよ、里におりける程、又雨ふり出でぬ。けふは朝より空はれそめて、や
うやう青雲も見ゆるばかりに成りしかば、今はふようなめりとて、とく取りをさめつ
る雨衣、又しもにはかにとりいでてうち著るもいとわびし。

ぬぎつれど又もふりきて雨ごろもかへすくも袖ぬらすかな

きよく一すつか
り
よろしき程なる
一かなりの高さ

されどしばしにて、里はなる上程は、きよく止みぬ。あなたよりいる口に、いと大きな
赤の鳥居たてり。さて出ではなれて、出雲村、黒崎村などいふ所をすぐ。此あたり
は朝倉宮、列木宮、長谷の朝倉の宮は雄略天皇の都、長谷の列木の宮は武烈天皇の都、
ろざきに、家毎に饅頭といふ物をつくりてうるなれば、かのふりにし宮どもの事たづね
がてら、あるじの年おいたるがみゆる家見つけて、食ひに立ちよる。さてくひつと問ふ
に、ふるき都のあととばかりは承はれど、これなんそれとたしかに傳へたるしるしの
所も侍らずとぞいふ。高圓山はいつこぞとふに、そはこのうしろになん侍るとて、を
しふるを見れば、此里よりは南にあたりて、よろしき程なる山の、いたどきばかりすこ

の
あふせ一附け

忍坂一和名抄
「忍坂」に作る、萬
葉の長歌に「こ
もりくの長谷の
山青はたの忍坂
の山は走田のよ
るしき山」とい
へり

し見えたる、今はとかま山となんいふとぞ。まことの高圓山は、春日にこそあなるを、
こよにしも其名をおふせつるは、もとよりとかまといふが似たるによりてか、又は高圓
山とつけたるを、里人のもてひがめて、かくはいふか、いづれならん。脇本、慈恩寺な
どいふ里をゆく。こよよりはかのとかま山、ちかくてよく見ゆ。此里の末を追分とか
いひて、三輪の方へも、櫻井のかたへもゆく道のちまたなり。今はそのすこしこなたよ
り、左へわかれ、橋をわたりて、多武の峯へゆく細道にかよる。此橋ははつせ川のなが
れにわたせる橋なりけり。そもくたむの峯へは、櫻井よりゆくぞ正しき道にはありけ
る。とび村などいふも、その道なりといふなれば、それも名ある所にて、たづね見ま
ほしき事どもはあれど、みな人ほどの遠きをもものがりて、今の道には物するなりけり。
東の方にいと高き山を問へば、音羽山とぞいふ。音羽の里といふも、その麓にありとぞ。
忍坂村は道の左の山あひにて、やがて此むらのかたはらを通りゆく。こよもふるき歌に
見え、神の御社などおはすなれど、ゆくさきいそがれて、さまではえ尋ねず。なほ山
のそばつたひを行きく、倉梯の里にいでぬ。こよはかのさくら井よりくる道なりけ
り。はつせより來し程は二里、たむの峯までは、なほ一里ありとぞ。しばしやすめる家

倉橋柴垣の宮
大和磯城郡櫻井
村大字下居（ホ
リキ）
このおはしける
道一あの通つて
御出でになりた
る道

ごまだう一護摩
堂、護摩は眞言
にて火をたきて
なす祈禱の解
むげに一非常に
つま一資料

にて、例の都のあとを尋ねれば、崇峻天皇の都倉橋「ク
ヲハシノ」柴垣の宮あるじ、この里中に金福寺と申す寺ぞ、
その御跡には侍る、このおはしける道なる物をとて、子にやあらん、十二三ばかりなる
わらはをいだして、案内せさす。これにつきて行きて見る。二三町ばかりも立ちかへり
て、かの寺といひしは、門なンどもなくて、いとかりそめなる庵いまりになんありける。猶なほ
はしきこともきかまほしくて、あるじの法師をとぶらひしかど、なきほどなりけり。ま
へにごまだうとて、かやぶきなるちひさき堂のあるを、さしのぞきて見れば、不動尊の
わきに、聖徳太子崇峻天皇とならべ奉りて、かきつけたる物たてり。されどむげに今や
うのさまにて、さらに古しのぶつまとなりぬべきものにはあらず。くらはし川は、やが
て此いほりのうしろをながれたり。すべてこよは山も川も名ある所ぞかし。さきの家
かへりて、また御陵みさとし阿あノ陵の崇峻天皇はいつごごととへば、そは忍坂と申す村より五丁ばか
りたつみの方に、みさどき山とて木繁き森の侍るなかに、洞の三つ侍る、ふかさは五六
十間も侍るべし、こよより程はとほけれど、そのあたり迄も、なほくらはしの地には侍
るなりといふ。いでその忍坂は、來しかたの道なりしに、さる事もしらすで過ぎこし事よ
と、いとくちをし。こよよりは二十町あまりもありといへば、え行かでもやみぬ。かの音

ふるき歌一萬葉
「くち橋の山を
高みかよごもり
に出て来る月の
光ともしき」
そ一それ

をさめ一葬り

御一御陵の略

やうある一何か
由緒のある

はかられて一推
測し得て

羽山といひつる山、こよより東にあたりて、いと高く見ゆ。倉梯山は、ふるき歌どもに
よめるを見るに、いとたかき山と聞えたれば、これやそならんと覺ゆ。さてこの里を出
でて、五丁ばかり行きて、土橋をわたりて右の方に下居といふ村あり。その上の山に、
こだかき森の見ゆるは、用明天皇ををさめ奉りし所なりと、かの家あるじの教へしは、
所たがひて覺ゆれど、猶あるやう有るべしと思ひて、のほりて見るに、その森の中に、
春日の社とてほこらあり。そのすこしくだる所に、山寺の有りけるに立ちよりて、たづ
ぬれば、あるじのほうし、かれは御陵にあらず、用明の御は、長門村といふ所にこそあ
なれといふに、さりや、かの教へしは、はやくひが事なりけりと、思ひさだめぬ。さ
れど此森も、やうある所とは見えたり。ふるき書に、文徳實錄九
又神名帳 棕橋下居神とあるも、此
里にこそおはすらめ。かの土橋を渡りては、くら橋川を左になして、ながれにそひつ
のほりゆく。此川はたむの峯よりいでて、くらはしの里中を北へながれ行く川なり。此
道に、櫻井のかたよりはじまりて、たむのみね迄、瓔珞經の五十二位といふ事を、一町
ごとにわかちて、ゑりししたる石ぶみ立ちたり。すべてかよるものは、來しかた行く
さきのほどはかられて、道ゆくたよりとなるわざなり。なほ同じ川ぎしを、やうくくに

なみー並び

みあらかー宮殿
山中にー山中な
るにも係らず

一やうならずー
同一種類のみに
てなく

のほりもて行くまよに、いと木ぶかき谷陰になりて、ひだり右より谷川のおちあふ所に
いたる。瀧つ瀬のけしきいとおもしろし。その橋をわたれば、すなはち茶屋あり。こ
こははや多武の峯の口なりとぞいふ。さて二三町がほど、家たちつどきて、又うるはし
き橋あるを渡り、すこし行きて惣門にいる。左右に僧坊どもこよらなみたてり。御廟の
御前はやうちはれて、山のはらに南むきにたち給へる、いといかめしく、きら／＼し
くつくりみがかれたる有様、めもかどやくばかりなり。十三重の塔、又惣社な、ど申す
も、西の方に立ち給へり。すべて此所、みあらかのあたりはさらにもいはず、僧坊のか
たはら、道のくま／＼まで、さる山中に、おち葉のひとつだになく、いと／＼きら／＼か
に、はききよめたる事、又たぐひあらじと見ゆ。櫻は今をさかりにて、こよもかしこも
白たへに咲きみちたる花の梢、ところからはましておもしろき事はんかたなし。さる
はみなうつしうゑたる木どもにやあらん、一やうならず、くさ／＼見ゆ。そも此山に、
かばかり花のおほかる事、かねては聞かざりきかし。
谷ふかく分けいるたむの山ざくらかひある花の色を見るかな
鳥居のたてるまへを、西ざまにゆきこして、あなたにも又惣門あり。そのまへを直さま

なからー中は
南淵の細川山一
「に立つまゆみ
弓がまくまで
人にしらす」
手向一峰

かつ／＼ー纒に

要路や云々ー道
が四方に分れた
る事を意味せる
巷の里に宿りし
故郷へ通ふ夢
も迷ふならんと
の戯

にくだりゆけば、飛鳥の岡へ五十町の道とかや。その道のながらばかりに、細川といふ
里の有りと聞くは、南淵の細川山とよめる所にやあらん。又そこに此たむの山よりなが
れゆく川もあるにや。萬葉九に「うちたをりたむの山影し
げきかも細川の瀬に浪のさむぎる」 たづね見まほしけれどえ行かず。吉野
へは、この門のもとより左にをれて別れゆく。はるかに山路をのほりゆきて、手向に茶
屋あり。やまとの國中見えわたる所なり。なほ同じやうなる山路をゆき／＼て、又たむ
けにいたる。こよよりぞよし野の山々、雲居はるかにみやられて、あけくれ心にかより
し花の白雲、かつ／＼みつけたる、いとうれし。さてくだりゆく谷かけ、いはどしる山
川のけしき、世ばなれていさぎよし。たむのみねより一里半といふに、瀧の畑といふ山
里あり、誠に瀧川のほとりなり。又山ひとつこえての谷陰にて、岡より上市へこゆる道
とゆきあふ。今日は吉野までいきつくべく思ひまうけしかど、とかくせしほどに、春の
日もいとく暮れぬれば、千俣といふ山ぶところなる里にとまりぬ、こよひは、
ふる里に通ふ夢路やたどらましましちまたの里に旅寐しつれば
此宿にて、龍門のたきのあない尋ねしに、あるじのかたりけるは、こよより上市へ直に
ゆけば一里なるを、かしこへめぐりては二里あまりぞ侍らん、そはまづ此さとよりかし

本の國一紀伊
あやしき一不思議なる

あかりあかるくなり

心ゆく一氣が進む

こへ一里あまり有りて、又上市へは一里侍ればといふ。此瀧かねて見まほしく思ひしゆゑ、けふ多武の峯より物せんと思ひしを、道しるべせし者の、さてはいたく遠くて、道もけはしきよいひしかば、えまからざりしを、今きくが如くば、かしこより物せんに、ましてさばかり遠くもあらじ物をと、いとくちをし。されどよしのの花さかり過ぎぬな、どいふを聞くに、いとど心のいそがるれば、明日ゆきて見んといふ人もなし。そもこの龍門といふところは、いせより高見山こえて、吉野へも木の國へも物する道なる。瀧は道より八町ばかり入るところに有りとなん。いとあやしきたきにて、日のいみじう早るをり、雨をこふわざするに、かならずしるし有りて、鰻のほれば、やがて雨はふるなりとぞ。

立ちよらでよそに聞きつゝ過ぐるかな心にかけてし瀧の白いと

八日、きのふ初瀬の後雨ふらで、よもの山のはもやうくあかりゆきつゝ、多武のみねのあたりにては、なごりもなく晴れたりしを、今日も亦いとよき日にて、吉野もちかづきぬれば、けさはいとど足かろく、みな人の心ゆく道なればにや、ほどもなく上市に出でぬ。此あひだは、一里とこそいひしか、いと近くて、半里にだにも足らじとぞ覺ゆる。

中にあつる一「わかれてもいもせの山の中にあつる吉野の川の上しや世の中」

なべて一凡て、概して

かぎり一頂上

よし野川、ひまもなくうかべるいかだをおし分けて、こなたのきしに船さしよす。夕暮ならねば、渡守は早ともいはねど、いせ物語に「渡し守はや船にのれ日もくれぬといふに、云々」みないそぎ乗りぬ。いもせ山はいづれぞとへば、河上のかたにながれをへだてよ、あひむかひてまぢかく見ゆる山を、東なるは妹山にしなるは背山とをしふ。されどまことに此名をおへる山は、きの國にありて、うたがひもなきを、かの中におつるよし野の川に思ひおほれて、必ずこととさだめしは、世のすきものしわざなるべし。されど、

妹背山なき名もよしやよしの川よに流れてはそれとこそ見め

あなたの岸は、飯貝といふ里なり。さて川べにそひつゝ、すこし西に行きて、丹治といふ所より、よし野の山口にかよる。やよ深く入りもてゆきて、杉むらの中に、四手相の明神と申すがおはするは、吉野の山口神社な、どにあらぬにや。されどさいふばかりの社とも見えす、此森より下にも上にも、此わたりなべて櫻のいとおほかる中を、のほりのほりて、登りはてたる所、六田のかたより登る道とのゆきあひにて、茶屋あり。しばしやすむ。此屋は、過ぎこし坂路より、いと高く見やられし所なり。こよより見わたすところを、一目千本とかいひて、大かたよし野のうちにも、櫻のおほかるかぎりとぞい

たれてふをこの者何といふ馬座者心づきなし一氣にくはす

わが國人一伊勢の人

うかどひつけて云々一ねらひて出掛けたるだけありて

かけても思ひよらざりし一全く思ひも掛けざりし

けにや一故にやあらん

うつらひ一うつりの延、散りぬるさ一暖かさかねては一前以てより

ふなる。けにさも有りぬべく見ゆる所なるを、たれてふをこの者か、さるいやしけなる名はつけけん、いと心づきなし。花は大かた盛すぎて、今は散り残りたる梢どもぞ、むらぎえたる雪のおもかけして、所々に見えたる。そもく、此山の花は、春立てる日より、六十五日にあたるころほひなん、いづれの年もさかりなると、世にはいふめれど、又わが國人の、きて見つるどもに問ひしには、かのあたりのさかりの程を見て、こゝに物すれば、よき程ぞと、これもかれもいひしまよに、真程うかどひつけて、いで立ちしもしるく、道すがらとひつゝ来しにも、よきほどならん、多くはいひつる中に、まだしからんとこそ、いひし人も有りしか、かくさかり過ぎたらんとは、かけても思ひよらざりしぞかし。なほこゝにてくはしく問ひきけば、この二月のつごもりがた、いとあたよかなりしけにや、例の年のほどよりも、今年はいとはやく咲出で侍りつるを、いにし三日四日ばかりや、さかりとはまうすべかりけん、そも雨しけく、風ふきなとせし程に、まことに盛と申しつべきころも侍らぬ様にてなん、うつろひ侍りにし、と語るをきけば、其としぐの寒さぬるさにしたがひて、おそくも疾くもあることにて、かならずそのほどと、かねては此里人もえ定めぬわざにぞ有りける。うしとらの方に、御舟山といふ山見

瀧のうへの御船の山一に居る雲の常にあらむとて我が思はな

えたり。萬葉に「瀧のうへの御船の山」されどその山は、瀧のうへのとよみたれば、此ちかき所なとにあらべくも覺えず。これも例のなき名なるべし。こゝはよし野の里に在る口にて、これよりは、町屋たちつどけり。二三町ばかりゆきて、石の階をすこしのほりたる所に、いと大きな銅の鳥居たてり。發心門としるせる額は、弘法大師の手なりとぞ。又二町ばかりありて、石の階のうへに、二王のたてる門あり。此わたりにも櫻有りて、さかりなるもおほく見ゆ。かのみふね山、こゝよりは向にちかく見えたり。まづやどりをとらんとて、藏王堂にはまるらですぎゆく。堂はあなたにむかひたれば、かの門はうしろの方にぞたてりける。そのあたりに、きよけなる家たづねて、宿をさだめて、まづしばしうちやすみ、物くひなとどして、けふ明日の事どもかたらひ道しるべすべきものやとひて、まづちかき所々を見めぐらんとて出でたつ。この借りつるやどは、箱やの何がしとかいふものにて、吉水院ちかき所なりければ、まづまうづ。この院は、道より左へいさよ

吉水院一又ヤツスギヤンとも讀めり、其草創は山上修行の時始息の庵室たりと

かどの、しばしがほどおはしましと所とて、有りしまよにのこれるを、入りてみれば、けに物ふりたる殿のうちのたよすまひ、よのつねの所とは見えす。かけまくはかしこけ

こけれど一口に掛けて申上げんは長多けれど

さうやかなる！
小さき
煙ふきつゝ煙草をすひながらひまなくすきまなく

あくよー飽く時

いにしへの心をくみてよし水のふかきあはれに袖はぬれけりかのみかどの御像、後村上帝の、御てづからさざみ奉り給へるとて、おはしますを拜み奉るにも、

あはれ君この吉水にうつり來てのこる御影を見るもかしこし

又そのかみのふるき御たから物ども、あまたありて見けれど、ことごとくはえしも覺えず。此寺の内に、さよやかなる屋の、まへうちはれて、見わたしのけしきいとよきがあるに、たち入りて、煙ふきつゝ見わたせば、子守の御社の山、むかひに高く見やられて、其山にも、かたへの谷なごにも、ひまなく見ゆる櫻どもの、今は青葉がちなるぞ、かへすがへすくちをしき。さはいへどおくある花は、さかりと見ゆるも猶あまたにて、

みよし野の花は日數もかぎりなし青葉のおくも猶さかりにて瀧櫻といふも、かしこにありと教ふ。

咲きにほふ花のよそめはたちよりて見るにもまさる瀧の白糸くるよ迄見るとも、あくよあるまじうこそ。又雲る櫻といふもあり。後醍醐のみかどの、

此花を御覽じて、

ことにて雲るのさくら咲きにけり唯かりそめの宿と思ふにとよませ給ひしも、

新葉集
世々をへてむかひの山の花の名に残るくもるの跡はふりにき

さて藏王堂にまうづ。御とばかりかよけさせて見奉れば、いとく大きな御像の、いかれるみ顔して、かた御足さよけて、いみじうおそろしきさまして立ち給へる。三はしらおはする、たど同じ御やうにて、けぢめ見え給はず。堂はみなみむきにて、たても横も十丈あまりありとぞ。作りざまいとふるく見ゆ。まへに櫻を四隅にうゑたる所あり。四本櫻といふとかや。そのかたつかたに、くろがねのいと大きな物の、鍋などいふもの様にして、かけそこなはれたるが、うちおかれたるを、何ぞと問へば、昔塔の九輪のやけ落ちたるが、かくて残るなりといふ。口のわたり六七尺ばかりと見ゆ。その塔の大きなりけんほど、おしはかられぬ。堂のかたはらより西へ、石の階をすこしくだれば、すなはち實城寺なり。本尊のひだりのかたに後醍醐天皇、右に後村上院の御位牌と申す物たよせ給へり。此寺も、前のかぎり藏王堂のかたにつどきて、後も左も右も、みなやよ

ふりにき一時代が立ちて古くなりたり
御像一藏王の像也、藏王は金剛藏王の略、金峯山に現はれ、役の行者の感見せる菩薩にて、釋迦如來の變化身といふ
けぢめ一差別

前のかぎり一前の方だけすつか

そのかみー其當
時
こころにくき
奥ゆかしき
こと所ー外の所

物よりー何より
も
はるにー遙かに

くだれる谷なり。されどかのよし水院よりは、やと程ひろし。この所は、かりそめながら五十年あまりの春秋をへて、三代の帝後醍醐天皇、後村上のすませ給ひし、御行宮の跡なりと申すはいかどあらん、事たがへるやうなれど、をりくおはしましなとせし所にてはありぬべし。今は堂も何もつくりあらためて、そのかみの名残ならねど、尙めでたく、こころにくきさま、こと所には似ず。此寺を出でて、もとの道に歸り、櫻本坊なとどいふを見て、勝手の社は、この近き年焼けぬるよし、いまはたどいさよかなるかりやにおはしますを、をがみて過ぎ行く。此やしろのとなり、袖振山とて、こたかき所にちひさき森の有りしも、同じをりにやけたりとぞ。御影山といふもこの續きにて、木しけきもりなり。竹林院、堂のまへにめづらしき竹あり。一つふし毎に、四方に枝さし出でたり。うしろの方におもしろき作庭あり。そこよりすこし高き所へあがりて、よもの山々見わたしたるけしきよ、まづ北の方にざわう堂、町屋の末につどきて、物より高く目にかよれり。なほ遠くは、多武の山、高とり山、それにつどきてうしとらのかたに、龍門の嶽なとど見ゆ。東と西とは、谷のあなたにまちかき山々あひつどきて、かの子守の御社の山は、南に高く見あけられ、いぬるのかたに、葛城山はいとくはるに

おどろかせどー
はたの者が注意
すれど

旅ごころもーたち
に係る枕詞

霞のまより見えたるなとど、すべてえもいはず、おもしろき所のさまなり。

花とのみ思ひ入りぬる吉野山よものながめもたぐひやはある

時うつる迄ぞ見をる。ゆくさきなほ見どころはおほきに、日くれぬべし、とおどろかせど、耳にも聞きいれず。くれなばなけ古今集「いざゆは春の山べにまじりなん暮れなばなげの花の隆かはし」なとどうち誦して、

あかなくに一よはねなんみよし野の竹のはやしの花のこの本

かくはいへど、ゆくさきの所々もさすがにゆかしければ、そこにたてる櫻の枝に、この歌はむすびおきて立ちぬ。さてゆく道のほとりに、何するにかあらん、櫻のやどり木といふ物を多くほしたるを見て、

うらやまし我もこひしき花の枝をいかに契りて宿りそめけむ

ゆきくして、聲ちがへの観音なとどいふあり。道のゆくてに、布引の櫻とて、なみ立てる所もあなれど、今は染めかへて、青葉のかけにしあれば、旅ごころもたちとまりても見ず。かの吉水院より見おこせし、瀧櫻、くもるざくらも、此近きあたりなりけり。世尊寺、ふるめかしき寺にて、大きなふるき鐘なとど有り。なほのほりて、藏王堂より十

八町といふに、子守の神まします。此御社は、よろづの所よりも心いれてしづかに拜み

さるは—その譯
ねぎごと—願掛
けなすなり
たじなすなり
かつ—願かなひぬと、
いみじう悦びて、
同じくは男子えさせ給へとなん、
いよく深くねんじ奉り給ひける。
われはさてうまれつる身ぞかし。
十三になりなば、
かならずみづから率てまうでて、
かへりまうしはせさせんと、
のたまひわたりつる物を、
今すこしえ堪へ給はで、
わが十一といふになん、
父はうせ給ひぬると、
母なんもの序
毎にはのたまひいでて、
涙おとし給ひし。
かくて其としにも成りしかば、
父の願はたさ
せんとして、
かひなくしう出でたよせて、
まうでさせ給ひしを、
今はその人さへなくなり
給ひにしかば、
さながら夢のやうに、

思ひ出づるそのかみ垣にたむけして麻よりしけくちる涙かな

袖もしほりあへずなん。かの度はむけに稚くて、まだ何事も覚えぬほどなりしを、やうやうひととなりて、物の心もわきまへしるにつけては、むかしの物語を聞きて、神の御めぐみの、おろかならざりし事をし思へば、心にかけて、朝ごとに此方にむきてをがみつよ、又ふりはへてもまうでまほしく思ひわたりし事なれど、何くれとまぎれつよ過

そのかみ—其當
時の意に神を掛
むげに—非常記
あるか—あろそ
か
ふりはへても—
わざ—くも

一つ—同じ事
花のたより—花
見の序で
さりとも—同じ
く心淺き様なり
とはいひながら
も

心もとなく—氣
掛りに
さなりけり—そ
れに違ひなし
ふるき歌—「神
さぶる勢根こ
しきみ吉野の水
分山を見れば悲
しも」

ぎこしに、三十年を経て、今年又四十三にてかくまうでつるも、契あさからず、年ごろの本意かなひつることちして、いとうれしきにも、おちそふなみだは一つなり。そも花のたよりは、すこし心あさきやうなれど、異事のついでならんよりは、さりとも神もおほしゆるして、うけ引き給ふらんと、猶たのもしくこそ。かよる深きよしあれば、此神の御事は、ことよそならず覺え奉りて、としごろ書を見るにも、萬に心をつけて尋ね奉りしに、吉野の水、分神社と申せしぞ、この御事ならんと、はやく思ひよりたりしを、續日本紀に水、分峯神ともあるは、まことにさいふべき所にやと、地のさまも見さだめまほしく、としごろ心もとなく思ひしを、今來て見れば、けにこのわたりの山の峯にて、いづこよりも高く見ゆる所なれば、うたがひもなくさなりけりと思ひなりぬ。萬葉七ふるき歌に、みくまり山とよめるも、この所なるを、その文字をみづわけとひがよみしで、こと所の山にしもさる名をおふせたるは、例のいかにぞや。又みくまりをよこなまりて、中頃には、御子守の神と申し、今はたどに子守と申して、子孫の榮えをいのる神と成り給へり。さて我父も、こよにはいのり給ひしなりけり。この御門のまへに櫻おほかる、いま盛なり。木の下なる茶屋に立ちよりて休めるに、尾張の國の人とて、これ

具したる一引連
れたるが
さだすぎにたれ
ど云々としま
てはあれどまん
ざらの女とは見
えず
かたらひつきて
一話しかけて親
しくなり

よさり一夜分

も花見にきつるよし、から歌このむ人にて、名もからめきたる、なにとかやわすれにき。その妻は、やまと言の葉をなん物するよし、それも具したる、やよさだすぎにたれど、けしうはあらず見ゆ。さるはをとつ日、いがの名張にやすめる所にて見し人なりけり。きのふたむのみねにも詣であひつるを、けふ又竹林るんなる所にもゆきあひて、かの男なん、小泉にかたらひつきて、詩つくりかはしなとつよ、おのれらが事をも、くはしう問ひ聞きなとせしとがや。さる事しらざりしを、又しもこよに來あひたる、しかくのよしいひ出でて、物語などする程に、春の日も入相のかねの音して、心あわたどしければ、立ちわかるよこの本にて、

今は又きみがことばの花も見んよし野の山はわけくらしけり
ゆくさきは明日のついでと残し置きて、けふはこれより宿に歸りぬ。そのよさり、かの尾張人の宿より、うたふたつかきて、見せおこせたる、かのさだすぎ人のなるべし。けふの花のおもしろかりよしありければ、かへし、

よしの山ひる見し花のおもかけもにほひをそへてかすむ月影
かくよめるは、かの歌ぬしの名、霞月とありければぞかし。くだものなとそへておく

りければ、

みよし野の山より深きなさをや花のかへさの家づとにせん

これよりは、餌袋に有りあひたるまよに、伊勢の川上茶といふをやるとて、つよみたる

紙に、

契あれや山路分け來てすぎがての木の蔭にしほしあひしも

折句
茶すこしとは、聞知りなんや。このほか人々の歌どもも、これかれ書きつけてやりつ。

京にいそぐ事あれば、明日はとくたちて上るべきよし、いひおこせたるに、

たびごろも袖こそぬるれよしの川花よりはやき人のわかれに

九日、とくおき出でて、はしちかく見いだせば、空はちりばかりもくもりなく、はれ渡

りたるに、朝日のはなやかにさし出でたるほど、木々のこのめもはるふかき山々のけし

き、霞だにけさはかよらで、物あざやかに見わたされたり。吉水院はたどはひわたる程

にて、ゆきかふ人のけはひ迄、まぢかくめのまへに見ゆ。大かた此里は、かの水分のみ

ねより片下りにつどきて、細き尾の上になん有めれば、左右に立ちなみたる民の家居ど

もも、前よりこそさりけなくたど世の常の屋のさまに見いれらるれ、うしろはみな谷よ

これ一當方
餌袋一旅行など
の時食物を入れ
て携ふるもの

茶すこし一傍註
に折句とある如
く、此五文字を
各句の頭に置き
て前の契あれや
の歌をよめる也

このめもはる一
木の芽も盛に萌
え出づる春の義
古来の慣用語也
はひわたる程一
非常に近く見ゆ
る形容
さりげなく一何
の變りたる様子
もなく

むつかしき一む
さくろしき

道しるべ案内
者

ひたつマきの一
イツとツマきて
切れ目なき
はれたる一廣々
としたる

り作りあけて、三階の屋になんありければ、いづれの家も見わたしの景色よし。さるは客やどし、又物賣りなッとするは、上の屋にて、道より直に入る所なり。次に家人のすまひは中の屋にて、その下なれば、戸口より階をくだりてなん入るめる。今一つはしを下りて、又下なる屋は、ゆかなッともなくて、たゞ土のうへに物うちおきなッ、みだりがはしくむつかしきに、湯あむる所、廁なッとは、そこにしもあなれば、日ひとひあるき困じたる旅人の足は、八重山越えゆくことちして、此階ども上り下るなん、いとくるしかりける。されど所のさまのいひしらす面白きには、さる事は物のかずならず。花ちりなばと、まつらん人ももうち忘れて、新古今西行吉野山やがていでしと思ふ身を花散りなばと人やまつらんやがてとどまりても住みなばやとさへぞ思はるよ。今日は瀧ども見にもものせんとて、例の道しるべさきにたて、かれいひ酒なッともたせて出でたつ。かの竹林院なッといふわたりまでは、いかめしき僧坊どもなッ、立ちまじりて、ひたつどきの町屋なるを、末はやうくまばらになりもてゆきて、子守のみやしるより奥は、人の家もなく、たゞ杉のおひしけりたる中をぞ分け行く。さてやうちはれたる所にいでて、左にはるか谷となづけたるところ、またいと櫻おほくて盛なり。

高根より程もはるかの谷かけて立ちつゞきたる花のしら雲

なほ行きて、大きなあけの鳥居あり。二の鳥居又修行門ともなづくとかや。金御峯かんのみたけの神社、いまは金精大明神と申して、此山しろしめす神なりとぞ。このおまへをすこし左へ下りて、けぬけの塔とて、ふるめかしき塔のあるは、むかし源義經がかたきに追れて、この中にかくれたりしを、さがし出されるとき、屋根をけはなちて逃げいにける跡なッといひて見せけれど、すべてさることはゆかしからねば、目とどめても見ずなりぬ。なほ深く分け入りて、茶屋あるところにいたる。その前を、右へいさよかくだれば、安禪寺なり。藏王堂、大阪の右大臣のたて給へるとぞ。東の方に木しけき山は、青根が峯なりとて、此だうのまへよりむかひに近く見えたり。二三町おくに、何とかや事しき名つきたる堂あり。そのうしろへ、木の下道を二丁ばかりくだりたる谷陰に、苔清水とて、岩間より水のしたより落つる所あり、西行法師が歌とて、まねびいふをきくに、さらにかの法師が口つきにあらず、むけにいやしきえせ歌なり。なほ一町ばかり分け行きて、かのすめりし跡といふは、すこしたひらなる所にて、一丈ばかりなるかりそめのいほり今もあり。櫻もこよかしこに見ゆ。

まねびいふ一案
内者が陳べ立つ
る

うかぶ—思ひ立
さるゝ意、水の
縁語

花見つゝすみし昔のあととへばこけの清水にうかぶおもかけ

このちかきころ、或法師もみとせばかりこよにこもりけるとぞ。京にて高野槇といふ木を、こよの人はたどにまきとぞいふ。これを思へば、いにしへ檜のほかにまきといひしは、この木なるべし。これはこよに必ずいふべき事にもあらねど、此わたりの山に、此木のおほかるにつきて、人のたづねけるに、いらへつることばを聞きて、ふと思ひよれるゆゑ、筆のついでにかきつけつるぞ。本の道を安禪寺のまへの茶屋迄かへりて、御嶽へまうづる道にかより、三町あまりも来つらんと思ふ所に、しるべのいしぶみたてる道を、左へ分れゆく。みたけの道へは、これより女はのほらすとぞ。かの見えし青根が峯は、すなはち此山なりけり。すこし行きて、東のかたの谷の底はるかに、夏箕の里見ゆ。ゆきくゝて又東北の谷に見くださるゝ里をとへば、國栖とぞいふ。此わたり、うちはれたる山の背をつたひ行くほど、いと遠し。さてくだる坂路のけはしさ、物に似ず。されど上るやうに、くるしくあらず。此坂をくだりはつれば、西河の里なり。安禪寺より一里といひしかど、いととほく覺えき。山の中につままれて、いづかたも見はるかす所もなき里なるを、家毎に紙をすきて、門におほくほせる、こはいまだ見ぬわざなれば、

物に似ず—噂ふ
べき物なし

ことなる事—格
別面白き事
貝原翁—益軒
せめて—努めて

なかく—おろか
に—却つて實景
に疎く

ゆかしくて、足もやすめがてら立ち入りて見るに、一ひらづつすき上げては、重ねくするさま、いとめづらかにて、たつ事もわすれつ。さて右の方へ三町ばかり里をはなれ行きて、谷川にわたせる板橋のもとよりわかれて、左へいさよかのほり、山のかひをあなたへうち越ゆれば、すなはち大瀧村なり。此間は五町ばかりもあらんか。此大瀧の里のあなたのはづれは、すなはちよし野川の川のべにて、瀧といふもやがて川づらなる家のまへより見やらるゝ早瀬にて、上より直さまにおつる瀧にはあらず。此瀧は、遠くはことなる事もなし、ちかくよりて見よと、貝原翁がをしへおきつる事もあれば、岩のうへをとかく傳ひゆきて、せめてまぢかくのぞき見るに、そのわたりすべてえもいはず大きないはほどもの、こよら立ちかさなれるあひだを、さしも大きな川水の、はしりおつるさま、岩にふれてくだけあがる白波のけしきなど、おもしろしとおおそろしとも、いはんは中々おろかに成りぬべし。むかしは筏も此瀧を直にくだしけるを、あまりに水のはけしくて、度毎にくだしわづらひし故に、いはほのやよなだらかなる所をきり通して、今はかしこをなんくだすなると、をしふる方を見れば、あなたさまにのみち分れておちゆく水、けにこなたの瀬よりすこしはのどやかに見えたり。あはれ今くだし

いかで何卒
物か一物かな、
かは咏歎の助辭

とぞめ一終り

いたはりもなく
一何の苦もなく

盃のながれ云々
一盃を廻す方は
忘れ果てたり
平瀬一平かなる
流れ
引きはへ一引き
延べ

ふたがりて一塞
りて
うちかたぶきつ
つ一頭をひねつ

来むいかだもがな、いかで此早瀬くだすさま見むといひつよ、かれいひくひ、酒な
のみをる程に、みなかみはるかにこの筏くだしくる物か。やうくちかづき来て、此
瀧のきはになりぬれば、のりたる者どもは、左右の岩の上にとびうつりて、先なる一人
綱をひかへて、みな流れにそひてはしりゆくに、筏の早く下るさまは、矢などのゆくや
うなり。さて岩のとぢめの所にて、人ども皆筏へかへる。そこは殊に水の勢はけしく
て、ほどばしりあがる浪にゆられて、うきしづむ丸木の上へ、いたはりもなくとびうつ
る様、いとくあやふき物から、めづらかにおもしろきこと、たぐひなし。みな人此筏
に見入りて、盃のながれはいつちならんとも問はずなりぬ。さて此筏、瀧をはなれて平
瀬にくだりたるをよく見れば、一丈二三尺ばかりの長さなる樽を、三つ四つづくみ
らべて、つぎくにつぎつなぎつどけたるは、いとく長く引きはへたり。人は四人なん
のれりける。川瀬は此瀧の下にて、あなたへをれて、むかひの山あひに流れいる。右も
左も物をつき立てたるやうなる岩岸の下に、さるいかだをしも下しゆくけしき、たど繪
に書けらんやうに見ゆ。かよる所にては、中々に口ふたがりて、歌もいでこぬを、わざ
とうちかたぶきつよ、思ひめぐうさんも、さまあしければ、さてやみぬ。いにしへ吉野

て
瀧のみやこ一
「幸于吉野宮之
時柿本朝臣人麿
作」と題する歌
の末句「岩ばし
る瀧のみやこは
見れど飽かぬか
も」
蜻蛉一原本凡て
あきつと濁りた
れど、慣例に従
ひて清音に改む
瀧のうへの御舟
の山一に居る
雲の常に有らむ
と我が思はなく
に萬葉
かへり見る方一
後方
なべて一凡て

の宮と申して、みかどのしばくおはしましよところ、柿本人麿主の、御供にさぶらひ
て、瀧のみやことよみけるも、この大瀧によれる所なりけんかし。そのをりくの歌ど
もにあはせて思ふに、蜻蛉の小野などいひしも、また瀧のうへの御舟の山も、かなら
ず此わたりなりけんこと、うたがひもなければ、今もさいふべきさましたる山やあると、
心をつけて見まはすに、この川づらより左の、すこしかへり見る方に、さもいひつべき
山あり。船にしていはんには、前後たひらに長くて、中央ばかりに一きは高く、屋形と
いひつべき所ある山なり。これやさならんとは思ひよれど、いかにあらん、おほつかな
し。そは瀧の所よりは、すこし下さまにしあなれば、たきのうへといへるには聊かた
がへるやうにもあれど、なべて此わたりならん山は、などかさいはざらん。古忍ばん
人、またくもこよに來まさば、必ずこよろみ給へ。やがて此里の上なる山ぞかし。か
くて又里の中を通りて、西河のかたへかへり、此度は、さきの板橋をわたりて、石の階
を一町ばかりものほり、こしけき谷かけを分け入りて、所謂せいめいが瀧を見る。これ
はかの大瀧とはやうかはりて、しけ山の岩のつらより、十丈ばかりが程、ひた下りに落
つる瀧なり。この見る所は、かたはらよりさし出でたる岸のうへにて、近う瀧の半にあ

とよみて一鳴動して

たりたれば、上下を見あけ見おろす。上はせばきが、やうく一丈あまりにもひろごりておちゆく。末はこなたかなたよりみ山木もおひかよりて、をぐらき谷の底なれば、穴などをぞくやうなる所へ、山もとよみておちたぎるけしき、けおそろしく、そごろさむし。かたはらに小さき堂のたてる前より、岩根をよぢ、つたかづらにかよりつよ、すこしのほりて、瀧のうへを見れば、水はなほ上より落來て、岩淵に入る。この淵二丈ばかりのわたりにて、程はせばけれど、深く見ゆ。瀧はやがてこの淵の水のあまりて落つるなりけり。こよに里人の岩飛といふ事して見するよし、かねて聞きしかば、さきに西河にてさるわざする者やあると尋ねしかど、此ごろは長雨のなごりにて、水いとおほければ、あやふしとてするものなかりき。さるはこのかたへなるいはのうへより、淵の底へとび入りて、うかび出づる事をして、錢をとるなるを、水おほくて、はけしき時には、浮みいづるきはに、もしおしながされて、銚子の口にかよりぬれば、命堪へずとなんいふなる。銚子の口とは、淵より瀧へおちんとする際をいふなりけり。そもく此瀧を清明が瀧ともいふは、蜻蛉の小野によりたる名にて、蟲の蜻蛉ならんと云ひし人もあれど、さにはあらじかし。里人は蟬の瀧ともいふなれば、はじめはなべてさいひけむ

さかしらにぞ一生六ヶ敷誤りてかよひ一似通ひ

萬よりもあやしきは一何よりも不思議なる事には

さりげ—そんを様子

を、後に清明とはさかしらにぞいひなしつらん。いま瀧のさまを見るに、上はほそくて、やうく下さまのひろきは、蟬のかたちにとよう似たるに、鳴音はたかが聲にかよひたなれば、さも名づけつべきわざぞかし。又その蟬のたきは、これにはあらず異瀧なりともいへど、里人はすなはち此瀧のことなりとぞいひける。そはとまれかくまれ、かの蟲の蜻蛉は、ひが事なるべし。かけろふの小野とは、かの蜻蛉野をあやまりたる名にて、もとよりさる所はなきうへに、そのあきつ野はた、此わたりにはあらじ物をや。さて此瀧のながれを音無川といひて、萬よりもあやしきは、月毎のはじめ半月は、上津瀧に水といふものなく、後の半月は、又下津瀧に水なしとかや。さて上より來る水は、いづちへいかにして流れゆくぞといふに、石のはさま砂の下なとへ、やうくにしみ入りつよ、なくなりては、遙かに下にいたりて、又やうくにわき出でつよ、流れゆくなりといふは、さる事も有りぬべけれど、ころをしも遠へで、上つせと下つ瀧と、たがひにしかかはらん事は、猶いとあやしきわざなりかし。されど今はたゞ世の常の川にて、さりけも見えぬは、此ごろ水のおほき故なりとぞいふ。すなはちかの板橋のかよれるも此川にて、しもはにじかうの里中をなん流れ行くめる。かの里にかへりて、また今朝く

こよなく—非常

け—故

あはひなる—間
なる

だりこし山路にかよる。今朝はさしもあらざりしを、のほるはこよなく苦しうて、同じ道とも思はれず。さてのほりはてて、右につきたる道へわかれて、又しものほる山は、佛が峯とかいひて、いみじうけはしき坂なり。さてくだる道はなだらかなれど、あしつかれたるけにや、猶いとくるしくて、茶屋の有る所にしばしとてやすむ。こよにて鹿鹽神社の御事をたづねたれば、そは檜尾西河大瀧と、三村の神にて、西河と檜尾とのあはひなる山中に、今は大藏明神と申しておはするよし語る。この道よりはほど遠しと聞けば、えまうです、なほ坂路をくだりゆくほど、右のかたを見おろせば、山のこしをめぐりて、吉野川ながれたり。國栖夏箕なども川べにそひて、こよよりはちかく見ゆ。さて下りはてたる所の里を桶口といひ、そのむかひの山本なる里は宮瀧にて、よし野の川は此ふた里のあひだをなん流れたる。西河よりこよ迄は一里あまりも有りぬべし。かの國栖なつみななどは、此すこし川上なり。しもは上市へも程ちかしとぞ。此わたりも、いにしへ御かり宮ありて、おはしましつと、逍遙し給ひし所なるべし。宮瀧といふ里の名も、さるよしにやあらん。こよの川邊のいはほ、又いとあやしく珍かなり。かの大瀧のあたりなるは、なべて稜なくなだらかなるを、こよのはかどありて、みなするどきが、

岩のかぎり—岩
ばかり

ならはぬ—斯る
事にはなれざる

うるはしく—端
然と

ひたつどきにつどきて、大かた川原は岩のかぎりなり。此岩どもにつきても、例の義經がふる事とて、何くれとえもいはぬことどもを語りなせども、うるさくて聞きもとどめず。此わたり川のさま、さるいはほの間にせまりて、水はいと深かれど、のどやかに流れて、早瀬にはあらず。さて岩より岩へわたせる橋、三丈ばかりもあらんか。宮瀧の柴橋といひて、柴してあみたる、渡ればゆるぎて、ならはぬ心地にはあやふし。又こよにまかの岩飛するもの有り。かたらひ來てとばす。とぶ所はやがて此橋の下なる、こなたかなた岸はみな岩にて、屏風などを立てたらんやうにて、水ぎはより二丈四五尺ばかりの高さなるを、かなたの岩岸の上よりとぶを、こなたの岸より見るなりけり。その男、まづ著物を皆ぬぎて、はだかに成りて、手をばたれて、ひしと腋につけて、目をふたぎ、うるはしく立ちたるまよにて、水の中へつぶりるとびいるさま、めづらしき物から、いとおそろしくて、まづ見る人の心ぞきえ入りぬべき。此比は水高ければ、深さも二丈五尺ばかり有りとなん。しばし有りて、やと下へうかびいでて、きしの岩にとりかよりてあがりきて、苦しげなるけしきもなく、なほ飛びてんやといへど、おそろしさに、又はとばせで止みぬ。さるは始のごとして、うしろさまに向ても、かしらを下にさかさまに

もほろけならねば一里なみ大抵の事をらねば

象の小川「昔見し象の小川を今見ればよきにさやけくなりけるかも」
象山「み吉野の象山際の木ぬれにはこくだも騒ぐ鳥の聲かも」
かのにくき名「前日一目千本の事を舒して、たれてふをこの者かざる賤しげなる名はつけけん」といへり

も、すべて三度迄とぶなりとぞ。大かた此わざは、こよらの年をへて、ならひうる事にて、おほろけならねば、一里のうちにも、わづかに一二二人ならではし得るものなしとぞ、このをのこはいひける。これよりかへるさの道のほどは、一里にたらずとはいふなれど、日も山の端ちかく成りぬれば、今はとてやどりにおもむく。川邊をはなれて、左の谷陰にいり、四五町もゆきて、道のほとりに、櫻木の宮と申すあり。御前なる谷川の橋をわたりてまうづ。さて川邊をのほり、喜佐谷村といふを過ぎて、山路にかゝる。すこしのほりて、高瀧といふ瀧あり。よろしき程の瀧なるを、一つどきにはあらで、つぎくにきざまれ落つる様。又いとおもしろし。象の小川といふは、此瀧のながれにて、今過來し道より、かの櫻木の宮のまへを経て、大川におつる川なり。象山といふも、此わたり事なるべし。櫻いと多かる、今はなべて青葉なるなかに、おのづから散りのこれるも所々に見ゆ。大かた此よし野のうちにも、ことに櫻の多きは、かのにくき名つきたる所、さては此わたりと見えたり。瀧を右の方に見つゝ、なほ坂をのほり行きて、あなたへ下る道は、なだらかなり。其ほどにも櫻はあまた見ゆ。されどいにしへにくらべば、いづこもいづこも、今はこよなう少なくなりたらんとぞ思はるよ。さるは此山のならひとて、

もしけられて一壓迫せられて
まことや一さういへばほんに

流れての世一後世、水の縁語

此木をきる事をいみじくいましむるは、神のをし給ふ故なりとこそいふなるに、今は杉をのみいづこにも多くうゑ生したるが、たちのびて茂りゆくほどに、櫻はその影におしけたれて、おほくは枯れもし、又さらぬもかじけ行きて、枝くちをれなとのみすめるを、神はいかどおほすらん。まろが心には、かく杉植うるこそ、伐るよりも櫻のためはこよろうきわざとおほゆれ。かくて暮れはてよぞ、やどりにかへりつきぬる。まことや大瀧の歌、かへるさの道にて、からうじてひねり出でたる。

流れての世には絶えけるみ吉野の瀧のみやこにのこる瀧つ瀬
宮瀧のも、
いにしへの跡はふりにし宮たきに里の名しのぶ袖ぞぬれける

菅笠日記下の巻

十日、けふは吉野をたつ。きのふのかへるさに、如意輪寺にまうづべかりけるを、日暮れて残しおきしかば、けさ殊更にまうづ。此寺は、勝手の社のまへより谷へくだりて、むかひの山なり。谷川の橋をわたりて、入りもて行く道、さくら多し。寺は山の腹に、いと物ふりてたてる、堂のかたはらに寶藏あり、藏王権現の御像をすゑたり。この御づしのとびらのうらなる繪は、巨勢金岡がかけるといふを見るに、けにいと古く見どころある物なりけり。それに後醍醐のみかどの、御みづからこの繪の心をつくりて書かせ給へる御詩とおしたり。わきにこのみかどの御像もおはします。これはた御てづからきざませ給へりとぞ。其外かよせ給へる物、又御手ならし給ひし御硯やなにやと、とうでて見せたり。又楠正行が軍にいでたつとき、矢のさきして塔のとびらに、かへらじとかねて思へば梓弓なきかすにいる名をぞとどむるといふ歌をゑりおきたるも、此くらに残れり。みかどの御ためにまめやかなりける人な

巨勢金岡一清
和、陽成、光孝、
宇多、醍醐五朝
に仕へし有名な
る畫工

とうでて一取出
して

まめやか一忠誠

つき一樂さ
かたへ一部分

かゝる一掛さ、
斯る

れば、かの義經なんどとはやうかはりて、あはれと見る。又塔尾の御陵と申して、此堂のうしろの山へすこしのほりて、木深き蔭に、かの帝のみさどきのあるに、まうでて見奉れば、こだかくつきたるをかの、木どもおひしけり、つくりめぐらしたる石の御垣も、かたへはうちゆがみ、かけそこなはれなんど、さびしく物あはれなる所なり。そのかみ新待賢門院のまうでさせ給ひて、
新葉集
九重の玉のうてなも夢なれや苔の下にし君を思へば
とよませ給へる御歌なんど、思ひ出で奉りて、
苔の露かよるみ山のしたにても玉のうてなはわすれしもせじ
と思ひやり奉るも、いとかしこし。本のやどりにかへり、しばしやすみて、此度は六田の方へくだらんとて出でたつ。里をはなれて、山の背をゆきくゝて、坂をくだりはてたる所なん、六田の里なりける。今は里人はむだとぞいふめる。よし野の川づらにて古柳をおほくよめりける所なれば、今もありやと見まはせど、
有りとしもみえぬむつだの川柳春のかすみやへだてはつらん
舟さし渡りて、かなたの川べをやとくだりゆきて、土田といふ所は、上市の方よりきの

そばきり一審
切、普通に所謂
そば也

たむけをかぎり
一峠がましまひ

なべたる一竝べ
たる
あやしき一不思議
の

國へかよふ道と、北よりよし野へいる道とのちまたなる驛なり。六田より一里といへどちかよりき。こよにてそばきりといふ物をくふ。家もうつは物も、いとあやしききたなけなれど、椎の葉よりはと思ひなぐさめて食ひつ。萬葉に「家にあればけにもるいひを草枕旅にしあればしひの葉にもる」これよりつほ坂の觀音にまうでんとす。たひらなる道をやゆきて、右の方に分れて、山ぞひの道にいり、畑屋なんといふ里を過ぎて、のほりゆく山路より、吉野の里も山々も、よくかへり見らるゝ所あり。

かへりみるよそめも今をかぎりにて又もわかるゝみ吉野の里

よしのの郡も此たむけをかぎりなりとぞ。くだる方に成りては、大和の國中よく見わたさる。比叡の山、愛宕山なども見ゆる所なりといへど、今は霞ふかくて、さる遠きところ迄は見えず。さてくだりたる所、やがて壺坂寺なり。此寺は高取山の南の谷陰にて、土田より來し道は五十町とかや。二王門有りて、普門觀とかける額かゝれり。觀音のおはする堂には、南法華寺とぞある。三層の塔も堂のむかひにたてり。奥の院といふはやや深く入る所にて、佛のみかたどもあまたつくりなべたるあやしき岩ありとて、みな人はまうづるを、われはいさゝか心地なやましくて、え物せず、まへなる茶屋に入りてた

城一高取城、下
文四五六頁の頭
註参照

かけて一體に

めらひをるに、やゝ待つ程へて、人々はかへり來て、有りつるやうかたるを聞けば、誠にあやしき物なりけり。こよより右へ谷の道を十町ばかりくだり行きて、清水谷といふ里にいづ。此里は、國中よりあしはらたうけといふを越えて吉野へいる道なり。一町ばかりはなれてあなたは、土佐といふ所、町屋つゞけり。高取山の麓にて、この町なかより、山のうへなる城ちかく見あけらる。大かた此城は、たかき山の峯なれば、いづかたよりもよく見ゆる所なりけり。檜隈は此わたりと、かねて聞きしかば、たづねて行く。この土佐のまちをはなると所より、右へ三町ばかり細道をゆきて、かの里なり。例の翁たづねいでて、いにしへの事ども問へど、さだかには知らず。都のあととは聞きつたふるよし、又御陵どもは、この近き平田野口などいふ里にあなる、いにしへはそのわたりかけて、ひのくまとなんいひしと語る。さて里の神の社なりとて、森のあるつゞきなる所に、高さ二丈ばかりなる、十三重の石の塔の、いとふるきが立てる、めぐりを見れば、いと大きな石すゑありて、塔なとの跡と見ゆ。ちかきころ、この石をおのが庭にすゑんとて、あるものの掘らせつれど、あまりに大きにて、掘りかねてやみぬる、程もなく疾みふして死にけるは、このたよりにて有りけりとなんいふなる。その前にか

檜隈入野宮
ヒノクマノイホ
リノノミヤと訓

やがて一即ち

なにがし一茶、
それがし

むげに全く
こればかり一自
分の寺の名だけ
あはつけさには
淡々しく情趣
なき心にしては

りそめなる庵いほりのある、あるじのほうしに、この塔の事たづねしかば、宣化天皇の都のあ
とに檜隈入野宮 寺たてられて、いみじき伽藍がらんの有りつるが、やけたりし跡あとなり、このあ
たりにその瓦かはらども、今もかけのこりて多くあり、と教しふるにつきて見れば、けに此庵いほりの
まへにも、道のほとりにも、すべてふる瓦かはらのかけたる、數かずもしらず、つちにまじりてあ
るを、一つ二つひろひとりて見れば、いづれも布目ぬのめなんどつきて、古代こだいのもの見え
り。此庵いほりはやがてかの伽藍がらんのなごりといへば、そも今は何寺なにでらと申すぞと問とへば、だうく
わうじといふよしこたふ。もじはいかにかき侍ると又とへば、此ほうしかしらうちふり
て、なにがし物かよねば、そのもじまでは知り侍らずといふにぞ、なほ問はまほしき事
も、ゆかしささめつる心地こころして、とはずなりぬ。わがすむ寺の名のもじだにしらぬほ
うしも、世よには有る物なりけり。むげに物かよすとも、こればかりはしかなくと人に聞
きおきても知りをれかし。さばかりのあはつけさには、いかで古いにしへの事をしも、ほのく
聞きおきてかたりけむとをかし。後に異里人ことさとびとにきけば、道の光ひかりとかくよしなり。されど
それもいかどあらん、知らずかし。大かた此日記このにきよ、たゞ物の心もしらぬ里人さとびとな
どといふを、きけるまよにしるせる事し多ければ、かたりひがめたる事もありぬべし、又聞

きたがへたるふしな、ども有るべければ、ひがことどもまじりたらんを、後によくか
むがへたどさむことも、物うくうるさくて、さておきつるを、後みん人、みだりなりと
な怪あやしみそ。これはかならずことにいふべき事にもあらねど、思ひ出いででつるまよになん。
檜隈川ひのくまがはといふべき川は見えざれば、

聞きわたるひの隈川くまがははたえぬともしばし尋ねよ跡をだに見ん

古今集に「ささのくまひのくま川に
駒とめてしばし水かへ影をだに見ん」

人々もろ共に、こよかしことたづねありきけるに、たゞいさ

さかなる流れは、一つ二つ見ゆれど、これなんそれと、たしかには里人さとびともしらずなん有
りける。さてをしへしまよに、平田といふ里さとにいたりて、御陵みさきをたづぬるに、野中の小
高たかき所に、松三まつさんもと四本よももおひて、かたつ方くづれたるやうなる塚つかあり。これなん文武天
皇のみさゞきと申す。そこを過ぎて、又野口といふ里さとにて、こよかしこ尋ねつと、田の
あぜづたひの道をたどり行きて、一つの御陵ある所にいたる。こはやと高たかくのほる岡の
うへに、いと大きな石してかまへたる所あり。みなみむきに、横よこもたても二尺あまり
なる口のあるより、のぞきて見れば、窟いほのやうにて、内はせばく、下したは土つちにうづもれ
て、わづかにはひ入るばかりなり。うへにはたてよこ一丈あまりの平ひらなる大石おおいしを、物の

聞きわたる一永
らく話に聞き居
たる、わたるは
川の縁語

かまへ一構へ、
作り

高取の城—高取
城はもと南北争
亂の際吉野方の
防備を起せしに
初まり、後越智
本多兩氏を経て
寛永十七年植村
氏之に代り世襲
して近時に至れ
り
あやしき—賤し
思ひしもしるく
—思ひしが果し
てその通り

いづれか云々—
どの御陵なりや
ふ事は今明確に
知り難し—
ひが事し—
さへ—しは強辭
並河のなにがし
—名は永—字は

宗永、誠所と號
す伊藤仁齋に學
び後江戸にて教
授の業に従へり

おぼろげならず
—なみ一通りな
らず
たゞに—まつす
ぐに

さながらも—原
形のまゝそつく
りも

ふたのやうにおほひたり。そのうしろにつどきたる所、一丈四五尺がほど、やよたひらにて、中のくほみたるは、ちかき世に高取の城きづくとして、大石どもほりととりしあととなりといへり。みだれたる世に、物の心をしらぬ、むくつけきものよふのしわざとはいひながら、いともかしこき帝の御陵をしも、さやうにほりちらし奉りけん事の心うさよ。そこに藁火な、どたきすてたる跡の見ゆるは、あやしき兒なんどのすみかにつるなめり、と思ひしもしるく、やがて此御山の下に、さるものども多、あつまりるたりき。これを武烈天皇の御陵なりと申すなるは、所たがひて覺えし故に、そのわたりにて、これかれに問ふに、みなさいへるは、いかなることにか。すべてこの檜隈に御陵と申すは、延喜の式にのせられたるを見るに、檜隈、坂、合陵は、磯城島宮に天下しろしめし、天皇、同じき大内の陵は、飛鳥淨御原宮に、御、宇、天皇、又藤原の宮に、御、宇、天皇、同じき安古の岡の陵は、同じ宮にあめの下しろしめし、文武天皇にておはします。このうち、いづれかいづれにおはしますらん、今はさだかにわきまへがたし。こよなるを武烈としも申すやうなるひが事しあれば、里人のつたへも、もはらたのみがたくこそ。さいところ並河のなにがしが、五畿内志といふ書をつくるとして、公にも申して、その國々所

所を、こまかにめぐりありきて、かよる事もいとくねんごろに尋ね奉りし事、此わたりの里人も、年おいたるはおほえるて、そのをりしかく、な、ど語るなり。けにかの書には、何のあとはその里のそこにあり、その村に今は何といふ塚なん、その御陵なるな、どやうに、いともさだかに記したるは、なにをしろしに定めつるにか。むげにちかき事なれど、その世まではなほ里人もよくわきまへしり居て、かたりけるにや。又おしあてにも定めつるにやと、うたがはしき事はた多かるを、此度かくこよかしこと、かつがつも尋ぬるに、とかくさだかならぬにつけては、さまでも詳かには、いかにして尋ねえけん、いさをの程はおほろけならず思ひしらる。此みさどきよりすこし行きて、程なく廣き道にいでぬ。こは土佐より岡へたどにゆく道なりけり。やよゆきて左のかたに見ゆる里を、川原村といふ。このさとの東のはしに、弘福寺とてちひさき寺あり。いにしへの川原寺にて、がらん石すゑ、今も堂のあたりには、さながらも、又まへの田の中な、どにちりほひても、あまた残れり。その中に、もろこしより渡りまうでこし瑪瑙石なりとて、眞白に透くやうなるが一つ、堂のわきなる屋のかべの下に、なかばかくれて見ゆるは、けにめづらしきいしすゑなり。尋ねてみるべし。里人は觀音堂といふ所塚

菅笠日記下

よろしきほどな
る一かなり立派
なる

て、道より程もちかきぞかし。つぎに橋寺にまうづ。川原寺よりむかひに見えて、一町ばかりなり。此寺は今もやよひろくて、よろしきほどなる堂もありて、古の石すゑはた残れり。橋といふ里も、やがて此寺のほとりなり。日くれぬれば、岡の里にとまる。かの寺よりちかし。此あひだに土橋をわたせる川あり。飛鳥川はこれなりとかや。いまの岡といふ所は、すなはち日本紀に飛鳥岡とある所にや。さらば岡本宮も舒明天皇、皇極天皇、齊明天皇三代京その傍とあれば、遠からじとぞ思ふ。又清御原宮はその南とあなれば、その跡もちかきあたりなるべし。

おひずり一巡禮
の羽織る白き袖
なし様のもの
こみて一雑沓し
て
ゆすりみちて
聲のおびたどし
き形容
露をかぞち一岡
寺は三十三番第
七の札所にて

十一日、朝まだきにやどりをたちて、岡寺にまうづ。里より三町ばかり東のやまへのほりて、二王門あり。額に龍蓋寺とあり。この門よりまへの道の左のかたに、八幡とて社もあり。さて御堂には、観音の寺々をがみめぐるものども、おひずりとかいふあやしけなる物をうち著たる、男女おいたるわかき、数もしらすまうでこみて、すきまもなくるなみて、御詠歌とかやいふ歌を、大聲どもしほりあけつよ、一堂のうちゆすりみちてこたふなるは、いとみよかしかましく、大かた何事ともわかぬ中に、露をかでの庭の苔などいふこと、ほのくきこゆ。又岡の里にかへり、三四町ばかりも北へはなれ行

其詠歌に「けさ
見れば露岡寺の
庭のこけさなが
ち瑠璃の光なる
らん」

たゞさまに—ま
つすぐに

きて、右の方の高きところへ、一町ばかりのほりたる野中に、あやしき大石あり。長さ一丈二三尺、よこはひろき所七尺ばかりにて、硯をおきたらんやうして、いと平なる。中の程にまろに長くゑりたる所あり。五六寸ばかりのふかさにて、庭もたひらなり。又そのかしらといふべきかたに、同じさまに小さくまろにゑりたる所三つある、中なるは中に大きにて、はしなる二つは、又ちひさし。さてそのかしらの方の中にゑりたる所より、下さまへほそき溝を三すぢゑりたる、中なるは、かの廣くゑりたる所へ、たゞさまにつどきて、又石の下といふべき方のはし迄とほり、はしなる二すぢは、なよめにさがりて、石の左右のはしへ通り、又そのはしなるみぞに、おのく枝ありて、左右にちひさくゑれる所へもかよはしたり。かくて大かたの石のなりは、四すみいづこも角なくまろにて、かしらのかた廣く、下はやよ細れり。そもく此石、いづれの世にいかなるよしにて斯くつくれるにか、いと心得がたき物のさまなり。里人はむかしの長者の酒ぶねといひつたへて、このわたりの畠の名をも、やがてさかぶねといふとかや。此石むかしは猶大きなしを、高取の城きづきしをりに、かたはらをば多くかきとりもていにしとぞ。すこし行きて、飛鳥の里にいたる。飛鳥寺は里のかたはしに、わづかにのこりて、

丈六一丈六尺

あせて一河れて

門なッどもなくて、たどかりそめなる堂に、大佛と申して、大きな佛のおはするは、丈六の釋迦にて、すなはちいにしへの本尊なりといふ。けにいとふるめかしく、たふと見ゆ。かたへに聖徳太子のみかたもおはすれど、これはいと近き世の物と見ゆ。又いにしへの堂の瓦とてあるを見れば、三四寸ばかりのあつさにて、けにいとふるし。此寺のあたりの田のあぜに、入鹿が塚とて、五輪なる石、半はうづもれてたてり。されどさばかり古き物とはみえず。飛鳥の神社は、里の東の高き岡のうへに立たせ給ふ。籠なる鳥居のもとに、飛鳥井の跡とて、水はあせて、たど其かたのみ残れる、これも誠しからずこそ。石の階をのほりて、御社は四座、今はひとつかり殿におはします。此御社、もとは甘南備山といふに立せ給ひしを、淳和のみかどの御世、天長六年に神のさとし給ひしまよに、鳥形山といふにうつし奉り給へりしよし、日本後紀に見えたり。されば古、飛鳥の神なみ山とも、神岳ともいひしは、こよの事にはあらず。そこはこよより五六町西のかたに、今いかづち村といふ所なり。かくて今の御社は、かの鳥形山といふ所なり。さればこそ、かの飛鳥寺をも鳥形山とはなづけけめ。今もわづかに一町ばかりへだたれば、いにしへ寺の大きなりけん時は、今すこし近くて、此御山のほとり迄も有りつる故

そは一組、山腹の道

うけられず一信と難し

に、さる名は有るなるべし。さて此御山の南のそはを、二町ばかりゆきて、道のほとりの森の中に、大きな石どもをたてめぐらしたる所あり。中はすこしくほまりて、廣さ一丈あまり、横は六七尺も有りぬべし。こは誠の飛鳥井の跡などにはあらぬにや。世に鎌足の大臣の生れ給ひしところぞといふなるは、いとうけられず。此やがてちかき所に、大原寺といふ有り。藤原寺ともいふよし。ちひさき寺なれど、いとよらに造りみがきて、めにたつ所なれば、入りて見るに、堂なッどはなく、たどきらよかに作りたる御社あり。大原明神と申して、かのかまたりの大臣の御母をまつれる神なりとかや。又此寺は、持統天皇の藤原の宮の跡なるよし、こよの法師はかたりけり。大原の里は、此南の山ぞひに、まぢかく見えたり。藤原といふも、すなはちこの大原の事なりといふは、さも有りぬべし。されど持統天皇の藤原の宮と申すは、こよにあらず。そは香山のあたりなりし事、萬葉の歌どもにて知られたり。かねてはこの大原といふ里、かぐ山のちかき所に有りて、藤原の宮もそこならんところと思ひしか。今来て見れば、かぐ山とは遙かにへだたりて、思ひしにたがへれば、いとくおほつかなけれど、なほ藤原の里は、この大原の事にて、宮の藤原は別にかの香山のあたりにぞありけんかし。これより安倍

萬葉の歌一巻一「藤原宮御井歌」と題する長歌

やつり川上水底絶えず行く水のつぎてぞ戀ふるこの年頃は

をさくし一殆んど

しりへ一後方

へ出づる道に、上やとり村といふあり。文字には八釣とかげば、顯宗天皇の近飛鳥八釣宮の所なるべし。里のまへに細谷川のながるよは、やつり川にこそ。やと行きてひろき道にいづ。こは飛鳥のかたより、だごに安倍へかよふ道なり。山田村、このわたりに柏の木に栗のなる山ありとぞ。萩田村といふを過ぎて、安倍にいたる。岡より一里なり。此里におはする文殊は、世に名高き佛なり。その寺に岩屋のある、内は高さもひろさも七尺ばかりにて、奥へは三丈四五尺ばかりもあらんか。又奥院といふにも、同じさまなるいはやの、二丈ばかりの深さなるありて、内に清水もあり。さて此國をはなれて、四五町ばかりおくの高き所に又岩屋あり。こよはをさくし見にくる人もなき所なれば、道しるべするものだに、さだかには知らで、そのあたりの田つくる男など、に問ひ聞きつつ行きて見るに、これも同じ程の大きさにかまへたるいはやなる、三丈四五尺が程入りて、おくは上も横もやと廣きに、石して屋のかたちにつくりたる物、中にたてり。そは高さも横も六尺ばかり、奥へは九尺ばかり有りて、屋根なとのかたも造りたるが、明さし入りて、ほのかに見ゆ。うしろのかたは、めぐりて見れども、くらくて見えわかず。さて口とおほしき所は、前にもしりへにもなきを、うしろの方のすみに、一尺あまり缺

安倍晴明一平安朝道長時代にありし有名なる占術者うきたる一無根のあがれる代一古たかき一高貴なるおほとこ一棺のふとがこひをい

はふれ一散ばり

のかぎり一がけ

けたる跡のあるより、手をさし入れてさぐりみれば、物もさはらず、内はすべて空になん有りける。こはむかし安倍晴明が、たから物どもを藏めおきつるを、後にぬす人の入りて、角をうちかきてぬすみ取りしなりと、里人はいふなれど、こは例のうきたる事にて、誠はかの文殊の寺なる二つのいはやも、これも、みないとくあがれる代に、たかき人をはふりし墓とこそ思はるれ。そのゆるは、すべていはやの様御陵のかまへにて、中なる石の屋は、すなはちおほとこと思はるればなり。そのかまへ、いと大きな石を方につくり、なかをぬきぬきて、棺をさめて、上におほへる石を、屋根のさまにはつくれる物なり。さて土輪なとどいひけんたぐひの物は、此めぐりにぞ立てけんを、こよらの世々を経ては、さる物もみなはふれ失せ、又ぬすびとなとどの、大とこをもうちかきて、中にをさめし物どもは、ぬすみもていにけるなるべし。かの寺なる二つは、その大とこも、みなかけうせて、たご外なる岩構へのかぎり、残れるものならんかし。さてこよのいはやのついでに、しるべする男が語りけるは、岡より五六町たつみのかたに、島の庄といふ所には、推古天皇の御陵とて、つかのうへに岩屋あり。内は疊八枚ばかりしかるよ廣さに侍る。又岡より十町ばかり、これも同じ方に、坂田村と申すには、用明

いかゞあらん
當にはなまね

芹つみし昔の人
一綺語抄に、賤
しき男戀ひたる
姫の芹食むをか
いまみ、常に之
を食みて心を慰
めし事見え、童
蒙抄に「芹つみ
し昔の人もわが
如や心に物の叶
はざりけん」の
歌あり、枕草紙
に「我身に芹つ
みしなど覺ゆる
ことこそなげ
れ」としへり

天皇ををさめ奉りし所、みやこ塚といひて、これもそのつかのうへに、大きな岩の角、すこしあらはれて見え侍るなりとなん語りける。この御陵どもの事はいかゞあらん、坂田も島もふるき所にしあれば、里の名ゆかしく覺ゆ。さてもとこし道を、文殊の寺までかへりて、あべの里をとほりて、田の中にあべの仲まろのつか、又家の跡といふもあれど、もはら信じがたし。大かた此わたりに、仲まろ晴明の事をいふは、ところの名によりてつくりし事とぞ聞ゆる。又せりつみの後の七つ井とて、いさよかなるたまり水の、ところぐくにあるは、芹つみし昔の人といふ事のあるにつけていふにや。こころえぬ事どもなり。それより戒重といふ所にいづ。こゝは、八木といふ所より櫻井へかよふ大道なり。横内な、どいふ里を過ぎて、大福村な、どいふも、右の方にみゆ。まこし行きて、ちまたなる所に、地藏の堂あり。たゞさまにゆけば八木、北へわかるれば三輪へゆく道、南は吉備村にて、香山の方へゆく道なりけり。今はその道につきて、吉備村にいる。村のなか道のかたはらに塚ありて、五輪の石たてるは、吉備大臣のはかとぞいふ。石はふるくも見えず。又死人をやく所とてあるに、鳥居のたてるがあやしくて問へば、此國はなべてさなりといへり。村をはなれ、南へすこし行きて、西にをれて、池尻村といふを

うたてある一荒
くして祟ある

心もとかりつる
一そこに來るの
が待遠なりし

なごり一跡

過ぎて、膳夫村の南のかたはらに、森のあるを問へば、荒神の社といふ。北にむかへり。むかしは南むきなりしを、いとうたてある神にて、御前を馬にのりて通るものあれば、かならずおちな、どせしほどに、わづらはしくて、北むきには爲し奉りしとぞ。此社は今物する道のすこし北にて、此わたり天の香具山の北のふもととなり。此山いとちひさくひくき山なれど、古より名はいみじう高く聞えて、天の下にしらぬものなく、まして古をしのぶともがらは、書見るたびにも思ひおこせつ、年ごろゆかしう思ひわたりし所なりければ、此度はいかでとくのほりて見んと、心もとなかりつるを、いとうれしくて、

いつしかと思ひかけしを久かたの天のかぐ山けふぞわけいる

みな人も同じ心にいそぎのほる。坂路にかよりて左のかたに、一町ばかりの池あり。いにしへの埴安の池思ひ出でらる。されどそのなごりな、どいふべき所のさまにはあらず。いとしもたかよらぬ山は、程もなくのほりはてよ、峯にやよたひらなる所もあるに、此ちかきあたりのものどもと見ゆる五六人、芝の上にとりまわして、酒な、どのみを見るは、わざとのほりて見る人も又有りけり。さては蔵とるとて、里のむすめ、おんなな、どやうの

しもと一和名抄に「藁和名之毛止、木細枝也」つゆ一聊かも

さしあたりては
—今眼前に眺めては

博士—先生

もの二三人、そのあたりあさりありくも見ゆ。山はすべてわか木のしもとはらにて、年ふりたる木などとは、をさく見えず。峯はうちはれて、つゆさはる所もなく、いづかたもいづかたもいとよく見わたさるゝ中に、東の方は畝尾長くつゞきて、木立もしげければ、すこしさはりて、異方のやうにはあらず。この峯に、龍王の社とてち小きほこらのあるまへに、いと大きな松の木、かれて朽のこれるが立てる下に、しばしやすみて、かれいひなど食ひつよ、よもの山々里々をうち見やりたるけしき、いはんかたなくおもしろきに、「のほりたち國見をすれば國原は」など、萬葉一長歌「とりよるふ天のかや山のほりたち國見をすれば國原はけぶり立ちこめうなばら」云々 聲をかして、わかき人々のうち誦したる、さしあたりては、まして古しのばしく、見ぬ世のおもかけさへ立ち添ふこよちして、

もよしきの大宮人の遊びけむかぐ山見ればいにしへおもほゆ

かの酒のみるたりし里人どもも、こよに來て、國はいづくにかおはするなど問ひつよ、此山のふることどもなんどかたりいづる、いとゆかしくて、耳とどめてきけば、大かたこよによしなき神代のことのみにて、さもと覺ゆるふしもまじらねば、なほざりに聞きすごしぬ。されど見えわたるところを、そこかしこと問ひきくには、よき博士なり

寺—金剛山寺、役行者開基といふ

文字のこゑ—漢字の音

さへられて—さまたげられて

けり。まづ西のかたにうねび山、物にもつどかず、一つはなれてちかう見ゆ。こよより一里ありといへど、さばかりもへだたらじとぞ思ふ。なほ西には金剛山、いとたかくはるかに見ゆ。その北にならびて、同じほどなる山の、いさよか低きをなん、葛城山と今はいふなれど、いにしへはこのふたつながら葛城山にて有りけんを、金剛山とは寺たててのちにぞつけつらん。すべて山もなにも、後の世にはからめきたる名をのみいひならひて、古のは失せゆきつよ、人もしらす成りぬるこそくちをしけれ。されど又いにしへの名どもの、寺にしものこれるが多きは、いとよしかし。又その北にやよくだたりて、二がみ山、峯ふたつならびて見ゆ。これも今は二上がだけと、例の文字のこゑにいひなせるこそにくけれ。伊駒山も雲はかくさず、「きのふゆふ雲の立ちまひかくるふは花のはやしをうしとなるべし」 いぬるの方にかすかに見えたるに、吉野の山のみぞ、ちかきにさへられて、こよよりは見えぬ。さては東も南も、此國の山々、のこるなく見やられたり。又くになかは、疊を敷きならべたらんやうに平にて、其里かの森など、むらくわかれて見えたる、北のかたは殊にはるくくと、末は霞にまがひて、めも及ばず、山のはも見えぬに、耳成山のみぞ、西北といはんには北によりて、物うちおきたらんやうに、たどひとつ、これはうねび山よりもすこし

とりよるふ一萬
葉長歌に見えたる語、
缺くる事なく足り整へる
意

ふみ書

近く見えたるなんど、すべてくよも山のながめまで、
とりよろふあめのかぐ山萬代に見ともあかめやあめのかぐ山
といふを聞きて、なぞけふの歌のふるめかしきはと、人のとがめけるに、
いにしへの深きころを尋ねずば見るかひあらじ天のかぐ山
といへばとがめずなりぬ。今はとて立ちなんとするにも、

わかるとも天のかぐ山ふみ見つよ心はつねにおもひおこせん

なんどいひつよ、せめてわかれを慰めて、この度は南の方へくだりゆく。坂のなからに、
上の宮とて、ちひさきほこらあり。麓はやがて南浦といふ里にて、日向寺といふ寺もあり。
その堂のまへにも、大きな松のかれたるあり。このわたりに下の宮といふもあり。
すべて此山には、いにしへ名ある神の御社ども、かれこれとおはせる。今はいづれかい
づれとも、しる人なければ、此ほこらどもなんども、もしさるなごりにもやと、目とま
る。此里の東のはしに、御鏡の池といふあり。埴安の池はこれなりといひし人もあれど、
信じがたし。此池のほとりに、香來山の文殊とて寺あり。かく山村はこの東にありとぞ。
又この南浦村の三町ばかり南に、金堂講堂のあととて、石ずる二十六のこれりとぞ。こ

もだしぬ一其儘
にして止めたり

うきたる一根據
なき

はいづれの寺なりけん。すべてかうやうのところくも、後にふるき書どもかむがへあ
はせなば、その跡とさだかに知らるゝやうもありぬべけれど、さまで物せんも、旅路の
日記にはくたくしければ、例のもだしぬ。又此里のたかむらの中に、神代のふること
をいひつたへたる石あり。そのほとり七八尺ばかりは、垣なんどゆひめぐらしたり。そ
の中に生ふる竹に、あやしき事ありとてかたりしは、後に書むと思ひてわすれき。又里
を西へいでて、道のほとりの田の中に、湯篠やぶとて、一丈ばかりの所に、細き竹一む
らおひたるもあり。さて西へ行きて、別所村といふに、大宮と申す御社あり。高市社は
これなりと聞きおきしかば、たづねて詣づ。香山のすこし西なり。今はこの北なる高殿
村といふ所の神なりとぞ。この御社の西の方にも池あり、持統天皇の藤原の宮と申せし
は、このわたりにぞありけん。今高殿なんどいふ里の名も、さるよしにやあらん。さて埴
安の池も、かならずこのわたりと聞えたるを、今たえくぐりに所々つどきて、低き岡のい
くつもあるは、かの堤のくづれのこりたるなんどにはあらじや。ふるき歌どもにも見え
て、名高き堤なりしはや。又その西に、ひざつき山とて、かたつかたには松しげくおひ
て、ひきく長き岡あり。これにも神代のふる事とて、かたりし事あれど、例のうきたる

佛の御像を云々
— 欽明天皇の十三年佛法傳來の當初にも、又敏達天皇の十四年にもあり
神なみ山の云々
— 「春されば花さきをとり秋づりば丹の穂にもみぢ」云々といふ長歌中の句
雷之上 — 「大君は神にしませば天雲の雷の上にははりせるか

事なりき。のほりて見やれば、南の方に、飛鳥川西北さまへながれて、長く見ゆ。此岡の南に、かみひだといふ里あり。文字は神の膝とかくよし。そこよりすこし行きて、かの見えしあすか川をわたる。このあたりにてはやと廣き川なり。此川の南のそひをゆく道は、八木より岡へ通ふ道なり。その道を田中村などといふを通りて、十町ばかり川上方へゆけば、豊浦の里、豊浦寺のあとには、わづかに薬師の堂あり。今も向原寺といふ。日本紀 ふるき石ずゑものこれり。榎葉井はいづこぞとたづぬれど、知れる人もなし。難波堀江の跡とて、ちひさき池のあるは、いともうけがたし。かの佛の御像をすてられしは、津國の堀江にこそありけれ。さてこの里は飛鳥川の西のそひにて、川のむかひはすなはち雷村なり。いにしへ飛鳥神社のたとせ給ひて、神なみ山とも、神岳ともいひしは、この所ぞかし。今來て見るに、さいふべき山有りて、萬葉十三 神なみ山の帯にせるあすかの川、とよめるにもよくかなひて、川はやがて此山のすそをなん流る。このわたりまでも、飛鳥と古いひしは、もとよりのことにて、今も飛鳥の里よりわづかに五六町なるをや。又人まろが歌にも、萬葉三 雷之上とよめれば、今の里の名もふるき事なり。いはせの森などいひしも、このわたりなりけんかし。又豊浦を通り、西さまに行きて、和田

かひ一映 あひだ

うちかたぶく一頭を傾けて考へる
あひさきりく一あささうく一かの天皇一孝元天皇

村といふあり。そこよりすこしのほりて、山のかひを西へうちこゆれば、劔の池、道の左にあり。東南も北も低き山にて、池はたてもよこも二町ばかりの廣さなる、中にちひさき山有りて御陵なり。南西北と池めぐりて、東のみ後の山につゞけり。さて池の西の堤のしたは、やがて石川村なり。此御陵はまがふべくもあらねど、猶さだかに聞かんと思ひて、例の里のおいびとたづねて問へば、第十八代のみかどのみささき、御名は何とかやのとて、しばしくうちかたぶくを、いな十八代にはあらず、八代孝元天皇よといへば、おいさきりくとうなづく。物とはんとして、かへりてこなたより教へつるもをかし。此村をいでて、あなたは程なく大輕村、輕原宮 是はかの天皇の都の跡なり。かるの市などいひしも、こよなるべし。輕をはなれて、猶西へ行けば、やと高き所なる、道の南に、なほ高く圓に見ゆる岡あり。その南のつらに、塚穴といふいはや有りと聞きつれば、細き道をたどり行きて見るに、口はいとせばきを、のぞきて見れば、内はやとじろくて、おくも深くは見ゆれど、聞ければさだかならず。下には水たまりて、奥のかたにその水の流れいづる音聞ゆ。これは何の塚ぞととへど、しるべのをのこもしらぬよしへり。もし宣化天皇の身狹桃花鳥坂上御陵などにはあらぬにや。其故は、此岡の下はやがて三瀬

聲一音

よあしき一相當に見苦しからぬをさし一とんと

さはいかどせんなほ一それでは仕方なしやはりひと里一里中全體

村といふ所なるを、牟佐坐神（神名式）社も、今かの村に有るときけば、身狭は此わたりと思はれ、又坂上とあるに、所のさまもかなへればなり。それにつきて猶思へば、今みせといふ名も、身狭と書ける文字を、しかよみなせる物が、又さらすとも聲かよへばおのづから訛りつるにや。かくて西へすこしくだりて、かの三瀬村にいづ。こよは八木より土佐へゆく大道とぞいふなる。日もはや夕暮に成りぬるを、此里はよろしき家どもたちつづきて、ひろき所なれど、旅人やどす家はをさく無きよしきけば、なほ八木までや行かまし、岡へや歸らましといへど、さては日暮れはてぬべし、足もうごかれずと、みな人わぶめれば、さはいかどせん、なほ此里にとまりぬべきを、あやしくとも一夜あかすべき家あらば、猶たづねよといふに、ともなるをのこ、ひと里のうちとひありきて、からうじて宿はとりぬ。

思ふどち袖ふりはへて旅ごろも春日くれぬるけふの山ぶみ

道の程はなにばかりもあらざめれど、そこかしこと行きめぐりつと、日一日たどりありきつれば、けにいといたくくるしくて、何事も覚えぬにも、猶このちかき邊のことども問ひきかまほしくて、まづ此宿のあるじよび出でたる、年のほど五十あまりと見えて、

むべし一しうてなしつと一尤もらしく取りつくるひて古跡一振假名原本による

ねんじ一我慢しころへ

ほころびて一ころへ兼ねてどつと

つけて一渾名をつけてくさはひ一種

そのかみ一古へ

鬚がちに顔悪さけなるが、面もち聲づかひむべしうもてなしつと、いでこのわたりの名所古跡はと、いひ出づるよりまづをかしきに、わかき人々はえたへすほよゑみぬ。この東なる山に塚穴とてあるは、いかなる跡にかと問へば、かれは聖徳太子の御時に、弘法大師のつくらせ給ふとかたるには、たれもえ堪へねど、なほ何事かいふらんと、さすがにゆかしければ、いみじうねんじて、さはいみじき所にも侍るかな、深さはいくらはかりかと問へば、おくはかぎりも侍らず、奈良の寒さの池まで通りてこそ侍れといふ。そもその池はいづこばかりにあるぞと問へば、興福寺の門前に、さばかり名高く侍る物を、しらぬ人もおはしけりといふにぞ、心得てみな人ほころび笑ふ。さて畝火山の事かたるついでに、神功皇后の御事を申すとて、じんにくんといへるこそ、よろづよりもをかしかりしか。それより此あるじをばじんにくんとつけて、物わらひのくさはひになんしたりける。こよには神の御社やなにやと、たづねまほしき所々多かれど、かよるには何事か問はれん、いとくちをしくこそ。十二日、三瀬をいでて、北へすこし行きて、左の方へ三町ばかりいれば、久米の里にて、久米寺あり。今もよろしき寺なり。されど古の所はこの西にて、こよはそのかみ塔の

久米寺のありし
當時

ありし跡なりと、法師はいひつ。うねび山、北の方にまぢかく見ゆ。ふる言思ひ出でられて、

もしあてに凡
その推測にて

玉だすきうねびの山はみづ山と今もやまとに山さびいます

萬葉一長歌に「うねびの此みづ山は日の上この大御門にみづ山と山さびいます」云々 此山のかたへつきたる道を、おしあてにゆきて、すこし西へまがれば、畝火村あり。すなはち山のたつみの麓なり。此むらに入らんとするところの、半町ばかり右の方に、ちひさき森有りて、中に社もたてるは、懿徳天皇の御陵といふなれど、そは此山の南、まなごの谷の上とあるにあはず、又御陵のさまにもあらねば、かたぐいぶかしさに、村の翁にそのよしいひて、くはしくたづねければ、けにさる事なれど、まことのみさどきはさだかに知れざる故に、今はかの森をさ申すなりとぞ答へける。檀原宮は 畝火山の東南檀原宮は神武天皇の都 このわたりにぞ有りつらんと思ひて、

うねび山見ればかしこしかしばらの聖の御世の大宮どころ

今かしばらてふ名は残らぬかと問へば、さいふ村はこれより一里あまりにしみなみの方にこそはべれ、このちかき所には聞き侍らずといふ。さて此山を、今は慈明寺山といふとかや。されどうねび山ともいはぬにはあらず。それもなべてひ文字を清てなんいふめ

ことある事一格
別の事

る。又此ほとりの里人は、御峯山といひて、いかなるよしにか、峯に神功皇后の御社のおはするとか。かのじんくんが語りしは、此御事なりけり。さてそこへは此うねび村よりのほる道ありて、五町ばかりと聞けば、いざのほらんといへど、日ごろの山路に困じたる人々は、いでやことなる事もなかめる物から、足つからさんも益なしとて、すまねば、えしひても誘はずなりぬ。かくて此村を西へとほり、山の南の尾をこえて下れば、あなたは吉田村なり。此あひだの道の左に、まなご山まさごの池なるといふ名、今もありて、池は水あせて、そのかたのみ残りりとぞ。かの懿徳天皇の御陵は、そのわたりのなるべきを、知られぬこそいとくちをしけれ。さて吉田村にて、例の翁かたらひ出でて、御陰井上御陵をたづぬるに、このおきなは、あるが中にもなべての御陵の御事をよく知りたりて、こまかにかたる。近き世に江戸より御陵どもたづねさせ給ふ事はじまりて後、大方二十年ばかりに一度は、かならずかの仰事にて、京よりその人々あまた下り来て、その里々にとどまりて、くはしく尋ねしたよめつと、しるしの札たてさせ、めぐりに垣のはせなとせらるゝ事ありとなん。ふりにし御跡のうせ行きなん事をかしこみ給ひて、さばかりたづね奉り給ふは、いともありがたき御おきてなるを、下さまなる

かしこみ畏れ
多く思ひ

がうけをのみ云
云一葉家を笠に
きて
しるし利益
からき一つちき

けぢめ一他の里
との區別
やむごとなき
貴き

人どもは、心もなく、それにつけてもたどがうけをのみさきに立つ、うちふるまふ故に、御陵のある里はことなる民のわづらひ多くて、そのしるしとしてはつゆ無ければ、いづこにも是をからき事にして、たしかに有るを殊更にかくして、此里にはすべてさる所侍らず、とやうに申しなす類もあめりとぞ。さてはいよくうづもれ行くめれば、なかなか御陵の御ためにも、いと心うきわざにて、たづねさせ給ふ本の御心ざしにもいたく背ける事ならずや。いさよかにてもその里にはけぢめを見せて、御めぐみのすぢあらんにこそ、民どもも悦びて、いよくやむごとなき物に、守り奉るやうはありぬべきわざなめれ。又かの並河がたづね奉りしをりの事をもかたりき。さて此里中の道のほとりに、御陰井といふ今もあり。かたのごと水も有りて、たゞよのつねの小さき井なり。御陵は此井より一町あまりいぬるの方にて、すなはち畝火山の西のふもつきたる高き岡にて、松などまばらに生ひたり。かしこけれど登りて見るに、こよにをさめ奉りつらんと思はるゝ所は、圓に大きな丘にて、又その前とおほしき方へ、いと長く築き出したる所あり。そこはやと降りて、細くなんある。かの翁こよまであないし來りて、かたりけるは、すべていづこのも、古のみさどきは皆かうやうに作りし物なるを、岩屋

あなた一以前

ものぐるほしき
一氣狂じみたる

これ一陵

見るめし一見る
べき點も、しは
強辭

なとの侍るもあるは、うへの土のくづれ落ちて、なかなるかまへのあらはれたるなり。とかたるを聞くに、かの安倍のおくなりし岩屋のさまなど、けにと思ひあはせぬ。かの口より奥へやと入るほどは、このまへに長く築たる所なりけり。又いづれにも、昔はめぐりながら堀の有りつる、七十年ばかりあなた迄は、これにも侍りしなり、といふを見るに、今はめぐりは畠又は篁などになりて、さるさまもさらに見えす。此たかむらなんそのなごりと、このおきなは言ひけり。御山は今も全くて、有りしまと見えたり。そも御陵の御事をしも、などかくものぐるほしき迄たづねまどひありきて、くはしうは書き記せるぞと、とがめん人もありなめど、末の代まで、いと上りての代の物の、まさしくこれよとて残れるは、これよりほかに有りなんや。ことにこのうねび山なるどもは、あるが中にもふるく、それとたしかにはたあなれば、としごろ心にかけてつ、いかでくはしくまうでて見奉らんと、ゆかしく思ひわたりつる物をや。されどいづこなるもたど同じさまにて、珍しけもなく、何の見るめしなき所々なれば、たどおのがやうに、古をしのぶ世のひがものならでは、わざとたづねて見ん物とも思ふまじければ、あなあぢきな物あつかひやと、世の人のおもふらんも、さりぬべき事なりかし。

もはろ一専ら、
全く

さてよし田村をいでて、北さまに物して、大谷村といふを過ぎ、慈明寺村に入らんとする所の右のかた、山もとに寺ある、まへの岡のうへに、大きな塚のかたちの見えたるは、すんせいてんわう 綏靖天皇の御陵にて、きんひやく 里人はするぜい塚とぞいふなる。うねび 畝火山のいぬるの麓につきて、これも高き岡なる、例ののほりて見れば、御陵のさまも吉田なるともはら同じ事なり。東のかたのふもとに、山本村といふ見ゆ。慈明寺村はこの岡の北につどけり。やはなれて又北のかたに、四條村といふあり。この四條村の一町ばかり東、うねび山よりは五六町もはなれて、うしざら 丑寅のかたにあたれる田の中に、松一もと櫻ひと本おひて、わづかに三四尺ばかりの高さなる、ちひさき塚のあるを、神武天皇の御陵と申しつたへたり。かのへ 畝火山北方白橋尾上にあるを、こよははるかに山をば離れて、さいふべき所にもあらぬうへに、すんせいあんない 綏靖安寧などの御は、さばかり高く大きなに、これのみ斯くかりそめなるべきにもあらず、かたがた心得がたし。それにつきてつらく思ふに、かの綏靖天皇の御と申すぞ、まことにおほん 神武天皇の御なるべきを、せいじてんわう 成務天皇と神功皇后の御陵の、まがひつるためしなと、いにしへだになきにしもあらざれば、これももてたがへて、昔より綏靖とは申しつた

御一御陵

さはり一差支

へつるにや。さ思ふゆゑは、まづこの山のほとりなる御陵どもは、いづれもうねび山のそのの陵とあんなれば、この綏靖の御も、今いふ所ならば、必ずさあるべきを、いづれの書にも、これはたゞつばな 桃花鳥田丘上とのみあるは、この山のあたりにはあらで、たけらのこほり 神名帳に、つくだにまつかみのやしう 調田坐神社とある地なるべきか。それはかづらきのしものこほり 葛下郡なるを、この御陵はたけらのこほり 高市郡と見えれば、たがへるやうなれど、この郡どもはならびたれば、さかひちかき所々は、古への書どもにも、郡のかはれる例おほかれればさはりなし。されどこれは、このつぎだといふ所をよく尋ねて後に、さだむべき事なり。又神武の御は、山の東北と、あまのこほり 日本紀にも延喜式にもあるを、かのするぜい塚は西北にしもあんなれば、うたがひ無きにあらねども、古事記には山の北のかたと見え、またかの御陰井上の御陵は、山の西なるを、日本紀には南といへるたがひもあれば、必ず東北とあるになづむべきにもあらざらんか。後の人なほよくたづねて定めてよ。さてこの四條村より二三町ゆけば、今井とて大きな里なり。この今井の町中をとほりて、すこしはなれ行きて、八木にいたる。こよにしばしやすみて物くふ。このごろは日いとよく晴れて、ちりばかり心にかよる雲もなかりしに、よべよりうちくもりて、今朝は雨もふりぬべきけしきなりければ、宿をいでても、

ちりばかり一少
しも

やむごとなき
止むを得ざる

のきて一退き
て、離れて

いにしへ云々！
「かぐ山はうね
びをうしと耳な
しと相あらそひ
き」云々の長歌

空をのみ見つゝ來しを、やうくく雲も晴れゆきて、うねび山めぐりし程より、又よき日になりぬれば、たれもくいとこよちよし。當麻、龍田、奈良などへゆかんに、こよより物すべきを、いかどせんといひあはすに、よき序なればとて、ゆかまほしがる人おほかれど、かの所々はまたくも來つべし、このたびはわれらはやむごとなき事しあれば、一日もとく歸りぬべきなりといふ人もあるにひかれて、みなえ行かずなりぬ。さるは旅のならひとて、たれも故里いそぐ心は有りながら、なほいと口惜しくなん。八木を東へいでて、四五町ゆけば、耳成山は道より二町ばかり北なり。畝火山と香山と此山とは、國中にはなれ出でて、あひむかひたる、いづれもこと山へはつどかぬを、かの二つはなほほとりの山にもやと近く見ゆるに、此山はことに遠くのきて、こと山にはいさよかも續きたる所なんなき。さて三つの山いづれも、いとしも高くはあらぬ中に、此山はやと高く、香山はことにひきくて、うねびぞ中には、高かりける。又そのあひだをくらべ見るに、此山よりうねびは近く、次にはかぐ山ちかくて、うねびとくぐ山の間ぞ、中には遠かりける。いにしへこの三つ山の妻あらそひとて、うねびと耳成は男山にて、香山の女山なるを、あらそひ聘ひける古事の有りしは、今見るにも、まことに二つの山

その社一天神の
社

鬘兒一三人の男
に懸せられ何れ
に定めんすべも
無くて遂に身を
耳なしの池に投
ず

道とは一道に比
しては

は雄々しく、かぐ山は女しき山のすがたにぞ有りける。此みよなし山、今は天神山ともいひて、その社ありとぞ。

さもこそはねぎこときかぬ神ならめ耳なし山にやしる定めて
萬葉十六 かの鬘兒が身なけけん、耳成の池も、此わたりにや有りけん。今も道のべに池はあれど、

古へのそれかあらぬか耳なしの池はとふともしらじとぞ思ふ
さて三輪の社にまうでんとすれば、やと行きて、きのふ別れし地藏の堂あるちまたより、北の道にをれ行くほど、奈良のかたを思ひて、ながめやりたるそなたの里の梢に、櫻の一木まじりて咲けりけるを見て、

思ひやる空はかすみの八重ざくらならの都もいまや咲くらん
さて行きくゝて、はつせ川はみわの里のうしろをなん流れたる。橋を渡りて、かの御社の鳥居の前にゆきつきぬ。こよはゆききの旅人しけくて、この日ごろの道とはこよなくにぎはしく見ゆ。此鳥居より、なみ木の松かけの道を三町ばかり山本へ入りて、左のかたに、だいごりんじとて、文字はやがて大御輪でらとかく寺あり。二王門、三こしの

ことどころ一他
の所
はやくも一以前
にも

塔なども有りて、堂は十一面観音にて、三輪の若宮と申す神も、同じ堂のうち、左の
わきにおはします。さてもとの道をなほ一町ばかり入りて、石の階をいさよかのほりて、
社の御門あり。このわたりに、いと神さび大きな杉の木、こよかしここにたてる、こ
とどころよりは目とまる。はやくもまうでし事なと思ひ出でて、

杉の門またすぎがてにたづねきてかはらぬ色をみわの山本

古今「わがやどは三輪の山もと懸し
くばとぶらひきませ杉たてる門」 神の御殿はなくて、おくなる木しけき山ををがみ奉る。拜殿と

いふは、いといかめしくめでたきに、ねぎかなぎなとやうの人々なみりて、うちふ
る鈴の聲なども、所からはまして神々しく聞ゆ。さて本の道には歸らで、初瀬のかた
へたどにいづる細道あり。山のそはづたひを行きて、金屋といふ所にいづ。こはならよ
りはつせへ通ふ大道なり。これよりはつせ川の川べをゆく。しき島の宮の跡は、このわ
たりとぞ聞きし。かのとかま山といひし山も、此道よりは、物にもまぎれず、ゆくさき
に高く見えたり。さて櫻井のかたよりくる道とひとつにあふ所を、追分とぞいふなる。
さきには此わたりより別れて、たむのみねの方におもむきしぞかし。又はつせの里をと
ほりて、川のはしを渡るとて、

一本のすぎつる道にかへりきてふる川のべを又もあひ見つ

古今「はつせ川ふる川のべに二本ある
杉年をへて又もあひ見む二本あるすぎ」 こよひも又萩原の里の、ありし家にやどる。これよりかへる

ありし一以前宿
りし
道かへて一西行
「吉野山こぞの
しをりの道かへ
くまだ見ぬ方の
花を尋ねん」の
歌句にとる

かやすく一たや
すく
ふよう一つまら
ぬ事
思ひたゆたはる
るを一躊躇せら
るくを
大徳一僧の敬稱
さは云々一それ
では御氣隨にな
さるがよいと案
内の者いひて止
みたり

さは、道かへて、まだ見ぬ赤羽根ごえとかいふかたに物せんといひあはせて、ともなる
をのこに、かうくなんといへば、頭うちふりて、あなおそろし、かの道と申すは、す
べてけはしき山をのみ、いくへともなくこえ侍る中にも、かひ坂、ひつ坂など申して、
よにいみじき坂どもの侍るに、明日は雨もふりぬべきけしきなるを、いとどしく道さへ
あしう侍らんには、おまへたちのいかでかかやすくは越え給はんとする、さらにくふ
ようなめりといふを聞けば、又いかどせましと、みな人心よわく思ひたゆたはるよを、
戒言大徳ひとり、いなとよ、さばかりおそろしき道ならんには、絶えてゆく人もあらし
を、人もみな行くめれば、なにばかりの事かあらん、足だにもあらば、いとよう越えて
んと、つゆ聞きおちたるけしきもなく、はけましいはるとにぞ、さは御心なりとて
居りぬ。

十三日、雨そほふるに、まだ夜をこめて、かのおそろしくいひつる道に出でたつ。そは
この里中より、右のかたへぞわかれゆく。けさはいさよか心地もあしければ、ゆくさき

ようせすは一廻くすると
聞ゆる一有名なる
うちはへーずつと引續きて
かちより一徒歩

の山路のほどいかならんと、今よりいとわびし。この道より、室生は程ちかしと聞けど、雨ふりまさりて、道もいとあしければ、えまうです。田口といふ宿まで、はいばらより三里半とかや。まづ石わり坂な、どいふをこえて、道のほどいと遠し。田口より、又山どもあまたこえ行きて、桃の俣といふへ二里、又山こえて二里ゆけば、菅野の里なり。こよより多氣へ四里ありとぞ。此あひだになん、大和と伊勢の國さかひは有りける。さて今日は、多氣まで物すべかりけるを、雨いみじうふり、風はけしくて、山のうへ行くほどな、どは、みの笠を吹きはなちつと、ようせすは、谷の底にもまろびおちぬべう、ふきまどはすに、猶ゆくさき、聞ゆるかひ坂もあなるを、かくてはえ越えやらじとて、石な原といふ所にとまりぬ。今日はいばらよりこなた、いづこもくたど同じやうなる山中にて、何の見どころもなかりしを、櫻はところなくにあまた見えて、なほさかりなりき。されど日もいとあしく、うちはへ心地さへなやましかりければ、何事もおほえで過來つれば、歌な、どもえよますなりにきかし。

十四日、雨はやみぬれど、なほこよちあしければ、例のあやしきかごといふ物にのりて、飼坂をのほる。けにいとけはしき山路なりけり。されどおのれはかちよりならねば、さ

もたれば一持ちたれば
つまらをり一丸折、曲折したる
けはしき坂
こよもと一すや
手近か
つかうまつり
仕へ奉り

もしらぬを、みな人の、とばかりゆきては、息つき立ちやすらひつとのほるを見るにぞ、くるしさ思ひやられぬる。とものをのこは、荷もたればにや、はるかにおくれて、やうくに登りくるも、つどらをりのほどは、いとまぢかく、たどこよもとに見くたされたり。さてたむけなる茶屋にしばしやすみて、此坂をくだれば、やがて多氣の里なり。こよはおのが遠祖たちの、世々につかうまつり給ひし北島の君の、御代々經てすみ給ひにし所なりければ、故郷のこよちして、すどろになつかしく覺ゆ。此度も、多くは此御跡をたづね奉らんの心にて、此道にはきつるぞかし。所のさま、山たちめぐりて、いとしも廣からねど、きのふ來し里々にくらぶれば、こよなううちはれて、ひろう長き谷なりけり。かの殿の跡は、里より四五町ばかりはなれて、北の山もとに、眞院善とてわづかなる小寺のある、里人は今も國司とぞいふなる。そこに北島の八幡宮とておはするは、具教 大納言 國司一世號 寂光院不智の御靈をいはひまつれる御社とぞ。先祖の事思ひて、ねんごろに伏しをがみ奉る。をりしも雨いさよか降りけるに、

下草の末葉もぬれて春雨にかれにしきみのめぐみをぞ思ふ
堂のまへに、そのかみの御庭の池、山、たて石な、ども、さながらのこれるを見るにも

さばかりいかめしき御おほえにて、榮え給ひし昔の御代の事、思ひやり奉りて、いとかなし。

いひこそいでね
一口にこそいは
ずとも

おこなふ取扱
ふ、治める

さては—それか
ら又

ぞう—族、一族
子孫

さるは—その譯
は

君まさでふりぬる池の心にもいひこそいでねむかしこふらん

この上のかたの山を霧が峯とかいひて、御城の有りし跡ものこれりとぞ。されど高き山なれば、えのほりては見ず。さてむかしの事どもかきとどめたる物なとやあると、此寺のほうしに尋ねけるに、此比あるじのほうし物へまかりて、なきほどなれば、さる物も、この里の事おこなふ者の所にあづかりをるよしいらへけるは、留守なめり。さてその物見に、また里にかへりて、かの家たづねてしがくくのよし請ひけるに、とり出でて見せる物は、この所のむかしの繪圖一ひら、殿より始めて、つかへし人々の家、あるは谷々の寺ども、町屋なとまで、つぶさに寫しあらはしたり。さてはつかへし人々の名どもしるしあつめたる書一卷あり。披きて見もてゆくに、かねて聞きわたる人々、又は今もこよかしこにそのぞうとて残るがせんぞなと、これかれと多かる中に、己が先祖の名宗助も見えたり。かの繪圖に、その家も有りやと、心とどめてたづね見けれど、そは見あたらざりき。かくて此家にかたらひて、くひ物のまうけなどして行く。さるは伊勢

御嶽—大和金峯
山、御嶽精進と
て此山に詣りて
精進する事あり
し也

にまうづる道は、こよよりかの櫃坂といふをこえて、南へゆくを、今はその道のかんは遠ければ、堀坂をこえてかへらんとするを、そのかたは旅人の物する道ならねば、くひ物なともしなしと聞けばなりけり。又しもかの寺の前を通り、下多氣にかよりて、山をこえ、小川、柚の原なとといふ山里を過ぎて、伊福田寺にまうづ。こよはすこし北の山陰へ廻る所にて、道のゆくてにはあらねど、御嶽になすらへて、精進なとしつと、國人のまうづる所にて、かねて聞きわたりつるを、よきついでなれば、廻りてまうづるなりけり。山は浅けれど、いと大きな岩ほなと有りて、谷水もいさぎよく、世ばなれたる所のさまなり。さて與原といふ里にいでて、寺に立ち入りてしばし休みて、堀坂をのほる。こはいと高き山なるを、今はその半までのほりて、峯は南になほいとほるかに見あけつ。あなたへうち越ゆる道なり。このたむけよりは、南の島々、尾張、三河の山まで見えたり。日ごろはたど山をのみ見なれつるに、海めづらしく見渡したるは、ことに目さむる心地す。わがすむ里の梢も、手にとるばかりちかく見附けたるは、まづ物なともしいはまほしき迄ぞおほゆるや。さてくだり道、いと遠くて、伊勢寺すぐるほどは、はや入相になりにけり。いぶたにまはりし所より、供のをのこをば、さきだて遣りつれば、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

壬戌年
 月
 日



一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

かゝるふらりけりおまとも
 びんごう—のちまのびんごう
 かしらあ—のちまのびんごう
 びんごう—のちまのびんごう
 又かりあ—人執らせんたし

可ききを編むるのちまのびんごう
 かしらあ—のちまのびんごう

壬申書
 由有る夫書



旅泊 槩略

○享和二年壬戌、夏五月九日 刻、江戸出立、今夜神奈川泊、この處まで京傳子送らる、明朝袂を分つ ○十日大磯

泊 ○十一日箱根塔の澤 今日雨ふる、元湯瀧五兵衛を訪ふに、此節川越の城主入湯ましますを以て、塔の澤の湯屋寸地も人を入るゝの席なし、故に酒樓中村屋東五郎が家に逗留す、今夕僕又助江戸より來れり、十二日

猶雨ふるを以て逗留す、○十三日 今朝雨少しくふる、晝上り晴れたり、箱根を越ゆ、 沼津泊 ○十四日江尻泊 ○十五日府中 駿河人にとめられて、

○二十日島田泊 この節霖雨にして大井川猶あかず、因幡屋何某丁寧にもてなざる ○二十二日金谷泊 今夕川を越えたり、故に僅にして泊る、 ○二十三日掛川

泊 二十五日早朝秋葉へ出立、二十六日の夜又かけ川へ歸る、二十八日まで逗留、 ○二十八日袋井泊 今日午時掛川を立て、袋井の完醉を訪ふに留守なり、すやむことを得ずして一宿す、掛川の雪松氏の所まで送り來り、今夕袂を分てり、掛川に

遊べる時、二十五日の朝僕又助をばその故郷舞坂の在へやりぬ、故に一兩日獨行す、 ○晦日吉田 今日僕かへり來れり、これと濱松にてあふ、

○六月七日岡崎泊 今朝吉田を出立、御油の外成といふ人にとどめられししばらく休息、この夕岡崎へ至る、 ○十一日新堀泊 に心堀はをか崎より一里半ばかり西の方の在なり、

○十二日名古屋泊 今朝新堀を立て名古屋に至り、同二十三日まで逗留、この間十四日津島の友を訪うて津島祭を見る、あなれく十六日午時又名古屋へ歸る、昨日僕又助を江戸へ歸す、是より獨行、供あれば逗留中萬事わづらはしきゆ

えな 今晩名古屋を出立、名古屋の友人犬勢送り來る、又宮の雅 ○二十七日石薬師泊 今日大に

○二十八日水口泊 出水につき、七日朔日まで空しく逗留、 ○七月二日石部泊 草津大水、道あれて通行なし、故に石部に泊る、 ○三日京都 今日問道

津に出づ、この間甚難澁、あな 昨日大阪を出立、友人舟場まで送ら ○二十四日夜大阪 今日京を立て伏見より乗船、

る、夜中大雨、六日の朝伏見に著岸、今日も風雨甚し、先の大水にこりて大津へ出でず、又京へ行て晴をまつ、

○八日水口泊

今朝京を出立、

○九日津泊○十日松坂泊○十一日

一日參宮

今夕松坂までかへりてこゝに泊る、

○十二日津泊○十三日桑名泊

十四日雨ふりて舟出ず、桑名人にとどめられて一兩日逗留す、

○十六日名古屋

屋

今朝乗船、佐屋へまはる、桑名の架橋佐屋まで送らる、佐屋の本陣丁敷にもてなされる、故にしほちく逗留、今夜名古屋に至る、

○十七日赤坂

今朝名古屋を出立、歸心甚あわたし、故に是より一日に十二三里の道をはしる

○十八日濱松泊○十九日島田泊○二十日興津泊○二十一日三島泊○二十二日大磯泊○二十

三日川崎泊○二十四日江戸

今朝巳の刻品川へ来る、道に僕にあへり、家内の無事を聞きて道をいそがず未の刻家に歸る

凡道中百有五日、五月九日より八月二十四日に至る。

逗留の日數

塔の澤二日 府中六日 島田二日 掛川五日半 吉田七日 新堀一日 名古屋 後前 十七日

水口三日 石部一日 京都 後前 二十四日 大阪十日 伊勢妙見町一日

都合逗留七十五日半

崖言

一遊歴中おのが目に珍らしとおもへるもの、悉く是をしるす。古人の略傳○墓誌○珍書○風

俗の異體○方言○妓院○雜劇○年中行事の異同○名所古迹○古人の墨跡等なり。序を得ず

一覽せずといへども、その處を採得たる古墳等はしるせるもあり。

一岐阜長良川の鵜船、愛宕、高尾、四明山、石川翁、石山寺、二見、朝隈、三保等は、必ず見る

べき所といへども、或は道遠く、或は山高くして、炎暑にたへず、或は案内の友人當日故

障ありて、もだせるもありて遊覽せず。故にしるすことあたはず。遺恨甚し。就中な

がら川の鵜、十八樓、四明山を見残せること、尤うらむべし。

一南都は歸路必ず遊覽すべきを、出水に日數おくれ、歸心あわたし、且路あれて獨行

の覺束なさに、ゆかでやみぬ。播州高砂、紀州高野、攝州須磨赤石等、僅の道を隔ながら

ゆかず。是洪水に路次の序を失ふ故なり。西は住吉を限り。

一遊歴中人の需に應じて作れる狂文等數稿ありといへども、ことに載せずして別本とす。見

るにわづらはしき故なり。旅中漫戲の詩歌は、その所を得てよみ出せるものこれを載す。是みづから後勘ごうかんに備へん爲ためにして、いとをさなきことのみおほかり。一此書人に見せん爲にもせず、又みづから長夜ちやうやの友としもあらねど、老後茶話らうごさわの記憶きおくに、しばらく駄賃帳だちんちやうのしりへにしるせり。机上きじやうの鶏肋けいろくかよること猶おほかるべし。

目録

- 一條より三十九條までの話ものがたりは、東海道大磯より大津までのことを記す。名古屋新堀にひぼり又ことの中にあり。
- 四十條より八十七條に至つて、京師の話をしるす。類をもてならべ評するに至つては、大阪の話もこれを混こんす。近江も亦この中にあり。
- 八十八條より百二十五條に至つて、大阪の話をしるす。京の話なすを雙評ならべひやうすること前のごとし。
- 百二十六條より百五十七條にいたりて、伊勢及び歸路の話をしるす。

卷の上

- 一 大磯の懐古
- 二 藐姑峯の雨
- 三 雨中の不二
- 四 農男附龍華寺
- 五 正雪が墳附十三佛
- 六 梅屋勘兵衛が舊趾
- 七 義元の像
- 八 駿府二町街
- 九 宇都の山
- 十 鳥田の川留
- 十一 小夜の中山
- 十二 紅毛人の墓
- 十三 來船人の歌曲
- 十四 掛川の好事家
- 十五 秋葉の山
- 十六 戸守の鐘馗
- 十七 遠州訛
- 十八 吉田の花火
- 十九 吉田のめし盛附街妻
- 二十 岡崎の出女
- 二十一 吉田岡崎の妓樓
- 二十二 をか崎の夏芝居

- 二十三 五綵の山水
- 二十四 名古屋訛
- 二十五 名古屋の風俗
- 二十六 名古屋の評判
- 二十七 甚目寺の鐘
- 二十八 繪巻物附水滸後傳の目錄
- 二十九 名古屋の芝居
- 三十 名古屋の天王祭
- 三十一 津島の挑灯船
- 三十二 藪に香の物
- 三十三 江州の大水附攝河大水の噂
- 三十四 栗津の義仲寺
- 三十五 瀬田蜆
- 三十六 鏡山
- 三十七 三上山附百足山
- 三十八 三井の古鐘
- 三十九 奴茶屋
- 四十 遊女八千代が噂

卷の中

- 四十一 光廣卿の寛活
- 四十二 板倉侯の大量
- 四十三 六條廓の全盛
- 四十四 傾城局の券書

四十五	烟花城 書畫展觀 目錄	四十六	遊女吉野が傳 附蟹の盃
四十七	島原の噂	四十八	京師の妓院
四十九	祇園さし紙	五十	嫖客の噂
五十一	きかへの譯	五十二	藝子の枕金
五十三	舞子の評	五十四	三絃筥
五十五	妓の衣服	五十六	妓樓の夜具
五十七	京の女兒風俗	五十八	祇園大樓の噂
五十九	祇園の方言	六十	祇園の歌曲
六十一	御所うら	六十二	つくしわた
六十三	總嫁	六十四	四條の芝居
六十五	京師の評 附風俗の圖說	六十六	太秦の草紙
六十七	旅の盃 附大文字の火	六十八	六道の横うり

六十九	しらいと	七十	京の盆祭
七十一	内裡の御燈籠	七十二	りうたう太
七十三	せんす萬歳	七十四	京の七夕祭
七十五	地藏まつり	七十六	京地の酒樓
七十七	河原のすどみ	七十八	京都の節儉
七十九	洛外の古跡 附近江八景	八十	かし家の札
八十一	京市中の喪 附名古屋の伏見	八十二	女兒の立小便
八十三	女子のばうし 附伊勢尾張	八十四	栗田の陶器
八十五	京師の人物	八十六	噓談の名人
八十七	應舉が臥猪	同	京の浮世畫 附澤庵の畫讀
同	淀の洪水 撞木町の噂	八十八	八文字屋自笑が噂 附其碩
八十九	奴の小萬が傳	九十	近松門左衛門が傳 附墨跡

- 九十一 西鶴が墓誌
- 九十三 美濃屋三勝が墓附評
- 九十五 紙屋治兵衛が噂
- 九十七 乞巧女六が墓附評
- 卷の 下
- 九十九 契沖阿奢梨墓誌
- 百一 元和戦死の古墳
- 百三 鬼貫が傳附評
- 百五 難波雀の抄書附西鶴名殘の友
- 百七 松明の施行
- 百九上 太夫天神のかし借り
- 百十 俳優作街
- 九十二 榎久奉納の手水鉢
- 九十四 遊女夕霧が墓附評
- 九十六 淀屋辰五郎奉納手水鉢の噂附元祖義太夫略傳
- 九十八 二代目義太夫が墓
- 百 家隆卿の碑附貞柳碑の噂
- 百二 紹鷗が墓附千家の墓の噂
- 百四 大阪市中の總評
- 百六 住吉附難波屋の松小町茶屋
- 百八 浪華妓院の噂
- 百九下 伯人の評
- 百十一 難波新地

- 百十二 難波堀江附堀江さし紙
- 百十四 女子の評
- 百十六 妓樓混コンスザツゲキニ雜劇
- 百十七下 幫間京もならへ評す
- 百十九 吾雀が噂附幫間亦助が噂
- 百二十一 とぎやらふ
- 百二十三 京大阪商家の評
- 百二十五 伏見の夜泊
- 百二十七 山田の客舎附間の山
- 百二十九 古市芝居の噂附一身田及堀世古の噂
- 百三十一 坂和田喜六が墨跡
- 百三十三 其角が自畫讚の評
- 百十三 大阪妓院の方言
- 百十五 堀江の藝子
- 百十七上 浪速のめりやす
- 百十八 首のぶが傳
- 百二十 總嫁
- 百二十二 妾奉公人引札の噂
- 百二十四 道頓堀の芝居
- 百二十六 伊勢路の居風爐
- 百二十八 古市の總評
- 百三十 大平が噂
- 百三十二 道のべの權
- 百三十四 伊勢の好事家附人物の評

- 百三十五 筆捨山
- 百三十七 桑名の歌曲
- 百三十九 一目連
- 百四十一 名古屋の十五夜
- 百四十三 ばせをの發句塚
- 百四十五 かもうり
- 百四十七 東海道の噂
- 百四十九 大井川
- 百五十一 箱根東福寺の釜
- 百五十三 平越の富士
- 百五十五 大磯の戲咲歌
- 百五十七 婦庵の祝章
- 百三十六 桑名の秋雨
- 百三十八 桑名市中の喪
- 百四十 佐屋廻
- 百四十二 藤川の夜行
- 百四十四 からころも
- 百四十六 濱松の夜雨
- 百四十八 薩陀山
- 百五十 喜瀬川の大水
- 百五十二 さいの河原の懷舊
- 百五十四 名馬の足跡
- 百五十六 遊行忌の群集

附録

旅中自戒十五箇條

總目錄畢

壬戌羈旅漫錄

卷の上

簑笠漁隱遺稿
坦庵居士正幹校

一 大磯の懐古

五月十日大磯の驛に泊る。きのふ用事ありて僕をば品川よりかへし、今朝京傳子には神奈川にて別る。こころいまだ旅になれず、このゆふべ甚だ寂寥。鳴立澤もむかしの地に
あらず、虎が石、またよく人のしるところなればしるさず。

祐成全盛大磯傳 千里高名虎御前 可嘆衣裳群乳鳥
只今有出女如鳶

二 藐姑峯の雨

京傳名は醒字は四星、岩瀬氏、通稱を傳藏と云へり、京橋のほとりに住するをもて自から京傳と號す、翁と莫逆の友なりしゆゑ神奈川まで送りしならん、京傳は文化丙子九月、五十六歳にてみまかりぬ

十二日のあした、藐姑峯をこゆ。今朝雨ふれり。

箱根八里上流汗

騎馬越來行路安

却懼昨今臯月雨

明朝大井水漫漫

三 雨中の不二

十日の夜より雨ふりて、三嶋沼津原よし原、岩淵、薩陀山の間、一日も富士を見ず。府中逗留の間も、また土峯を賞するによしなし。

われに句なし山に不二なし五月雨

四 農男 附龍華寺

駿府の人の説に、富士にて四五月のころ、だんく雪のきえのこりたるが、寶永山の方、凹とところに、人の形のごとく雪ののこることあり。これを農男と稱す。この残雪見ゆるとしもあり、さま見えざるとしもあり。田子の土人いふ、農男見ゆる年は必ず五穀熟す。

此條は先板震笠雨談に出たれば省くべかりしを、翁當日の吟にちなみて圖さへ追加して許せてこゝに課するもの也以下雨談



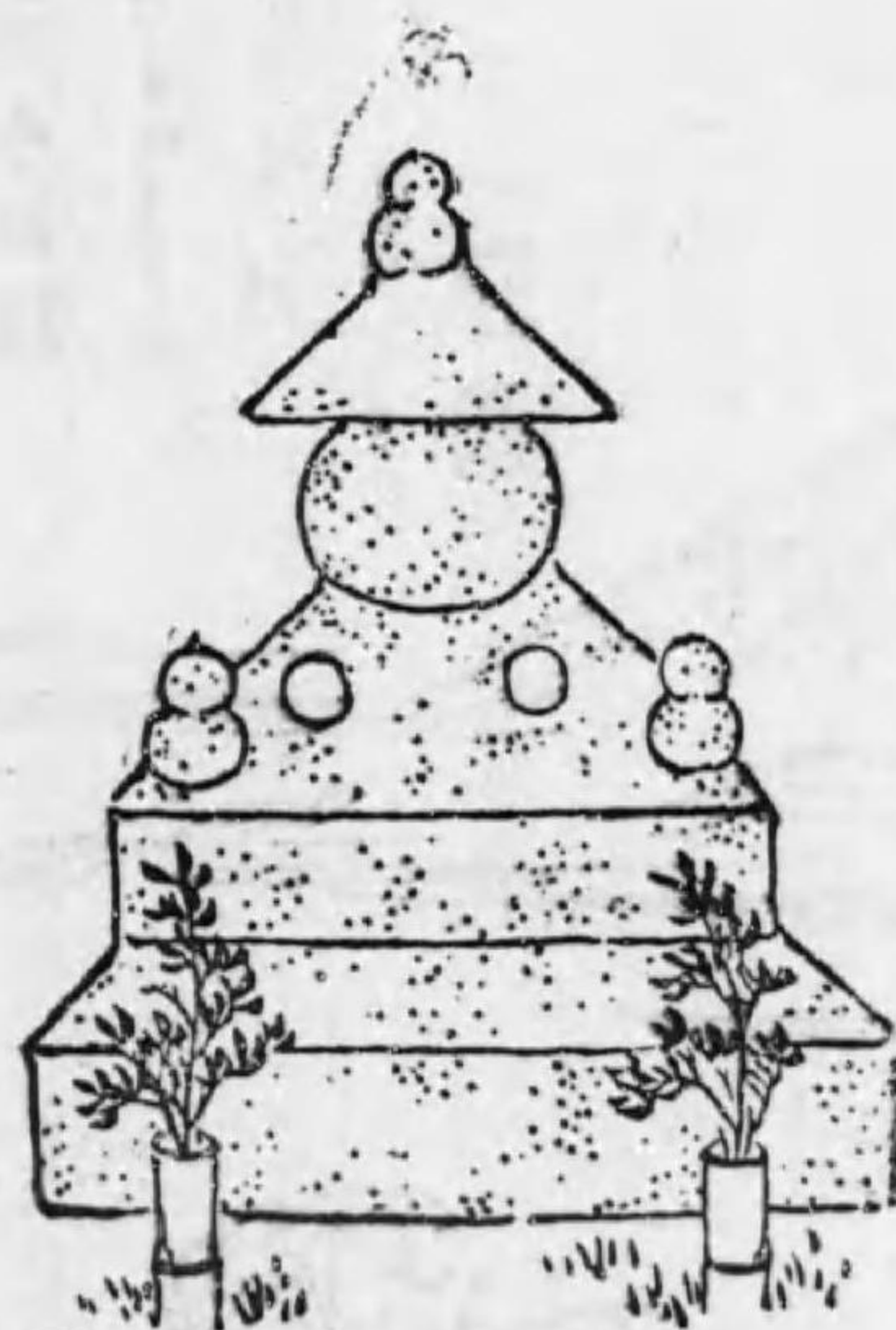
田子の土人
いふに
農男見ゆる
年は必ず
五穀熟す

田子

にのせたものは
悉くこれを省き
ぬ

凡士峯の眺望天下第一と稱するもの、駿州有渡郡大野村府中より三里龍華寺の本堂より、富士を正面に見る、最絶景なり。清見寺にまされりといふ。連日雨ふりければ、ゆかずしてやみぬ。

五 正雪が墳 附十三佛



かこちりあとのみー五輪も中
あんなくくるともあつサ三尺五六
すもあつてー墓法年月ハ滅そ
くくそりてあつてあつてあつて
くまえていりあつてあつてあつて

正雪

宮城野しのぶ一
墓太平記白石
中の人物として
俗問に膾炙せる
もの

駿府寺町菩提寺墓門右のかたに、由井正雪が墓あり。

又彌勒寺に十三佛あり。府中より西廿町許今は地名となりて、彌勒の十三佛と喚ぶ。これも正雪

が菩提の爲に、宮城野しのぶが建てしといふ、土人の説なり。こゝにも正雪が墓あり、尋常の石碑のごとし。宮城の信夫は未生の人なり、この女はよからぬ事うたがふべし。

六 梅屋勘兵衛が舊跡 此條雨談に出でたれば省く

七 義元の畫像

駿州阿部郡、大岩村臨濟寺駿機山の向 原の森の近地に今川義元の畫像あり。東帶 持笏五月十九日義元 忌日諸人に拜さしむ。此日雨ふりければ予參らず。

八 駿府二丁街

駿河府中の妓院は二丁町とよびなす。本名は阿倍川町なり。神祖御在城の日、免許の遊女町なり。今は大におとろへたり。見世はよこ見せにはる。故に格子の方には障子を建

神祖 徳川家康

絶倒する一聞く
者腹をかゝへて
笑ふ

てたり。嫖客へうかくの暖簾ねんれんをあけて、ほしいまよに内に入り、籬かきのかたより見たてるなり。ゆる
に妓うかれびみなまがきの方を正面まへに居る。ミセといふ樓上うかもせまくまたむさくろし。ざしき持
部屋むらもちと稱するもの、江戸よし原のにし河岸がしにおとれり。客一人あればその友あとよ
りゆきてそのざしきに入りて、ほしいまよにあそぶに妓をまねかず。九ツをかぎりにこ
の人々ひとはかへるなり。これをつけにゆくといふ。妓の詞ことば何しなんし、おいでなんし、な
どいふ言葉をつかへど、多くは駿府なまりをまじへたれば、絶倒ぜつたうすること多し。妓の詞
に文ふみといはず手がみといふなり。こんや手がみ一本かゝアずなどいふ。かゝアずは書く
べしといふなり。妓「何さんちつくりおいでなんしよ」客「今にいかずく」いかずは行く
べしなり。硯すずり蓋ふたなどむさくろし。藝子げいこもあれど、是亦似て非なるものなり。牽頭たいごは廓中
の米屋酒屋のわかいもの、又は廓くわくの門番もんばんなどの孩兒わいごなり。故に酒長さかちやう手代てだい門忠もんちゆうむすこ、な
どの名あり。この者夜は奉公のいとまあるをもて、幫間たいごをして、酒のみ小遣こづかい錢ぜにをもとむ
るの計はかりをなす。幫間たいごは羽う言語げんご形態けいぎ、胡蘆ころうするに堪たへたり。甚だいやなるものなり。二丁町の
安永九年の春、よしのや酒樂といふものはじめてえらみて発行す。その
のち終に行れず、前後一版なり。予一本を得てたづさへかへり。

九 宇都の山

宇都の山の十圍子じゅうゐごは、豆粒まめつぶほどの餌えを、麻糸あさいもて十づつつらぬき、五連ごれんを一トかけと
す。土人の説に、峠たうげに地藏ぢざう井いのたとせ給ふ、このみほとけの夢想によりて、十圍子を製
し、小兒せうじに服かみさしむれば、萬病まんびやう癒いゆといふ。圍子ゐごのかたち數珠ずしゆに擬するに
旅たび駕かにのればつづりをうつつの山うつゝにも目のあはぬなりけり

十 島田の川留

連日の雨に大井川往來なければ、岡部より島田の間に、諸侯しよこうみちくゝて、いとにぎはへ
り。予は二十日の夕島田に入る。予がしれる因幡屋いんぱんやてふ家も森侯の本陣ほんじんとなりぬ。この
家旅店かりやにあらねど、富めるものなればかくの如し。よりて因幡屋の向ひ、何がし源六と
かいへる商人しやうじんの家に逗留とちゆうす。時々の飲食いんじきは因幡屋より持來りて饗應きやうおうしぬ。夜中よちゆう驛中えきちゆうの繁はん
昌じやう小人こじんの小うたなど、しばらく江戸に在るが如し。川は十五日より二十二日にいたり
てはじめて明きぬ。

ササササササ
とて二字の草冠
のみを取りて合
せたる佛家の略
字也
うつゝにも目の
一「駿河なる宇
都の山邊のうつ
つにも夢にも人
に逢はぬなりけ
り」

妹がゆふ島田の驛にとめられてかみへゆきよのとどかぬぞうき

十一 小夜の中山

遠州小夜の中山夜泣の石は、日坂より十七八町ばかりひがし、山の往還にあり。無間山は街道より一里半なり。掛川の驛はづれより右のかたにみゆ。こよより見ればはなはだたかし。

新坂ちの蕨もろこ糕そだて兒あめ育あめ飴あめ 由來傳よ世夜啼よの碑いし 鯨音くじら斷絶たぎ無間む事じ

大士おほ方便べん垂た大慈だい

子育こ觀音くわん、小夜の峠久圓寺にあり。淡あはゲだ嶽たけ阿波手あはの神社、無間山觀音寺にあり。

十二 紅毛人の墓 雨談に出でたれば書く

十三 來舶人の歌曲 上に同じ

十四 掛川の好事家

掛川下復町の大場氏通稱大助松 風亭と號すは、遠州第一の好事家なり。近來名家の書畫をたくはふる

こと數百張、又よく客に待す。所藏の書畫中に、堂上方の寄合書、國學和歌者流の寄合書、儒者詩人書家畫工のより合書等あり。いづれも名家のみをあつめたり。古人の墨跡は猶もとめやすし、僅の扇面へ大家數十人のより合書などは、尤も志をこころざしはこぶこと厚からざれば得がたし。その弟を蘭陵といふ。通稱忠藏、書をよくす。この人を京江戸大阪伊勢へい出して書畫をもとめしむ。一國逗留半年に及べりとぞ。およそ三年にしていまだ盡さずといふ。田舎にはめづらしき人物なり。

十五 秋葉の山

秋葉山は掛川より麓まで九里あり。五十町一里なり。山中又五十町あり。參詣の道、守驛より兩路あり、一は山越にして甚だ難處なり。一は平地なりといへども川多し。四十八瀬といふ。予ひとつくかぞへたるに二十七瀬あり。霖雨の後は五十瀬にもなるといふ。夏日は橋なし。故にこの川をことごとく歩わたりにす。又道中食物乏し。いぬるの旅店いまは大に衰へて、麓に數軒の旅店あり。甚だ奇麗なり。山中にもかゝる旅店あるやと、目をおどろかさばかりなり。秋葉山中一町々々にしるしの塚あり。杉の木立、宮の

守驛一又「森」の字を書く、今専ら然り
いぬか一犬居地、名也

つくり、江戸の王子の社邊やしろへんに似たる所あり。駿州より尾州までは、驛の十字街つじじ、或は街道みち、みな悉く秋葉の常夜燈あり。この社近年もつとも繁昌なり。

いろはにはへとほつあふみや假名の數四十八瀬も越えていつ京夏ながら麥の秋葉も過ぎがてに山路は蟬のしぐれそめにき

十六 戸守の鍾馗とまもり しゅうざい

遠州より三州のあひだ、人家の戸守はことごとく鍾馗なり。かたはらに山伏某と名をしるしたるもあり。鍾馗のこと愚按あり、こゝに贅せず。

十七 遠州訛なまり

遠州より西は、半元服はんげんぷくの娘多し。白齒しろはのむすめはたえてなし。行くべきを行かず、くらふべきをくはずなど、ずの字をそへていふこと、駿州より尾州のあひだみなしかり。なまり就中遠州人なまりすが多し。

京一、上、下、中、下、はの最後とするよりいつ京都に著くならんとの意を以て戯れたる也
麥の秋一舊曆四月のしぐれ一蟬時雨、蟬の諸聲に鳴き立つるをいふ、歳時記六月の部に於てたり
半元服一眉毛を落さず髪を丸鬘にゆひたるのみなるを稱するが普通なれど、茲は眉毛を落さず齒のみ染めたることか、又は齒のみ染めて髪は娘の姿なる事と聞ゆ

十八 吉田の花火

吉田一今の豊橋

三州吉田の天王まつりは六月十五日、今夜の花火天下第一と稱す。大筒おほづつと稱するもの立物たてものと、二本、筒の周圍めぐり數十尺、たかく櫓やぐらを組みくみてこれを居すう。その外種々の花火あり。大筒の資料は例年城主よりこれを出さる。おのく、棧敷さんじきをかまへてこれを見る。又近國よりも見物に来るものあり。鍛冶町のうら通りには杉の木をうゑ、囃子はやし神樂あり。花火は市中にてあけるなり。この夜屋上よやうじやう或は簀子すのこの下に、火こほれかよたりとも、火難くわなんのうれひなし。是氏神うぢかみの加護かごによるといひつたへたり。

牛頭こづてんわう天王てんわうの社、神明、八幡、ともに吉田城内にあり。六月十五日天王まつり、前夜十四日花火あり。本町、上傳馬町の兩町にて揚げる。高さ十三間、巾三間、これを立物といふ。これ過ぎて大花火あり。火のうつらぬやうに、大釜を覆おほひにす。これに火をうつす時は、その火屋上にむらがり下る。見物の人々はぬれ筵ぬれしんをかつぐ。その外町々の花火數百あり。十五日よし田五ヶの寺院より飾山かざりやまを出す。至つてさとびて古雅こがなり。十四五の童頼朝わらはよりともに扮いでたちて、金の立烏帽子たてゑぼうし直垂ひたしたち太刀を佩はく。馬上なり。頼朝の乳母めのとといふ者あり。綿帽子

はやしーはやし
方
あちみ、はし本、
鹽見坂一何れも
濱名湖より三州
路に入る名所

今切のわたしー
濱名湖の渡し

緋のはかま、馬上これにしたがふ。また十六人の殿原とて、梯の素袍にかけ烏帽子これにしたがふ。城内にて走馬あり。中に重忠と名告るものあり。此左右にあみ笠浴衣を被たるもの二人、まんぢうを數百ふくろに入れ、これを篋にゆひつけてこれにしたがふ。かの重忠は騎射笠錦の陣羽織、背に幣をさし、領主の棧鋪の前たるたり、馬上にて禮をなして、ふくろのまんぢうを投る。これにあたるを吉事とす。また篋をどりといふあり。大太鼓一人、小太鼓二人、同衣裳にぬりがさをいたとき、覆面し、にしきの陣羽織小手脚當なり。はやしはあみがさゆかたを著し、さよに挑ちんをつけて同音にうたふ。「天には何佛にてまします、日本一のあら神、あらる、はし本、鹽見坂、名所々々のはなを見さいな」これをくりかへしうたふなり。

十九 吉田の飯盛 附街妻

よし田のめし盛、夏は越後ちどみにおなじ編の前垂をかけ、手に團扇をもちて夜行す。よし田岡崎とも、妓はことごとく伊勢より來たるものなり。ゆるに妓ばかり伊勢訛なり。妓席上にて三絃を鳴すに、かむろだちなど諍ふことあり。絶倒するに堪へたり。今切の

わたしを経て西は、人物その外、江戸にあらず、京にあらず、中國の風姿に於て見るべし。土地の婦人はかならずしも美ならず、商家の街妻などを見れば、黑暗天女の如し。

よし田をさう
崎の妓の髪
かゝの髪
是伊勢風
かゝ土地の
女にあらず
なごり伊勢
人の妻娘
も大いこれ



伊勢の嶋田鬘りうらまは江戸おちうー京に
これおちうらまは江戸おちうー京に
まけおち油をさうくつるん京はまけもつはせ



うらまをまや
るんくつとた
けくつるは
さうりおちうら
まありのあり
さくく伊勢ハ
さくくおちう
なごりおちう
九一おちうらま
んたおちう

出女一娼婦

はれて一公然

めしもり一旅店
にありて客の給
仕し兼て枕席に
待する者

二十 岡崎の出女

をか崎の妓は、齒を染むることならざりしが、近年ゆるされて齒を染むるなり。芝居などへも見物にゆくことならざりしが、これも今はゆるされたり。妓の風俗よし田に異なることなし。妓夜行する時は、夏はふるき浴衣、冬は布子などをはをりてありくなり。もと絹布を著べきものならぬゆるかくのごとし。但諸候の旅館に参る時のみ、はれて美服にて夜行す。

二十一 よし田をか崎の妓樓 附矢矧ばし

よし田、をか崎、四日市など、みなめしもりをかりにやり、ことごとくよびよせて見たるなり。客あるものも必ず来る。妓は一軒に一人をゆるさる。一軒二人ある家あり。三人抱ふることをゆるさざき、一團の妓百餘人あり。こんやは都合がわるいといふことを、つもりがわるいといふ。よし田岡ざきより西、伊勢の妓樓みなおなじ。京都祇園にては誰さんはなりませぬといふ。大阪新町にては、誰さんはあけてござりますといふ。をかざきちようじ屋の八重といふめしもり、少しく顔色美なり。ひやうばん價よりたかし。

矢矧橋長さ二百八間、やはぎ川、やはぎの里のひがしにあり。水源木曾の山溪より落ちて、末は鷺塚川といふ。西尾にいたりて二流海に入る。矢はぎ、男川、とよ川の三大河あるをもて、國を三河と名づく。

二十二 をか崎の夏芝居

をか崎六地藏といふところにて、土用芝居を見たり。よし簀張にして、二階樓鋪なし。中山來助、その外中芝居の俳優なり。九人の外客ある妓も、客と同席にて見物することあたはず。狂言ははざま合戦と五人切にてありし。萬事不都合絶倒すること多し。

二十三 五綵の山水

三州新堀 をかざきよりふかふ 深見莊兵衛 木綿問屋 といふ人あり。子息は左太郎といふ。狂名を朝倉三笑といへり。この家の納戸の縁頼戸のふし穴に、紙を一尺ばかり手前におしあてれば、十間ばかり先の泉水草木悉く紙中にうつる。その鮮明畫けるが如し。五色は五色にうつ

不都合一辻接合
はア

言語同断一同は道の誤、いふにいはれぬ。南村鞍耕録卷の十五、平江虎丘閣版上有「一紙當其影則白紙承其影則一寺之形勝、悉於此見之、但頂反居下耳、此固有象可、風、非、幻出者、松江城中有、四塔、夏監運家乃在、四塔之東、而小室内却有、四塔影、長五寸許、倒懸于西壁之上、不知從何來、然不常有、或時見之焉、是又不可、曉也。

り、天色は天色にうつる。尤いづれもさかさまにうつるなり。予が見しときは、池に杜若あり、竹あり、柳あり、庭に小兒の手習草紙ほしてありしが、表紙のもん字年月まであざやかによめたり。雲の追々にあつまり、又ちりゆき、竹やなぎの風に戦ぎ、池に漣のたつなど、言語同断の景色、理外の機關なり。主人こころみに庭に小兒を出して見せしむるに、眼鼻衣服の模様までよくうつれり。わづか



羽又左衛門が納戸のふし穴に紙をさしかざせば、東寺の塔あざやかにうつる。また信州上の諏訪樂師堂のうらの羽目のふし穴よりも、塔影のうつるといふことはかねて聞きしが、いまだ目前に見ず。京と三河の事は、予遊歴の序まのあたりに見たり。おもふに日さしの自然としからしむるものなるべし。日中はうつること尤もあざやかなり。世間にかゝることまゝあるべけれども、幸にその方にふし穴なく、または人のつねにいたらぬところなどにて、氣のつかぬなるべし。今按ずるに鞍耕録に塔影のことあり。又西陽雜俎にもこれに似たることあり。かゝれば異國にもむかしよりありし事と見えた

り。

二十四 名古屋訛

名古屋人は、するといふをせるといふ、「カウおつせる」「どうせる」「何いはつせる」のたぐひなり。また人とはいはず、仁といふ、「かの仁がきさつせる」「よい仁でや」などなり。よい人とはたえていはぬなり。又きんとしたといふ。りつばのかたち、又きつとしたといふことにも通ふなり。

なごやなまり
昨日 人の家婦云、人の家婦ニ問經ス、ルコト他邦ニモアリトイヘド、出會ノ宿所ヲ云キヌト、ノカゴトナリ
べつといづい。取テ、こざらずね。不來、ようまちほけにあはさした。いまくしいが。ひ
ふいとまた。よみぞこなひもあらアすと。ホニト云ニ同ジ、終、夜、おれをたらかしちやうらかし。ひなたは。
こいて。ねたはひなんし。腹立ノ貌又、又どうてどややなどといふもはらだちのかたちなり

二十五 名古屋の風俗

名古屋は男女の風俗、もつぱら大阪をまなぶなり。ゑびしりわけ男子の風 おほこづと女子の風 などあり。圖は末に出づ 人氣の活達くわつたつなるは江戸にならふなり。吝嗇りんしやくは京をまなべり。故に江戸の戲作げさく狂文きやうぶんも名古屋まではよく通ずるなり。大阪は通ぜずといへどもこれをよるこぶ、京の人には一向通ぜず 名古屋の女子がた顔色かおいろの美なるも、腰こしは大に太おとし。一人として細腰さいようなるはなし。これ風土によるにや。男子夏は編笠あみがさを蒙かりて歩行す。日傘ひがさをさしたるもあり。但藩中はんちゆうの女子のみ、萬事江戸の風俗に異なることなし。

二十六 名古屋の評判

名古屋は魚肉ぎよくに富みたる所なり。魚町七ツ寺ういしなまちななでらなど、よき酒樓あり。蒲燒屋かはやきやと稱するもの一種にあらす、種くまの料理をもするなり。蒲燒の風味、京江戸にはおとれり。硯蓋すずりふたにも蒲燒をつむなり。凡そ劇場の外、三絃停止さんせんていしなり。見世物なども太鼓のみなり。凡そ酒樓中客二階にあれば、男子出でて酌しやくをとる。女子は二階へ上らず。國禁こくきんの甚こしきことこれ

にてしるべし。名古屋にて針妙せんめうと稱するもの、三州あたりの術妻げんさいに同じ。これも今は稀なり。吳服屋は水口屋繁昌せんちやうなり。煎餅せんべいは岡山姿見すがたみなどいふ家よし。狂言踊衣裳きやうげんおどりいしやうはまく屋、鼓太鼓つづみたいこは春田屋、浮世繪うきえは駒新こましん、唐繪からえは月峯ひつほう、紅白粉べにおしろいは鏡屋、造り花すゐたやは吹田屋、書肆しよせいは風月堂永樂屋、貸本は湖月堂、菓子あめは寶屋、鮎あゆは岐阜より來るをよしとす。狂歌は田鶴丸たづまる、誹諧はいがいは士朗、この外いくらもあるべし。春日遊山の地は、門跡のかけ所、若宮八幡、七ツ寺、熱田櫻の天神等なり。天神の別當を岳靈院といふ、禪宗數品の古瓦をあつめて瓦礫舎といふ、風流の鑑會はこゝにて興行す。又夏日納涼の地は廣小路樂師前ひろこうじがきなり。柳の樂師の別當を正傳寺といふ、瓦礫傳の寶弟なり。奇石をあつめて多くもてり。柳下亭と號す。この兄弟風流の人なり。數十軒の出茶屋、見せ物、芝居等ありて、はなはだにぎはへり。柳の樂師より廣小路の景色けいしやく、江戸兩國藥研堀くわにこくやくけんぼりに髻はづたり。納涼の地は琵琶島びわしまよしといへども道遠し。故に水邊にあらすといへども、廣小路ひろこうじ最も繁昌はんちやうせり。

二十七 甚目寺の鐘 此條も雨談に載せられたれば省く

二十八 繪卷物 附水滸後傳目錄

名古屋にて見たりし繪卷物

一すゞめ松ばら

繪卷物一卷

名古屋 山崎良民所藏

勾當の内侍の作といふ。雀の死したるを、諸鳥のとむらふなり。いにしへの戲作なるべし。いづれの時の内侍にや、詳ならず。

一福有のさかし

繪卷物寫一卷

名古屋 鈴木甚五左衛門所藏

京にありし日、おなじ雙紙のうつしを見たり。橋本氏の所藏なり。今兒童の夜語に、花咲ぢよといふもの、よくこの福有長者のことに似たり。是より出でたる話にや。

一花鳥風月

繪卷物一卷

名古屋 柳下亭所藏

一天狗の内裏

繪卷物

これは先年名古屋の道具屋にありけるよし、いづれの旅人かもとめ行きけん、次の日問ふに、うれたりといひしとぞ。名古屋人もをしみあへり。

一國姓爺後日

義太夫本近松作大字繪入

一美本繪入三國志演義

柳下亭所藏

これらはいづれもをかきものなり。予も逗留中、珍書といふほどにはあらねど、古本をすこし購ひ得たり。

追書
福富のさうしは京にて橋本經亮の所藏を見たり。そをうつさせしが、京傳子懸望によりおくりあたへたり。雀松原作者勾當内侍の事後に伊勢松坂の一友人、小津桂窓云、この勾當内侍は、おそろく四後土御門院の時に、新撰筑波集の作者の内才女なりしが筆なるべし。この前後勾當内侍に才女ありしを聞かざると云へり

又名古屋廣小路秤座守隨の藏書に、水滸後傳十卷あり。主人をしみて人に見せず。予柳下亭に就きて、その目錄をうつしたり。

○水滸後傳

古宋遺民雁宕山樵編輯
金陵隱客野雲主人評定

- | | | |
|------|------------------------------|----------|
| 第一回 | 阮 <small>小セナリ</small> 統制梁山感舊 | 張幹辨湖泊尋災 |
| 第二回 | 毛孔目横吞海貨 | 顧大嫂直斬豪家 |
| 第三回 | 病尉遲間住遭殃 | 樂廷玉失機入夥 |
| 第四回 | 鬼臉兒寄書羅禍 | 趙玉娥銜色招奸 |
| 第五回 | 老管營蹇遭橫死 | 撲天鵬冤被拘囚 |
| 第六回 | 飲馬川李應重興 | 虎峪寨魔王闖法 |
| 第七回 | 李良嗣條陳賜姓 | 鐵吽子避難更名 |
| 第八回 | 萬柳庄王貌招殃 | 寶帶橋節婦遇故 |
| 第九回 | 混江龍賞雪受祥符 | 巴山蛇截湖徵重稅 |
| 第十回 | 墨吏賠錢受辱 | 豪紳斂賄傾家 |
| 第十一回 | 駕長風群雄圖遠略 | 射鯨魚一箭顯家傳 |

- 第十二回
- 第十三回
- 第十四回
- 第十五回
- 第十六回
- 第十七回
- 第十八回
- 第十九回
- 第二十回
- 第二十一回
- 第二十二回
- 第二十三回
- 第二十四回
- 第二十五回

金鼇島開基殄暴
救水厄天涯逢故友
安大醫遭讒避跡
大征戰耶律奔潰
潯陽樓感舊題詩
穆春喋血雙峯廟
黃統制遭枉陽山
納平州王輔招兵
賣楊劉村汪豹累呼延
李應火燒萬慶寺
破滄州義友重逢
喪三軍將材離火宅
獻青子草野全忠
折王進小乙逞雄談

暹羅國被囚和親
換良方相府藥佳人
聞參謀高屋留容
小割裂企弓獻詩
柳塘灣除兇報怨
厄成計敗三路兵
焦面鬼謀妻落井
逐強徒徐晟奪甲
失保定朱同投飲馬
柴進仇陷滄洲牢
困汴京奸臣遠竄
演六甲兒戲陷神京
贖難人石交仗義
救關勝大名施巧計

コノ回王進ハジメテ出ル

- 第二十六回
- 第二十七回
- 第二十八回
- 第二十九回
- 第三十回
- 第三十一回
- 第三十二回
- 第三十三回
- 第三十四回
- 第三十五回
- 第三十八回
- 第三十七回
- 第三十八回
- 第三十九回

逢天巧荒殿延英
渡黃河叛臣顯戮
橫衝營良馬歸故主
還道村兵擒郭道士
聚堂雲雨寒朝宋
國主遊春逢羽客
慶生辰龍舟見競渡
頭陀役鬼燒海泊
大復仇二兇授首
日本國興兵構釁
振國位勝算平三島
金鼇閣仙客留詩
武行者僧房敘舊
丹霞宮三眞修靜業

發地雷寺基殲賊
贈鳩酒奸黨凶終
鄆城店小盜識新營
柴髯伯義護美髯公
同泛群雄碎地
共濤謀叛遇番僧
篡寶位綺席進霞丹
李俊誓志守孤城
議嗣統衆傑歸心
青霓島煽亂殲師
建奇功異物貢遐方
牡蠣灘忠臣救駕
宿大尉海國封王
金鑾殿四美結良緣

コノ回日本ヨリ共勝ガ殘黨ヲスクフナリ

コノ回公孫勝辭シテ山ヘカヘル

コノ回李俊ヲシヤ

第四十回

荐故歡燈同宴樂

賦詩演戲大團圓

以上四十回目錄畢

卷中ノ人民○印ハ星外ノ英雄、△ハ星中英士ノ子孫、□印ハ李俊ト同盟ノ人、前傳ニ小集義ト云フニアル人ナリ。○印ハ暹羅國ニ止ラス人ナリ、無印ハ星中ノ豪傑ナリ。李俊 シヤムロノ王トナル 柴進 シヤムロノ丞相トナル 公孫勝 辭シテ山ヘカル 李應 蕭讓 燕青 樂和 蔣敬 王進 欒廷玉 扈家庄軍法ノ師 朱武 樊瑞 關勝 孫立 呼延灼 朱仝 黃信 扈成一丈青ノ兄ナリ 阮文七 裴宜 載宗 鄒潤 穆春 杜興 楊林 聞煥章コノ女ヲ立テ俊ノ后トス 花逢春花榮ノ子ナリ。シヤムロ國王ノ女ニ戀シテ附馬トナル。初メ逢春シヤムロヲ伐シトキ、公主槽ヨリ逢春ガ美少年ナルヲ見テ密ニ是ヲ戀フ。李俊シヤムロ王ノ爲ニ、共濟等ヲ亡シテ後、國ヲ逢春ニ讓ラント云フ。逢春シタガハズ。衆オシテ俊ヲ王トシ、逢春ヲ附馬トス。コレ俊シヤムロ王ノ爲ニ、逆賊ヲ亡シタル功アルヲ以ナリ。○ハジメ共濟、企叛シテシヤムロ王ヲコロシ、位ヲ篡ノトキ、李俊一人シヤムロニアリ。依レ之俊兇兵トタカフ。共濟日本國ヘ救ヲ乞フ。日本關白、三萬ノ兵ヲ發シテ來リ救フ。コノ回ノ評ニ云、關白ハ官爵ナリ、關氏ノ人ニアラズ云々。關白ノ兵來ラザル以前、共濟等首ヲ授ク。

コ、ヲ以テ李俊勢サカンニシテ、日本ノ兵ヲ敗ル。關白ノ兵船、大風ニアウテ、ソノ終ヲシラズ。文中關白トノミシルシテ、ソノ姓氏ヲシルサズ。コノ作者明末ノ人ナルベシ。故ニ關白ノ名ヲ聞クコト久シ。依テ大將ヲ關白トス。胡蘆スルニ堪ヘタリ○柴進ヲ丞相トスル條下ノ評ニ云、進ハ宰相ノオニアラズ、然レドモコノ人名家ノ子孫ニシテ、又德行アリ、故ニ衆人オシテ相トス云々。
 △宋安平 宋清ノ子 呼延鈺 灼力子 徐晟 金鎗子 徐寧ノ子 宋清 凌振 安道全 金大堅 童威 童猛 費保 高青 貌雲 狄成 孫新 顧大嫂 皇甫端 蔡慶 武松 武行者ハ、シヤムロニ至ラズ、最期ニ群雄ノ忠義ヲ論ジ、宿大尉ニ請ウテ、李俊ヲシヤムロ國王ニ封ズ。

以上四十七人

この書倉卒にしてこれをよめり。故にその目錄を抄出して後勘に備ふ。水滸後傳もと二本あり。共に今世にまれなり。大阪の國瑞の話に、予崎陽にありし日、水滸後傳を得たり、そのころは小説にこころなかりければ、價二十目ばかりにかへて人にやりぬ、今おもへばをしむに堪へたりといへり。大阪逗留中、書肆に水滸後傳のことをきくに、その名をだにしらぬ書肆多し。江戸にてもたえてこの書をみることなし。

追書
 伊勢松坂の友人
 殿村佐五平、近
 ぞる京師にて水
 滸後傳を購得た
 りといふ。享和
 中予尾張名古屋
 の客舎にて、一
 冊せしかども、
 倉卒の際にして
 多く忘れたり。

よりて借覽せま
はしきよしをい
ひつかはしけれ
ば、うけひて郵
附し、庚寅三月
二十一日右の書
全四十回十冊島
屋よりとゞり來
る。佐五平は篠
齋と號す、松坂
の豪富にて、本
居宜長の門人、
和歌を嗜み、又
和漢の稗史を好
む。百十里外に
在て書を貸す友
は多く得がた

水滸後傳二本あり。一本は四才子傳の評をせし天花翁の作なりといふ。予いまだこれを見ず。

馬琴按ずるに、寛永年間、山田仁左衛門といふもの、暹羅國に渡りて登用せられ、大國あまた領せしことあり。その事、智原五郎八が暹羅記事にくはし。しかれば水滸後傳の作者、粗山田仁左衛門が事を傳へ聞きて、李俊がことに撮合せしにや。

仁左衛門が暹羅國より奉納の繪馬、駿府の淺間の社にありしが、近屬本社回祿の時、かの繪馬も焼けたり。其寫し神職の家にありといふ。

再按ずるに、山田仁左衛門が事は、唐山にて水滸後傳の作ありしより少し後なり。かの書に撮合せしにはあらざるなり。余が考別記にあり、今亦贅せず。

二十九 名古屋の芝居

名古屋の芝居は、橋町と大洲にあり。しばらく中絶して、又近年免さる。竹田からくり名代なり。俳優は九人の外を免されず。予が見たりし時は、藤川八藏、中山一徳、松本よね三、中山文五郎、市川甚之助、國藏弟子中芝居たてもの等にて、釜が淵の狂言なりき。切狂言に、

米三が無間の鐘評判尤よし。米三は始終評判よし。八月に至りて兵太郎、歌右衛門、叶眠獅雜介弟女形なりなどくだれり。はじめ橋町にて興行。八月は大洲の芝居なり。二階棧敷なし。又辨當は椀膳にて運ぶこと

を禁ず。故に食物を七寸位の重箱に入れて運ぶなり。豪家見物の前には、重箱をつみあけて、見るにわづらはし。又茶菓子などうるものは、こぼく悉く十四五歳の童なり。茶いらんか、菓子いらんかといふ。すべて名古屋在津島邊言語甚だ野鄙なり。

木戸に繪看板なし。板に俳優の名を書きつけたると、幟のみなり。名古屋の町人ひいきの俳優へ、あらそうて水引をやるなり。桃色の木綿に、墨にて進上某丈の文字をぶつ付書にしたる出來合の水引もあり。

三十 名古屋の天王祭

名古屋天王祭の車樂は、車二輛を組みあはせて上に山を飾る。銚なし。車は大なる地車なり。大八にはあらず、牛をつけず、大なる綱二筋つけて、數十人これをひく。車樂の欄干はろぬりにして、かな物又立派なり。四方に猩々緋、或は天鷲絨に金絲のぬひものしたるきれをさけて、甚だ奇麗なり。上にはいろくの人形をおく。その人形拍子けれ

水引一舞臺の上
に振る細長き幕

はせてさまざまの機關あり。笛、太鼓、つづみ、しやんぎりにて拍す。祇園はやしこれを警固は上下を著す、袴羽織なり。船鉾は京のうつしなりといふ。伯樂天上陵王、布袋かち子人形のをどりあり。壽老人、上布袋の車樂は、から子の人形前に立ち、筆をとりて文字をかくからくりにて、甚だ手際なるものなり。凡そ車樂七ツばかりもあるべし。十五日の夜試樂、十六日未明より城中へ引込み、日暮れてかへる。車樂に挑灯數十張をつけていとはなやかななり。四月十七日東照宮の御祭禮あり、その禮殿重なりと云ふ。名古屋堀川の向ひは鳶のもの多く居る所なり。此所にてわかきものども、六月天王祭のまへ十二日頃より、まい夜いろくの俄をする。或は大なるはんぎりの桶をおき、そら豆一升廿八文と書きたる札を出し、その側に筵を敷き、數十人丸裸になり、尻の方を上むけ、うつぶけになり居て、そら豆のかたち似せて、人をわらはせるなり。宵より五ツ過まで、かやうにかどまりある。又は人家數十軒をうちぬき、門毎に大なる桶を横にふせ、底をぬきて目がねの如くし、庇には山川草木をあやしく造りなして、その上に七八人さまざまにいでたちて、あやつり看板の人形のごとく見せる。これも五ツ過までは、身うごかしもせず。さて桶の穴より内を見れば、向ひは隣堺の垣など引はらひ、廁物置も脇へ引いて野原のごとくし、曠々たる所に、數十人

萬度一、まんど、
萬燈の略言、木
匡に紙を張り萬
度の祓箱の如く
作り祭禮などに
火を點ずるもの

忠臣藏夜討の體にいでたちてならび居る。のぞきからくりの俄なり。警固のものは上下を著てのこらず庇にならべり。この外毎夜さまざまの俳優をなす。晝は崩したる所をつくろひ、夜はくれよりしくみにかよる。その體甚だいそがし。又七月盆中、名古屋の市中、小兒ちひさなる萬度を作り、太鼓にてはやしありく。これを梵天と名づく。大人もうちまじりて、種々の俳優をなすといふ。名古屋の天王祭、宵宮に家々温純を製する。こと恒例なり。此地うどんはなはだよし。

三十一 津島の挑灯船 此條雨談にくはしければ省く

三十二 藪に香の物 右に同じ

三十三 江州の大水 附攝河大水の噂

六月三日より雨ふらずして暑氣甚し。廿五日に至りて雨少しくふれり。近在みな雪す。予はこの時名古屋にありき。廿七日の朝、桑名、四日市邊、朝四ツ時頃まで雨ふりけるよしなれど、宮はすこしふりぬ。宮と島見に一兩年前よりめしもりをあくことをゆるさる、古田、をか崎には似ず、いづれも醜態なり、名古屋人、これをあかめと渾名せり。妓樓あれど、旅人はその趣廿七日に宮より乗船、この夕石薬師泊り。明朝より大雨。廿八日水口に泊る。この夜ますます大風雨。廿九日の朝、横田川水口より二里餘までいたりしかど、水まして渡なけれ

澤蟹の云々一蟹は横道ひの洒落

ば、ぜひなく晝頃又水口へ引きかへせり。餘の旅人は横田川の川端かはたいづみといふ所の建場茶屋ぢややへ泊るやうすなれど、予は人足にんそくの都合あしければ泊らず。その夜大水、水口田町へは床上四五尺水つく。驛のうら手の田畑一面に水おし來り、見るうち五六人溺死す。予は驛の中程鈴鹿屋といふ旅店にあり。この所は高みにて水難なし。いづみは十二軒ながれたり。もし今日いづみの建場茶屋へ泊りなば、むなく水中の鬼となるべきを、運つよくして一命をひろひぬ。いづみに泊りし旅人七八人みえざるよし。土地の人は、うらに大藪あり、この竹にとりつきてたすかりしといふ。これによりて一兩日水口に逗留す。七月三日の晝頃、水口をたちて石部に至る。此間所々の堤崩れて田畑をおし崩し、街道は古松倒れ、碌々として足を入るよの地なし。横田川にて、

ころんでもたどはおきじとおもふなり大事の命まづ拾ひつよ
澤蟹のあゆみて渡る横田川あなとほく來ぬふるさとの空

洪水に家を流されたるもの、道路に號哭し、或は太鼓をならして人足をかりあつめ、堤を修覆し、水死の骸をたづぬ。みるもの感哀して魂をいためしめずといふことなし。横田川をわたりて二十町ばかりゆくに、牛を牽きて田畔より來るものあり。この牛脊の上せきに泥どろつきて、腹は細くその聲悲し。その人の云ふ、是はてばといふ所のものなるが、洪

梁の恵王の仁一孟子に「王坐於堂上、有牽牛過之、堂下者王見之曰、牛何之、對曰、將以毀鐘、王曰、舍之、吾不忍其斃、斃若無罪而就死地也。」

るち川一近江愛知川、正しくはえの假名也、胸勢一胸勢

水いまだひかずして、牛に飼ふべきものなし、故に石部の在ざいにしる人あれば、牛をしばらく預けん爲ために來りしといふ。予この牛を見て、梁の恵王の仁をおもふのみ。程なく石部にゆきてきくに、草津驛洪水にて家流れ人死す、故に昨今往來なしといふ。よりて今日石部に泊る。明日徑あることを聞き出し、案内をやとつて石部をたつ。草津までの間、堤崩れ家流れて、ますく駭然たり。草津の驛の入口には、膳所より役人詰居て、人を通さず。よりて近在へ水見廻みまわにゆく體にもてなし、驛の入口より左へきれて、田の中を行くこと十五町ばかり、水高もよをひたし、長き竿を杖とし、一步はたかく一步はひきく、互に聲をかけ、からうじてうばが餅の前へ出でたり。是よりは陸地なり。問屋より表通の家八九軒おし流し、うら通は人家多くながれ、四五十人も溺死す。死骸は積みて累々たり。これのみならず。森山、彦根、又大水、家流れ人死したりといふ。予が荷を持ちたる人足も、庇ひさしにとりつきて、十町ばかり流れたりしが、しれる人の家の二階へ流れつき、すぐに二階に這ひあがりて、一命をたすかりしといふ。阿波侯この時ち川に居たまひしが、守山の洪水によりて、胸勢食物乏しく、難儀したまひぬとぞ。只鷺々として東西この話のみなり。大津も驛の入口はすこし水つきたりと見え、石橋など少し

く損じてあり。逢坂山は山中大に崩るたるよしなれど、街道は山少し崩れて、一兩日馬を通さず。

あふさかのせきとめかねつ秋の水

通路—交通

水見聞—水見分

治定しがたし—
明瞭にかうと定
めがたし

三日夜、京都木屋町の旅宿へたどりつきてみるに、京は水難なしといへども、三條五條の橋の外、かり橋はみなおし流し、河原茶店の腰かけ等みな流したれば、涼みもなく寂寥たり。さて五七日は大阪への通路もなく、只攝州河州洪水の風聞まぢくなり。四日の朝、角倉家中森氏の話に云ふ、余きのふ伏見へ水見聞にまかりしに、伏見豊後橋中書嶋等はみな二階より船にのりて逃げしとぞ、淀の城は堀の屋根少し見ゆ、大阪天満橋、天神橋、その外橋五ヶ所落ちたりといへど、いまだ通路なければ治定しがたしといへり。今日清水にのほりて、伏見のかたを眺望するに、八はた、山崎邊、水一面にして只眞白に見ゆ。四五日経てやうく大阪の通路あり。しめ野堤きれて、河内へ水おし入り、水損の農民は道頓堀の芝居へいれおかれ、大阪中の豪家、或は一町々に組合ひて施行を出す。或は米五十俵、錢百五十貫文、或は單物五百、繻絆千枚、身上の分限によりて差あり。凡そ攝河の水損百二十餘ヶ村なりといふ。十人これを語れば、十人大同小異な

り。只聞きしよりまさされるものは、大阪の施行のみ。宇治邊大洪水、宇治はしは落ちて、橋の社流れ、興聖寺、平等院大に荒れたり、八はた山崎邊は水十八九日ひかず

七月十日頃、大阪より京へ東の洪水を告來る。その文に云ふ。

六月廿七日、八日、大風雨、忍領熊谷土手二百間許一ヶ所切込み、又一ヶ所八十間餘切込み、夫より東の方、幸手、栗橋近在方關宿、權現堂切込み、奥州海道、中山道、今五日迄往來留、所々家流れ水死人あり。江戸本所北川筋、三圍秋葉邊出水、往來凡そ五尺程、相州戸塚邊近在方大水、六郷川二十八日より二日朝まで留る。馬入川二十八日より四日まで、箱根三枚橋落ち、大井川二十八日より八日巳の刻まで留り、鈴鹿山崩れて馬荷通らず。二十八日大雨、二十九日大風雨、辰巳の風つよく、八王寺、青梅邊、甲州海道往來留、所々洪水のよし申來候。

又同狀に、六月二十五日大雷にて大風雨ふり出し、二十八日大風雨大水、兩國橋残り、永代橋、大橋、新大はし落つる。朔日天氣に候得共、上州下總常陸相摸邊通路一向無御座、江戸本所邊、昨日の内段々水まし、床上三四尺四五尺も付き申候。葛西領二郷半領上州桐生邊家流れ、千住通奥州海道いまだ通路無之相知不申候。七月五日の註進狀

又近來水損の農民は、馬喰町の明地へ小屋がけして、これへ入れおかれ、上より施行ありしよし、是は程へて申し来る

三秋のごとし
思慕の切なるに
いふ常套語、詩
經、彼采芣兮、一
日不見如三秋
兮に出づ

予は古郷の事覺束なく、又江戸にても道中出水の事を聞及びなば、さぞ案じ惱るならめと、京へ著くとそのまゝ狀したよめ、引つゞけて三度出しけるが、川留にて速にはとどかず。やうく七月十五日に、四日出の狀とどきしよし。又江戸より出したる狀は、八月三日の朝大阪へとどきぬ。この間の心痛なかく筆につくしがたし。さらぬだに旅はものうきものなるに、獨行と云ひ、かよる天變にあひぬれば、只日夜腸を斷つのみ、行かんとするに道なく、かへらんとするにちまたなし。家にをさなきものを残して、長く旅中になれば、一日も猶三秋のごとし。晨に夜に忘るよひまなく、こよろにかよらざる時もなし。行脚頭陀は一身のうへの風流なり。それも君につかへて遠行し、或は軍旅にしたがうて遠征する身にしあらば、思ひかふべき事もあらん。我只風流の爲に長旅を歴んこと、そも誰が爲ぞや。世に子と云ふものもたざる人は、この情をしりがたし。古人世を金馬門に避けて、風流は俗塵中にもあるべし。老いたる親いときなき兒のあらん人、あへて山川の遊歴をねがふべからず。すべて遊といふことは、こよろにかよる隈も

金馬門一東方朔
が漢武帝に召さ
れ金馬門に詔を
待ちて顧問に備

なきを第一の興とす。つねにもものおもへば、何のたのしみかあらん。子なき人のいふをきけば、遊興歡樂にあるの日は、妻子のことも忘るよといふ。妻の事は忘れても忘れな

ん、忘れがたきは子の事なり。美味をくらへば子をおもひ、美服をみれば子をおもふ。我人愛情のつねなるべし。

翁の伯兄名は興
旨、臺右衛門と
稱し、東岡舎羅
文と號す。仲兄
名は興春、初右
衛門と稱し、克
己亭雜忠と號
す。

つまや子は衣服といへど旅ごろも遠くきて猶おもふ古さと
旅ごろもほころびにけり古郷のいと戀しさにつまもかさねず
家兄世にいまぞかりし日は、常に往來して風流の夜話にふけりしも、今はみるもの聞くもの、かへり來てたれにか語らん、これも旅中袖をうるほすの一つなり。おのれ九歳の春父におくれ、十八歳の夏母なくなりたまひ、十九の秋兄をうしなひ、只家伯なりける人、近きわたりの藩中におはしければ、これを父とも兄ともかしづきて、兄弟そのこのむ所もたがはず、兄は誹諧をこのみて、才器ははるかおのれにまされり。これさへ寛政十年の八月、四十の秋の月を見殘し、黄泉の客となりたまひぬ。残れるものは妹ふたりのみ。これらは詞がたきとなるべきものにあらず。おのれ元より佛の道にうとしといへども、紀の國高野山にまうづべき志かねてありぬるを、この洪水にへだてられて、つ

殺風景—もと李
義山が語に出で
凡て情景を損す
るものにいふ

ひにゆかずなりぬ。萬事の殺風景これのみにあらず。

三十四 粟津の義仲寺

江州粟津義仲寺のばせを塚は碑の銘なし。義仲の墓ははるか後に建てたるものと見ゆ。
世の秋のさいはひはこの翁かな

三十五 瀬田の蜆

瀬田の蜆汁は、醬油のすまし吸物なり。鹽梅またくらふべからず。

三十六 鏡山 附源五郎鮒

近江の鏡山は、石部のこなた、平松川邊より右に高く見ゆ。山色斑々として白銀の如きものあり、雪の消え残りたるがごとし。

鏡山うつる日影も旅くしけふた月へだつ東路の家
近江の源五郎鮒は、一説に、佐々木家一國の主たりし時、錦織源五郎といふ人、漁獵の

ことを司る、湖水に漁りたる大鮒を、年々京都將軍に獻す、その漁獵の頭人たるによりて、魚の名によび來たり。

三十七 三上山 附百足山 雨談にくはしければ省く

三十八 三井の古鐘

三井寺の鐘は古くみゆ。浮屠の説は信するに足らず。辨慶が叡山に引上げたりし時、すれて鐘のいほとれたりしといふ跡あり。おもふにこの鐘久しく水中に埋れありしものにて、自然とすれ損じたるにやあらむ。又大門のうちに辨慶が陣跡といふものあり。凡そ湖水の眺望三井の山上よし。しかれども志賀越の眼下に見おろすにはおよばず。

三十九 奴茶屋 雨談に載せれば省く

四十 遊女八千代が噂 是より京の話をしるす

八の宮は、遊女八千代にふかく契りたまへり。日夜をかぎらず放蕩その度に過ぎたれば、

浮屠一僧

直紀親王は、後
陽成帝第八の皇

子、幼くして智
恩院に入らせ
まひ、元和元
徳川家康猶子
年剃髪、同じ
純と改め給ふ
州天目山に配
せらるれしと
の山里はこも
すゑ竹の園生
洛に「萬治二
し給ひ、庵と
わび北野に庵
九年八月に御
給ふに、しつ
し六月に、

その頃の所司代板倉侯、屢諫言すといへども、もちひたまはず。板倉止むことを得ず、若千金を以て八千代を身うけし、これを八の宮に獻じ、しかして後八の宮を配流せらる。則ち八千代もともに配所に至らしむ。こよをもて八千代が名、よし野より高し。橋本肥後守追考、甲州一國は夏ほとよぎす啼かず。かの國の人の説に、八の宮甲州にましましたるとき、「なけばきくきけば都のなつかしき此里すぎよ山ほとよぎす」これより杜鵑なかずといふ。家兄羅文の話程へて八の宮歸洛したまひぬ。

壬戌鞆旅漫録 卷の中

四十一 光廣卿の寛活

烏丸光廣卿の宅は、烏丸中立賣にあり。そのころ牛飼ども、公卿の家に牛を牽きゆき、御用なきやと問ふ。用あればとどめ、用なければかへす。光廣卿は毎度この牛を雇うて、花街にかよひたまひぬ。車の上に氈を敷き、その上に酒肴を設け、自若としてかよひ給ひしとぞ。松波播磨守光興話江戸にてむかし馬をやとてよし原へかよひしこと、おもひ合されたり。

四十二 板倉侯の大量

板倉侯所司代の時、すべて公家衆花街へかよひ給はんには、夏は下に白かたびら、冬は白無垢を著用あるべし、しからざれば制度の害になるよし、かたくふれられたり。その頃までは、政もゆるやかに侍り。同人話、この二條橋本經亮來りてかたれり

權大納言正二位
光廣卿は准大臣
光宣公の男なり
り、慶長四年藏
人頭正四位に叙
す、和歌を細川
幽齋に學んで出
群の譽あり、寛
永十五年七月薨
ズ、年六十、法
雲院と號す

板倉周防守重宗
は勝重の男なり
り、元和六年父
がすくめに上つ
て京職に補せら
れ、在職三十四
二年、明暦二年十
二月卒す年七十

四十三 六條廓の全盛

板倉侯洛中通行の日、攝家の女中乗物にあふ時は、毎度斟酌せらる。或日また例の女中乗物に行きあひぬ。侯馬をとどめ、いづれの北の方にやと問はしむ。従者おそれて、是は太夫にて候と答ふ。侯大に怒り、すべて遊里を洛中の中央におく故にかよふことはあるぞとて、上に請うて、廓を片隅へうつされたり。六條のころ、遊女の全盛、これにてしるべし。橋本經亮話

四十四 傾城局の券書 此條雨談に載せられたれば省く

四十五 烟火城書畫展覽目錄上に同じ

四十六 遊女よし野が傳附蟹の盃

吉野没年は寛永八年、六月二十二日なり。よし野は佐野紹益に請出さる。紹益は灰屋と號す豪富なり。吉野は紹益に先だちて死す。都をば花なき里となしにけり吉野を死出の山にうつして

紹益

よし野の傳は雨談に出たれども、漏せし所もあれば録しぬ、蟹の盃圖説のごときは雨談に悉しければ、就いて見るべし

これその時述懐の歌なり。或人云ふ、吉野が屍は火葬して、紹益みづからこれを喰ひ盡しけり、紹益がよし野に愛著せることかくの如し。是よりして灰屋の家おとろへたりといふ。經亮話

七月十七日橋本經亮とともに、榮庵を訪うて面會し、吉野が傳を問ふ。榮庵は佐野氏、京都兩替町二條下ル所に住居し、醫を業とす。この榮庵よし野が夫紹益の孫なり。今おとろへて寒家となりぬ。榮庵云ふ、祖父灰屋紹益が家は、智恵、小路上立賣にありし。紹益は和歌をたしむ、蹴鞠茶の湯などせり。尾州紀州の兩公へ召れて、度々出でけるよし承り傳ふ。吉野没してはるか後、浪華の小堀氏より妻を迎へたり。これにも子なく、七十三歳の時、妾に男子出生す。今の榮庵の父紹圓是なり。紹圓五十餘歳の時榮庵出生す。榮庵も六十歳ばかりに見ゆ。紹圓も鞠をこのみしとぞ。この家によしの川の裂、山中の色紙、蟹の盃あり。いづれも吉野より傳來の器物なり。榮庵にいたりてますます窮するをもて、よしの截は、漢東これなり。人にうりあたへぬ。山中の色紙は雲州侯へたてまつり、今家にあるもの蟹の盃のみ。又よし野紹益が書きしものいろくありしが、度々の類焼にうしなひ、又は人にのぞまれて今はなしといふ。二代目よし野が文ありしを見せたり。

橋本肥後守經亮は香菓園と號す、京師梅の宮洞官なり、皇朝の典故に、はし、文化二乙丑六月五十餘歳にて没す、著すとこる梅窓筆記二卷、世に刊布す

いふ歌の四の句、山の中にもと誤り給ふが、かへりて山中の色紙と云ひ傳へて名物となりたるを贈り給ふはたして是は二なくよるこびけりと云々

紋所の印は



如此一つ巴のうちにさくらの花なり。手跡も又見事なり。山中の色紙、廣東の襜、蟹の盃は、よし野花街にありし日、薩州侯よりたまはりしものなりとぞ。

榮庵又云ふ、紹益が菩提寺は、内野新地立本寺にあり。宗、この寺そのころは今出川町

にありしが、そののち御用地となり、今の地所に引けたりし時、墓も建てかへしよにや詳ならず。石面は紹益と吉野と戒名二行にほりつけてあり。紹益は八十一歳にて没しぬ。

古繼院紹益 文祿四年十一月十二日

本融院妙供 寛永八年六月二十二日

これをもて考ふるに、吉野没年は紹益二十歳の夏なり。しかればよし野紹益が婦となりて程なく、いとわかくて身まかりしものなるべし。うべなり紹益が玉をうしなへるの恨、前の歌を吟じてもしるべし。

榮庵に紹益が歌のことを問ひしに相違なし。紹益は貞徳と友としよかりしとぞ。

畫工成瀬正胤の話に、紹益よし野をうけ出せし時、父に勘當せられ、しばらく下京にすみ家もとめて、夫婦住みけり。父他へゆきしかへるさ、雨ふり出しければ、かたはらの

家に入りて雨舎りす。うちには爐に釜を掛けてあり。主人は留守と見えて、女房のいとうるはしきが、こなたへと請じ、うす茶たてよ出しぬ。その爪はづれ茶の手まへまで、所に見なれざるまよ、いとふしぎに思ひながら立ちかへりて、次の日しかくのよし人にかたるに、それこそ子息紹益が妾なれ、その家は紹益のかくれ家なりと告ぐ。父はじめてさとり得て、その奇遇を感悟し、遂に紹益が勘當をゆるし、よし野を引きとりめあはせしとぞ。程遠からぬ下京に、その子の忍び居るをもしらざるは、豪富なりしことしるべしといへり。

友人盧橘は京師の人なり。近會よし野が墓を圖しておくれり。

○吉野塚は洛北鷹が峯、日蓮宗檀場學堂の後にあり。

吉野は京師大佛馬町松田氏といふ浪士の女兒なり。元和四戊午の年出生、行年三十六、崎人傳といふものに載せたるもこれに同じ。いまだいづれが是なるをしらず。

又洛の立入氏賀樂老人より告來る。吉野没する時、紹益三十歳なり。八年にては二十歳なり。然れば十七八歳にてよし野を購ひたるか。法名前文の通なり。壇上の三門は吉野建てたり。後に火に焼けて改め建てたるよし、寺僧語れり。榮庵が説は心得ちがひなり。

追書 解按するに、紹益がにぎはへ草に載せたる轍書記の、なか、くに見ぬもるこし

の鳥もこし、な
かなかになき魂
ならば云々とい
ふ二歌に異同あ
れど、そをいふ
ものなし、考ふ
べし

云々。

箕山は通稱を藤
本了因と云ふ、
貞徳門人にて、
兩巴危言好色大
鑑などあちはし
たる人なり

追考、嶋原の廓は、寛永十八年六條柳の馬場より、今の三筋町へ引けたり。よし野は寛永八年に没す。しかればそのころは猶六條のくるわにて侍り。箕山が色道大鏡に、よし野が傳あるよし、大阪盧橘かたれり。予大阪逗留の日數纒なるをもて、寛文式二卷を閲したるのみ。もし序あらば併せ勘ふべし。

四十七 島原の噂

一眼千軒は島原
の細見記なり

島原の廓、今は大におとろへて、曲輪の土塀なども壊れ倒れ、揚屋町の外は、家もちま
たも甚だきたなし。太夫の顔色萬事祇園にはおとれり。しかれども人氣の溫和古雅なる
ところは、中々祇園の及ぶところにあらず。京都の人は島原へゆかず。道遠くして往來
わづらはしきゆゑなり。ゆゑに多くは旅人も祇園へ誘引す。角屋徳右衛門が座鋪庭等
最よし。この庭の松甚よろし。松のかたちを紙にすり、求むる人あればあたへ侍る。そ
の外露臺などある揚屋もあり。一眼千軒にくはしければ略す。
島原にて、太夫をかりて見るといふ事あり。客ある妓も必ず來る。大かた大阪におなじ。
くはしくは大阪の話にしるす。
島原の燈籠七月にあらず、八月初旬よりともすなり。予大阪より又京へ來りしは八月六
日なり。昨日より島原に燈籠ありといふ。一兩日大雨、終に一覽せずして京をたちぬ。
島原に鹿子位といふ妓あり。これは江戸よし原のはし女郎におなじ
一夜十一奴五分

四十八 京師の妓院

京にて島原の外御免の遊女町は、五條坂、北野、内野なり。五條坂はあこや株と稱す。又近年あらたに免許ありしは祇園、同新地、二條新地、七條河原等なり。その外西石垣、上宮川町、東石垣、下宮川町、古宮川町、六波羅野、御影堂うら、都市町、平居町、一ノ宮町、三ノ宮町、膳所うら、富永町、末よし町、新ばし、なはて、川ばた、先斗町、壬生、五ばん町、七番町、三ッ石町、六間町、寺の前、下ノ森、上七軒、しら女の辻、御靈うら、杉本町、野川町、大文寺町、先斗町川ばた、難波町、若竹町、新車屋町、丸田町、檀王うら、等皆私築なり。凡そ洛中半は皆妓院なり。京の節儉なる人氣にて、かく多き遊のそれぐに世わたりすること、第一のふしぎなり。客は春他國の人三分一、地の人三分一なり。秋より冬のうちは、地の人三分二、旅人三分一なりと云ふ。故に秋冬はさみしし。

四十九 祇園さし紙

祇園に、祇園さし紙といふものあり。是は祇園町へはじめていづるおやま、けい子、ひろめと稱し、のり入のかみを、たてに四つ許に切り、札とし、これへけい子誰、おやま誰、などくはしくしるして、茶屋々々へ配るなり。茶屋の勝手元、或ははしごの上り口に、いくつともなく張付けてあり。おやまも藝子も、見世とうちとは別なり。見世とは江戸にていふ見場なり。扇九、一力、井筒など茶屋をたれば何屋と定めおくなり。抱のけい子もあり。又じまへのけい子は、別に家ありて住むもあれど、客あれば必ずその見世へいうてやる。子ども屋は別にあり。是は祇園町中廿七軒に限りて御免なり。これも通じて見世といふ。又はじめてつとめに出づる者を、腰元おり、てかけおりといふ。江戸にて何あがりといふが如し。又はみな様御ぞんじ何屋の仲居おり、などともかくなり。

大徳の肉屋陣屋
 ちやん子
 ぶんや
 井
 一
 本

房中ノ秘
 本活
 かの
 いの
 高下

三條通りさるるてみぢう

中詰

いと
あつしや

振袖

つゆ
あつしや

本詰とは、本どしま眉毛なし。中詰とは、中どしまなり。げい子はとしの長少に拘はらずをげい子と云ふ 祇園町のけい子はうつくしく、おやまはおとれり。けい子に勢ありて、おやまの上坐をする。初會の客に盃ごとなし。すぐに客のかたはらへ來てすわる。いづれもかくのごとし。

五十

嫖客の噂

京は女郎とはいはず、女中といふ。おやまといふことは、目下の人よりははず。けいしやといはずして、けいこといふ。夜五ツ或は四ツ時ごろよりゆきて、花いくつと仕切るを、相場をきくといふ。花入用とも二割引なり。宿屋より引きつけたる旅人は、二わり半引かせて、半は宿屋へとる。銀相場は六十三匁通用なれども、地の人は六十五六匁にて勘定する。

京は現金の客をきらふとぞ。かけは五節句拂なり。それも身分よろしき方へは、勘定もゆるやかなり。夫ゆゑわれしらす遣ひ過ぐることにありといふ。それにて損をすることは稀なるよし。但勘定はよくする所なり。

五十一

きがへの譯

祇園の客、茶屋へゆきて酒をのます。期よりおやまをよび、直にぬるを、きがへにゆきといふ。期とは夜九ツなり。期ならずとも、すぐにぬるをきがへといふ。けい子おやま共に、やくそくといふは、晝は朝より暮まで、夜はくれより夜明までかうてやるなり。もの日の仕舞といふことはなし。このやくそくをねだられることあり。大阪も又おなじ。

五十二

藝子の枕金

けい子にまくら金といふことあり。是はけい子の誰に通ぜんとおもふ人、茶屋へゆきてそのことをたのめば、茶屋その名を聞き、あの子の相場は何程ならんといふ。相場とは、たとへば顔色すぐれてうつくしく名ある歌妓は、まくら金二十兩、或は三十兩、その次

は十兩十五兩、いたつてあしきは五兩三兩なり。三兩より下なるはなし。はじめに件の金をやりて、たとへば二十兩のまくら金には、はじめ十兩わたし、通じて後又十兩わたす、やくそくし、ひそかに茶屋へよびてあふなり。但あふたびくに花は別にはらふ。これを枕金の相場といふ。仲居或は茶屋の娘、舞子も同様なり。

五十三 舞子の評

舞子は十歳ばかりより十八九までなり。歌曲も雅みやびにして、三絃も煩手はんしゅならず、しとやかにたち舞ふさまいとしをらし。むかし白拍子しらびやくしが、朗詠ろうえいなどにあはせて舞うたりし遺風ありとぞおもはる。

五十四 三絃管

けい子の三絃管は、木地の桐の箱なり。風呂敷ふろしきに包む。三絃はいづれもつぎ棹さしなり。故に箱は四角にて横少し長し。撥袋はらぶくろは撥のかたちにしたる盒かうはこの黒ぬりを用ふ。琴はふろしきに包み、鼓つづみはしらべをかけて携へ出づる。

追書
桂窓云ふ、ふろしきにあらず覆(おほひ)として二所にちりめんの紐をつけたるものと聞きにき

五十五 妓の衣服

衣服は、妓は紫の紹しやうの拾帷子あはせかたびら、もよ色の裾すそうら、すそもやう、或は上布じやうふのかたびら、じゆばんを著ず縞しまちりめん等なり。うちえりを半ぶんほど前へ引きかへしておく帯は赤きが多し。ゆもじは緋ひちりめん、〇けい子は上布、すきやちどみ、紫の紹しやう、すそもやこれも縞半じゆはんを著す。帯はねすみ縞じゆす子多し。ゆもじはいたじめのちりめん。いたじめのゆも緋ひちりめんは稀まれなり。京も大阪も、廓くわくの外は、みな左の手にてつまをとる。これを左づまといふ。是は岡場所おかばしよのしるしなり。そのつまは高くむねのあたりにてとる。甚だ派手はでなり。ぎせん町、五月晦日より七月十八日まで、そるひといふを著れは暑中汗なつなかあせにてよごるゆゑ、妓も歌妓うたぎもみなひぢりめんの帯をを用ふ。そるひのうちも、ひぢりめんの帯をなどしたるもまれにあり。

五十六 妓樓の夜具

客のゆかたは茶屋にてかすなり。妓はぶんこぶんこに著がへをいれてもち來り、閨中えんちゆうは江戸染えどぞめのゆかたなどを著る。扇はぬりほねの銀扇、うちははろぬりのふか草團扇くさだんせんをもつ。廓くわくの揚屋あひや、祇園町も、夜具は郡内縞ぐんないしまのうすきふとん一ツなり。大阪も又同じ、祇園新地はふと織の蒲

岡場所一官許の遊廓外にある遊里の稱

伯人—大阪島の内の遊女の稱、後に詳なり

團、茶屋によりて木綿夜具をも用ふ。太夫も伯人も夜具は皆かくのごとし。

五十七 京の女兒風俗

京の女の風俗、髪は油をすこしつけ、鬢を上へかつぎ上げ、鬢を甚だながく出す。わけはひらたく、かつ山はべつたりと前へたふしかけ、島田はしんを入れず。ばらりとして草たばねにす。鬢いれは太きはりがねを紙にて巻き、うるしにてぬりたるを用ふ。



コノ穴
ヨリカミノ
子ヲトホス



うづらみ一寸身ふ
きうてちちくろののり
のりまのりまのり



つとらうのり
あくだまのり
もあつちあり

すべて大阪、名古屋、伊勢、いづれもこのたぐひにて、大同小異なり。大阪も水髪なれど、鬢へばかり多く油をつける。いせは丸く、名古屋は似て非なるもの多し。京都は地の女も髪かみの風ふう、妓とかはることなし。これは商人と妓と、うち混こんじて居る故なり。化粧けしやうはいづれもあつけしやうなり。櫛くしは厚あつき高たか蒔まき繪えいのぬり櫛くしなり。大阪はべつべつ筭さんは鼈べつ甲かなり。數本さしけるが、今年制禁せいきんありて、三本の外はさよす。鬢結まひゆひのしほりばなしのちりめんも今年禁制きんせいせらる。よりて紙をもみてちりめんのごとく染めたる鬢結まひゆひを用ふ。以前は髪かみの上、數十金を費つひやせしといふ。

妓は紙入に紙いつぱいの鏡かがみをつけ、白粉おしろいをちひさなるあさの袋ふくろに入れ、席上にてたびたびけはひをするなり。けい子は巾著きんちやくをつけ、これを帯おびのうちへかくし入れおく、この袋の中に化粧けしやう道具どうぐあり。これも席上にてたびくく臉かほを摸もす。鏡を懐中くわいちゆうすること歌妓も又同じ。

五十八 祇園大樓の噂

井筒 扇九、一力など、座敷廣し。客あれば庭へ打水し、釣燈籠へ火を點す。忠臣藏七

相對死—情死

段目の道具建の如し。燭臺は木にてろぬりなり。大樓は燭臺四ツ五ツ、蠟燭は六寸ばかりあり、半分たよざるうちとりかへる。そのたびくゝに必ず客の顔の色が變る。蠟燭一挺八分づつなればなり。すべて茶屋に刀かけいくつもありて、脇差は枕上の床の間へかざりおく。大阪も又かくのごとし。大阪しん町あげやは、これありて、是相對死などいふこと、たえてなき故なり。古市は近年油屋騒動このかた、客の脇差を内所へあづかること江戸のごとし。

五十九 祇園の方言

祇園町の方言に、江戸にてつやをいふ、せじをいふといふことを、あぶらをいふといふ。ふだん來る、じやうちう來る、などといふことを、いつしくにおいでるといふ。まるるを參じる、よいことはゑらい、又かいなといふことあり。一人「これはかうかういふわけぢや」「かいなア」さやうかいなを略せり。これらはしをらし。この外いくつもあるべし。すべて女になといふことをそへていふ。

「わしがけふな、かみあらうてな、とんとおちんさかい、いまくしうてな、いろいろしたぢやけれどな、おちこぢれたさかい、見ておくれ、かみもいつかうぢやわいな」

な「なんのいな、いつかうようでけたわいな」「えらうあぶらをいうてぢやわいな」

又めだかをそちといふ、この魚そちひてありくゆるなり、かくやのかうの物をせんたく香の物、しぎやきをなすびのでんがく、此類多し。

大かたかくのごとし。江戸にてはいつかうといふことは、わるき事にのみそへていへど、京にてはよきこともいつかうよい、いつかうえらいといふ。又茶屋の唄をこつさんといふ。江戸吉原にては茶屋の亭主をこつさんといへば、男女のたがひあり。「さかい」といふ詞は、ゆゑにといふにおなじ。江戸はからといふ。歌にもふくからにはよめど、ふくさかいにはよまず。これらをや京なまりとはいふべき。文ははじめてこすにも、且那ねと書く。いとせは御客、いとかく書出しはいつでもおとそれながら通り句也。けい子の禮文は、御ひいきねがひ上候、ばんほども御しらせなどと書く。茶屋のかよよりこすふみは、御禮かたぐが通り句なり。

六十 祇園の歌曲

今祇園にてもつばらうたへる小唄を、人のうたひてきかせしまよにしるす。

扇手びやうし

二上り、これは江戸にてうたひししもつまをどりのふしに似たり。

「鎌くらの、サアヨウ／＼ヤレ、かちうの娘が、月には九たんの、サアヤレ、月には九たんのはたをおります。サアヨウ。」

「そのはたを、サアヨウ／＼ヤレ、ついてさらしてこうやをたのんで、サアヤレ、こうやをたのんでそめにやります。サアヨウ。」

「かた先は、サアヨウ／＼ヤレ、むめのをりえだ、三月さくらの、サアヤレ、三月さくらのさいたところを。サアヨウ。」

「上まへは、サアヨウ／＼ヤレ、しかのやつぶし、うさぎのちよんちよと、サアヤレ、うさぎのちよんちよとはねるところを。サアヨウ。」

「下まへは、サアヨウ／＼ヤレ、わしとおまへと、おまへさんとわしと、サアヤレ、だいてこるんでれたるところを。サアヨウ。」

同手びやうし

扇はなし、これは三くだぶし也、ひとつふたつしるす。

「をさななじみにわかるるときは、あゆやもろこの水はなれ。」

「さまは五月ののぼりかしやうぶが、わしはおまへにのぼりさを。」

同扇びやうし

これは新製にあらす。

もろこ—小さき川魚の名

「ほうえいまつりは見事なことよ、たれも見にゆき、ゆきなばどつこい、人みなこのよのうさはらしに、上戸のおもひはこれなんめり、だん／＼げいこをひきつれゆきなば、おすなさわぐな、かたよりゆけ、すげがさおつとりもつて、しどけないのがさんさ見事よ。」

いたこぶし ちかごろ江戸より流行す。

「孫兵衛ごけ／＼、これをあはせてむまごべいごけ。ヤレ／＼。」

「孫兵衛ごけ、むまごべいごけ／＼、これをあはせて十三孫兵衛ごけ。ヤレ／＼。」

「となりのあろりもくろぬりくるあろり、こちのあろりもくろぬりくるあろり。ヤレ／＼。」

「となりのちやがまはからかねちやがま、こちのちやがまもからかねからちやがま。ヤレ／＼。」

「なげしにかけたる大なぎなた、だれがなぎたぞあてとみや。ヤレ／＼。」

「むさし坊へんけい大なぎなた、たけも八尺みも八尺。ヤレ／＼。」

むかし／＼ 今歌妓かならずこれをうたふ。

「むかし／＼山のあなたにあつたげな、ぢういは山へしばかりに、ばさまは川へせんたくに、るすにすぢめがたなもとの、のりをのこらずしてしまひ、ばさまはみるよりはらをたて、したきりすぢめでおひはなつ。合ぢさまはいや、つゑつきのので、のりをくたすぢめどのはこらぢやごさらぬか。チヨツ／＼のこえ、やまこえさと／＼こえてゆたといの。」

くて—食ひでつゑつきののじ—「乃」字を假名として用ふる時

の稱

ねんなうーやす
やすと、狂言の
常套語

めりやすー長明
の一種

「かにどの〜どこへゆかしやるぞいの。さるがしまへおやのかたきをうちにゆき候。おこしのものはなんでござる。これかこりや日本一のきみだんご。ひとつくたされ御とも申さう。合はさみのげけものたんばくり、石うすにはり、このものどもがつきそひて、さるがしまへおしわたり、エイヤアねんなうおやのかたきをうちおふせ、みなさんいかいおせわといちれいし、もとのあなへぞいりにける。

これらはみなさわぎなり。めりやすは琴歌に河東を加味したるやうなるものにて甚雅なり。大阪尤よし。京は大阪をまなべり。又江戸の大こく舞のふしにて、もん句は残らず島原の事に直してうたふなり。江戸の長うたは音聲うつらず、聞きにくし。

六十一 御所うら

京にて見世付ある妓樓を、繩手、二條新地、北野、内野、御所うら等なり。これらいづれも見世をはる。いづれも賤妓にして、見世はうちつけ格子、疊わづかに三四疊を敷くべし。二條新地尤多し。御所裏はむかし御所の下主女、夜行して色をうりしよし。今はかよふことはなしといふ。五條坂等も見せ付あり。

六十二 つくしわた

先斗町につくしわたと稱する私築あり。わたばうしとも名づく。むかしわたばうしやよりこの妓を出せしといふ。今猶先斗町の北角に綿帽子屋あり。此綿帽子は旅宿へもまねく。又かし座鋪へ一月雇にもするなり。價いやしき醜婦ながら、その名は雅にきこゆ。すべて旅人逗留中、一ヶ月に金二分を費せば、一月雇の妾あり。この者飲食に給仕し、又縫刺のことをなし。夜は枕席をすゝむといふ。是は素人なり。この地尤荒淫なり。太夫天神の外は房中帯なし。これ衣服をいとふゆるなり。太夫天神のみよりめんのごきありをしめる。大阪又かくのごとし。

六十三 總嫁

總嫁は二條より十條までのかはらへいづる。河原にむしろかこひして、こよにて夜合す。

六十四 四條の芝居

京にて芝居初日の前日には、小路々々へ太鼓を廻すこと、江戸の角力の如し。太鼓は大

總嫁―夜鷹の類
にて最も賤しき
娼婦

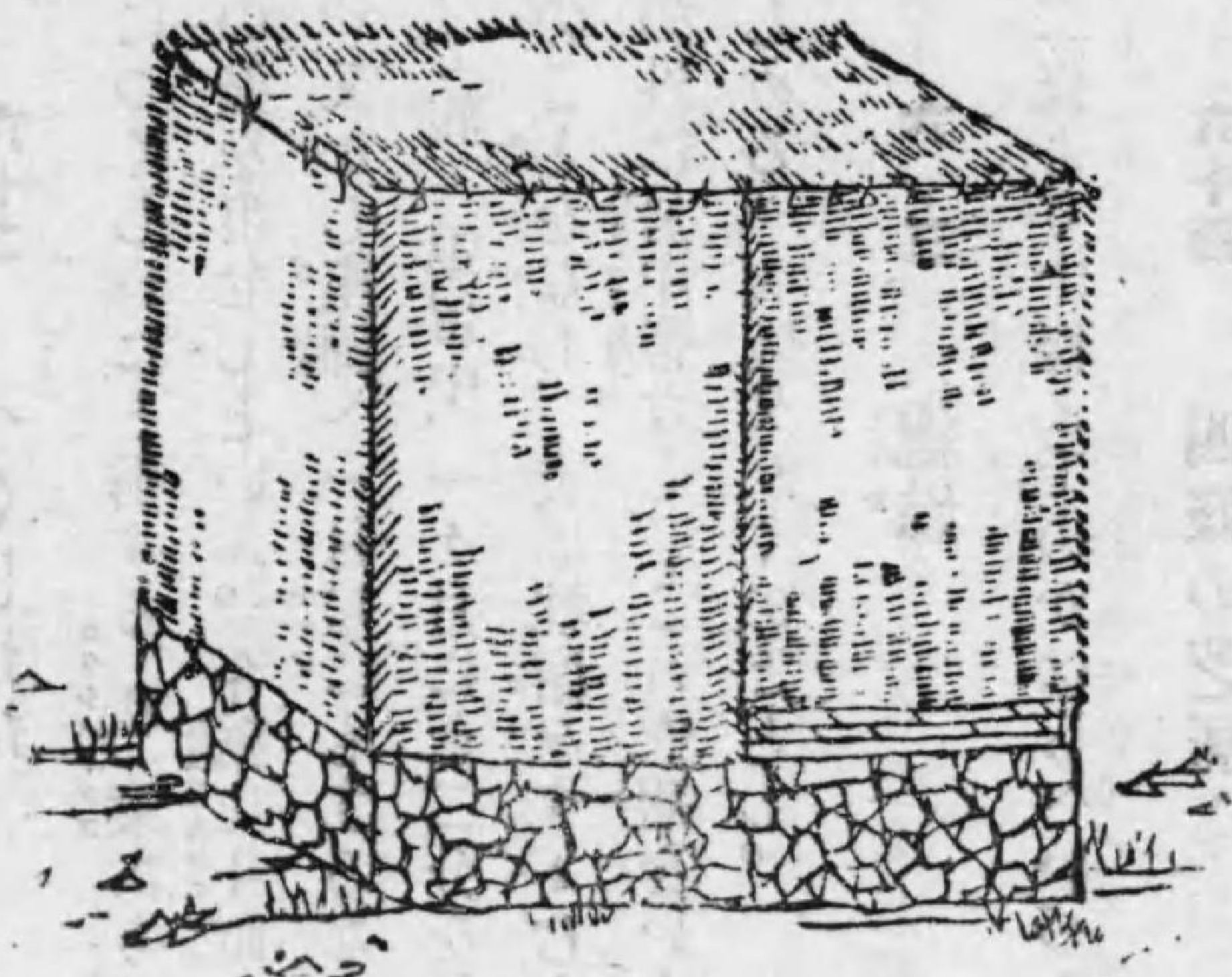
太鼓にあらず、てんくからくとなるものなり。

芝居はじまれば、朝やべ
らけてこの太鼓を打つ。

太鼓の先に、棹

に紙をはりつけ、役わりを
書きしるして、これを荷ひ
ありく。そのかたち圖のご
とし。

惣嫁の小屋



河原の水なき所に
石を高くし、その
うへにむしろかこ
ひ三尺にをするな
り。ひるはとりく
づして、又夜は小
屋をかける。惣嫁
は川ばたにたらず
み居て、往來の人
をひく。



四條の芝居二軒 江戸木挽町の芝居
ほどもあるべし。 看板は江戸の人形芝居のごとく、尤も綺麗なり。芝居の
うちに廁あり。花道は眞すぐにつけて、つきあたりに切幕あり。又舞臺の左の方にも切
まくありて、役者こゝよりも出入す。切落のうへに簀子天井なし。切落は土間なり。大入
なればこの所も棧敷並になる。上下の棧舗は江戸よりも廣く、一ト側九間にすぎず。棧
舗の向ふづら、くり形等ありて、江戸よりは立派なり。棧舗の柱には桐の聯をかける。
是は祇園のけい子おやまよりおくりし物なり。



桐の木地の板へ
茶ありの字を
さすの字の画あり
下へけの字を
の名をいふ

幕は横布なり。水引は四方
に張てあり。二階さじきの
上にも水引あり。花道は十
五六年以前までは土にて築

きあけなりしよし、今は江戸のごとく板に
てはれり。辨當は如此るぬりのべんたうば
こへ入れ、これへ椀をそへて持つて來る。茶、
くわし、番附等うるものは、皆十四五歳の童

なり。雨天の日は茶屋の下女草履を持来て客にわたしおき、大切に又下駄を持つて迎ひに来る。また客の貧富によらず、一幕々々に下女来りて用をたす。芝居のうちに廁はあり。見物のもの外へ出るにおよばず。又鬪諍の愁もなし。棧舗しはなし。京も大阪も雜劇と妙院と打混じて居るゆゑ、芝居の仕出しも多くは祇園の茶屋より仕出す。芝居茶屋といふもの別になし。初日より四五日までのうち、けい子おやま等あらそうて見物す。一日もはやく見るものを全盛とする故に、當分は棧敷のうち悉くけい子おやま多し。妓は必ず客をねだる。歌妓は十人廿人講をむすびて、自分にて見るもあれど、是も多くは客をねだるなり。すべて舞臺のしかけと、役者の衣服は、江戸より立派なり。その外は替ることなし。予京にありし時、七月廿四日より四條北の芝居はじまる。團藏、嵐吉、浅尾工左衛門、嵐三五郎、嵐猪三郎、市川團三郎、浅尾國五郎、尾上新七、澤村國太郎、中村金藏、芳澤いろ



は、市川團之助等にて、繪本太閤記の狂言なり。切狂言に伏見の喧嘩をとりくみし新狂言三幕にて、嵐吉三郎足輕里見伊助の役評判尤よし。大入なり。予は八月七日大阪より歸りがけに見物す。京大阪芝居はじまる以前、先づ板に役者の名を書きつけて、是を木戸に出す。江戸のあやつり芝居の如し。是は一ト芝居々々々に役者入れかはるゆゑなり。近年京も四條二軒の芝居一所には出來ず、うつてがへに興行す。或は京のあたり狂言を、役者道具建ともに大阪へもちゆきて、又興行することあり。大阪に如し。すべて近年三都とも芝居少しくおとろへたること、これにて知るべし。役者は多く大阪に住居す。いづれも家作よろしく見ゆ。この外いなば藥師、御靈邊、所々に小芝居あれど、大阪の中ノ芝居には及ばず、葎簧張多し。

六十五 京都の評 附風俗の圖説

夫皇城の豊饒なる、三條橋上より頭をめぐらして四方をのぞみ見れば、緑山高く聳えて尖らず、加茂川長く流れて、水きよらかなり。人物亦柔和にして、路をゆくもの爭論せず、家にあるもの人を罵らず。上國の風俗、事々物々自然に備はる。予江戸に生れて三

追書
伏見にあらざ高
槻喧嘩をとり組
たる狂言なり、
この狂言を高槻
騒動と云ふなり

うつてがへ一交
代に

上國一都の地方

たしなき一芝し

ぼてへふり―搦
棒に賣物をかた
げて持ちありく
行商人

輕子―輕箱にて
物を運搬する人
足
俠者―男伊達

十六年、今年はじめて京師に遊んで、暫時俗腸をあらひぬ。

京によきもの三ツ。女子、加茂川の水、寺社。あしきもの三ツ、人氣の吝嗇、料理、舟便。たしなきもの五ツ、魚類、物もらひ、よきせんじ茶、よきたばこ、實ある妓女。

京にては雨天も合羽を著す。合羽を著れば人必ず遠行するとおもへり。これ雨の横にふらず、まつ直に降るゆゑなり。ほてへふりの商人甲掛脚絆をつけ、帯を後にてしめる。

「はじかみやく」「なんばんや」などよびありく。これもしをらし。車は牛にひかす。人引くことあれば、一人先にすよみ、繩を輪にしく、にさし入れ是をひく。

後より押すもの又聲をたてず。名吉屋いせ又か
くのごとし雨中傘をさして駕をかつぐものあり。予伏見より京に入る時雨ふれり。予が荷を持ちし人足傘をさせり。凡そ八九貫目の兩がけをか

つぎながら、傘をさして三里の道をゆくこと、江戸人の目にはめづらし。京の輕子は甲かけ脚絆をつけ、帯をしめ、三尺手拭をしめる。俠者も額をぬかず、月代の毛を長くせ

ず、身に花繡したるもの一人もなし。大阪は髪結など
にはりものありせつた直しは箆を持たず箱なり。或は一人二つの箱を擔ひ、一人なほしくとよびありくものあり。大阪も又かぐのご

とし。男子の羽織二尺に過ぎず。大阪は羽織のさがり袖
とナリはらひなり夏に白張の日傘をさす。菅笠はかぶ

らず。醫師は總髪、畫工は髪なきもの多し。髪は海老尻鬘。



は他行にかならず帽子をかぶる。衣服その外女子は赤きをよしとす。女子

六十六 太秦の草紙

太秦の草紙は、室町家の時の戯作春畫なり。原本は今出川相國寺にありといふ。その寫し一卷、橋本經亮かたより、もとめよとておこしたりけるが、文面首尾せざりければかくすとてよめる。

太秦のこなたにかけし紙屋川のはしたものこそうらみなりけれ
返し 君ならで誰かかふべき木にもあらず草にもあらぬはした物をば

經 亮

きんかん元結―
最も細き元結の
稱

〔次の二面の女
子頭髪の様畫は
本文の終り六十
六の前に入るべ
きもの、組版の
都合上少し前
後せり〕

夕つよた、

旅の盆ころに神の來る夜かな

おなじゆふべ、東山へさそはれ侍り。道よりにけかへりて申しつかはしける。

古郷の名にあふ山の東さへものおもふ夜はねられざりけり

草枕旅にしあればなきたまもゆるし給はんいざゆきてねよ

つまや子に見せまほしきは殊更に都のちまた里の名どころ

水鳥のかもの川べに旅ねしてかつきもあへぬころも涼しき

旅にしてうれしきものは古郷の妹が玉づさへだてなき友

七月十四日の夕よめる。

あすのよはことづけやらん古郷のあづまのそらを出づる月影

十五日の朝ほらけによみし。

入る月に妹がむかひて旅の空にわがめさめぬるところと思はん

十六日大文字の火を見てよめる。

子を思ふやみのかたにぞてらすなる東の山のもじのほかけは

解 經 亮

大文字—東山の
山腹に大字形に
火を點ずる行事

狂歌かくばかり火をともし山の大的字は點のうたれぬ眺なりけり
おなじをりに船かたの火、

ほのぐとあかしをともし夕暮に山かくれなき船をしぞ思ふ

畑橋洲子法印醫學院畑橋安男
通稱柳泰好詩文の話に、東山大文字の火は、延徳元年七月十七日、將軍義輝追

悼の爲はじめてこれをなす。これ冥土光明の故なり。義輝前年正月十六日に薨す。故に

今年初めてこの事あり。大文字の筆畫は慈船庵の筆也。そのこと今出川相國寺の傳記に

くはし。世に弘法の筆、或は横川の筆と云ふものみな誤なり。相國寺日件録にある所の

ものは、抄書せるにやこの事みえず。今現に相國寺庫藏中の日件録にはこのことありと

いへり。甚だ珍説なり。予先年著述せし俳諧歳時記には、横川和尚の筆と記しぬ。今に

至りて遺恨すくならずしに、よく日又橋洲子より文通のつひでに、大文字火の事慈船

庵は存し違にて御座候。相國寺小補軒横川和尚へ足利將軍命ぜられしなり。小補軒當時

荒廢、遺趾而已也下略かく申参りたれば、世間普通の説にてめづらしからず。大に興を

うしなひぬ。大文字火は十六日夕方より同時に火を點ず、誠に一時の壯觀なり。はじめに妙法の火、次に左り文字の大字

夕火を點せり。その餘はみな十六日にてありし。晝より薪をつみおき、夕がた一時に火を點ず。當時は農民の山まつりなり。

火を點ずればみなあちそろうて山を下る。もし久しく山にあるものはかならず病むといふ。陰鬼のものづから集るにや。

點のうたれぬ—
非、難のしやう
なき、大字に點
なきよりの洒落
はの—と—
「明石の浦の朝
なきに島がくれ
行く船をしぞ思
ふのもヒリ」

横川—假名原
本のまゝ

凡そ精靈しやうりやうの迎火送火むかひびおくりびは、皆加茂川へ出でて麻柄あしがらに火を點す。それ宗旨に依て日限の遅速あり。盆中家々に挑灯燈籠ちやうとうとうろうを出す事江戸の如し。東山諸寺の高燈籠たかとうろうは星の如く然り。

六十八 六道の槇うり

七月九日六波羅及六道の槇うり。江戸人には盆の草市くさいちといふものはなし。



めづらし。槇は高野槇たかやまぎにてかくのごとし。参詣の人必ず一枝づつ買うて持佛ぢぶつの花いけへさす。江戸のごとく

六十九 しらいと

七月十日清水きよみづの四萬六千日いとにぎはへり。此邊すべてしらいと餅を賣る。これは挽餅ひきもちにて、白と黄あり。形かくのごとくねぢれり。音羽の瀧のしるにや。



ら糸のとある。謠曲よりなづけた

七十 京の盆祭

京にても盆まつりといふことあれど、江戸のごとくにはあらず。魂棚たまだねも机やうのものを設け、甚だ籠略そりやくなり。さよけものもろくくせぬ様子に見ゆ。十三日にほたもちをこしらへる家あり。それも稀なり。盆中囉齋らうさい法師のたぐひ、すべて物もらひ來らず。但六齋念佛は大勢ありしなり。六齋念佛は洛外の農民等太鼓をならし、大人小兒打まじり、あやしき唱歌をうたひ、市中をありく。ナゲ笠などわざとやぶれたるもあり。京にて女兒の盆をどりといふとあるよし聞きぬ。今年近國洪水ゆるにや沙汰さたなし。街道の女兒五六歳より十一二歳まで、大ぜい手を引きあひ、源氏目錄の長うたなどうたひてありくと、江戸の盆々うたのごとし。是小町こまちをどりなり。

すべて京は五節句なども、中人以下市中にいたりては、式しきというて膳部ぜんぶを設けることはなし。正月も市中松かざりをせず。餅はつけども、元日只一日汁雜煮しるぞふにをいはひ、鏡餅は江戸の二十四文備へほどのすわり只一つとるよし。萬事の費つひえをいとふこと、儉節に過ぎたりといふべし。

七十一 内裡の御燈籠

囉齋らうさい法師一囉齋は三味線さんまいせんに合せてうたふ一種のふし、弱法師は言法師ことばしにて詠曲えいせきよるばふしの趣おもむきより出でたるものなるべし

七月十五日禁裡の御燈籠を拜見にまゐるれり。この日は諸人ゆるされて禁中へまゐるなり。清涼殿の廂に御燈籠をならべて、前後警固の役人付きそひて、一二間こなたより拜さしむ。この日は紫宸殿の御門もひらきてあり。是南門なり、炎上後別 諸人うちを拜して、賽銭を

投ぐるものあり。日の御

門諸人はこゝ上の外に茶店

あり。檜垣の茶屋と號す。

又公家門の前の茶店も檜

垣と稱す。こゝは江城の

下馬先のごとし。茶店は

甚むさくろしけれど、そ

の名はおのづから雅な

り。御燈籠はいろくの

人形造り花などくさくあり。

下の臺は四角なる燈籠にて、

白きかみをはり、上に赤と

青との紙をつけ、是を四方にさけたり。

火は下にとすなり。燈籠にはおのく下札し

イヅレモ
大サ四方
二三尺ニ
スギズ



火下下エとのまごころの外数十品あり

て、親王家攝家の名をしるし、又女中方とあるもあり。づれもさよけものと見ゆ。翌十日六日それくへ下さるゝとなり。東西の本願寺も今日とうさうを諸人に見せしむ 日の御門、この日八ツ時ごろにひらき、七ツごろに閉づる。七ツ過ぎては拜見を許されず。七月十七日橋本肥後守經亮より消息して、禁裏御所御燈籠の造り花きくなり四五本おくりこされたり。誠に一度觀覽をへたる品なれば、おそれ尊むべし。京の町にてもよくく所縁あるものならねば拜受するこゝとあははずとて、みなうらやみけり。京の俗の説に、これを家におけば賊入らずといふ。

七十二 りうたう太 雨談に出でたれば省く

七十三 せんす萬歳、これも同じ

七十四 京の七夕祭

京にて七夕の星の手向には、ちひさき鬼灯挑灯をいくつともなく笹のうらへつけ、小童六日の夕かたこれを長き竿のうらに結びつけ、その手迹の師の家の前にもちゆき、暮れて加茂川へもち出でこれを流す。三條五條の橋の邊へは流すことを禁ず。故に二條四條の河原へ數十人件の挑灯をともしつれたるありさま、さながら星の飛びかふごとし。短

手迹の師—手習の師匠

かごもじ二重
文字、中が穴
なるよりの稱

冊へ歌を書いて筐へつくることもあれど、いづれも挑灯を附けざるはなし。又は七月二日三日ごろより家のまへに燈籠を出し、これに獸二星などの字をかごもじにかき、上に小なる挑灯を十四五つけて出したるあり。そのかたち、

そのかたち



二星を祭るの挑灯、七日の夜ながさずして、六日にながすものは、京の風俗なり。すべて京は五節供の諸拂等、晝の内にかたづけ、とりに來らざるかけは持ちゆきて勘定し、當日夕方は俗事のこらす片付けて、夫より遊ぶなり。歳暮も富めるものは廿四五日、まづしきものは廿七八日までに悉く家事をいとなみ、正月のことなど大かた設けおきて、大晦日は閑暇にして、今夜祇園けづり掛の神事などへまるるよし。是土地せまく事少きゆゑに、萬事手廻しよし。これにならひて、七夕の挑灯も六日にながして、七日は朝より遊ぶこと、小童のわざくれごと、おのづから手まはしよきことかくのごとし。

七十五 地藏まつり

七月廿二日より廿四日にいたり、京の町々地藏祭あり。一町一組家主年寄の家に幕を張り、地藏井を安置し、いろくの備へ物をかざり、前には燈明挑灯を出し、家の前には手すりをつけ、佛像の前に通夜して酒もありあそべり。活花、扇かけ、その外器物をあつめて種々の品をつくり、家毎に飾りもく町もあり、年中町内のいひ合せもこの日にするといふ。そのありさま江戸の天王まつりの假宮の如し。伏見邊大阪にいたりてまたこれにおなじ。

けづり掛の神事
一けづり掛は祝
木ともいひて新
年の祝儀に用ふ
るもの、本朝俗
談志に「京祇園
に十二月晦の夜
前懸の神事あり
り、此夜参詣人
貴賤通りちがひ
に互に悪口雑言
を吐き大きに旬
る也、關中誰相
手といふ事なく
尤も刃棒千切木
の沙汰なくたゞ
言葉取ひばかり
なり」

七十六 京地の酒樓

噲々堂、名は謙字は貞吉、池大雅堂の門人にして、書を能くし、又畫をもなし、頗る風流の人なりといふ

噲々が家は今猶東山にあり。今の主人も茶など嗜むよし。門柱の聯は片竹を以てつくり、「我酒妙々天下妙。伊丹雙白價不_レ渝」の數箇字を記したり。その外のもは板面泯滅してよめず。こよにてこんにやくの田樂名物なり。麩もよし。噲々が時はこんにやく一種なりける由。今はこのめば外の料理もするなり。○祇園の梶子が茶店今は跡なし。○大雅堂は、東山雙林寺中長喜庵の向ひにあり。是は七八年前に建てし所なりとぞ。料理をして鬻ぐ。瓦には大雅堂の三字を篆して、家の作りも甚だ俗なれば、案に相違して人に問ふに、むかしの大雅堂は祇園のかたはらにありしが類焼せり、今のあるじは歌妓なるよし、空しく大雅堂の名をおかすといふ。いかさま家作二階等の物數寄、其俗なること丸山の料理茶屋におとれり。

○丸山の料理茶屋のあるじは、法師にて肉食妻帯なり。いづれも何阿彌と稱す。座敷庭綺麗なり。料理もよし。浮瀬はおとろへて僅に一軒あり。大阪の浮瀬は猶繁昌せり。

○生洲は高瀬川をまへにあてたれば、夏はすどし。柏屋松源などはやる。柏屋は先斗町

鯉のこくせう一今専ら鯉こくといふ、鯉の味噌吸物

あわ雪一あわ雪どうふ、豆腐の特にきめこまかく軟きもの

にも出店あり。松源近年客多し。こよにて鰻鱧、あらひ鯉、名物といふ。魚類は若狭より来る鹽小鯛、鹽あはび、近江よりもてくる鯉、鮎、大阪より来る魚類、なつは多く腐敗す。鰻鱧は若狭より来るもの多し。しかれども油つよく、江戸前にはおとれり。鮎は加茂川にてとるもの疲て骨こはし。鮓はよし。若狭の焼鮎よしといへども、岐阜ながら川の年魚などくうたる所の口にては、中々味なし。鯉のこくせうも白味噌なり。赤味噌はなし。白味噌といふもの、鹽氣うすく甘ツたるくしてくらふべからず。田樂へもこの白味噌をつけるゆゑ、江戸人の口には食ひがたし。鰻鱧は大平などへもる。小串は焼きて玉子とぢにもせり。大魚の焼物は必ず片身なり。皿の下になる方の身はそぎてとり、外の料理につかふこと、大阪も又かくのごとし。京は魚類に乏しき土地なればさもあるべし、大阪にて片身の濱焼など出すこといかにぞや。是のおのづから費をはぶく人氣のしからしむるもの歟。京にて味よきもの、麩、湯皮、芋、水菜、うどんのみ、その餘は江戸人の口にあはず。

○祇園豆腐は眞崎の田樂に及ばず、南禪寺豆腐は江戸のあわ雪にもおとれり。しかれども店上廣くして、いく間にもしきり、その綺麗なることは江戸の及ぶところにあらず。

すべて京の茶店は、四方一間位づつにしきり、左右にすだれをさけたり。名古屋の七ツ寺の酒
 ○祇園に孔雀茶屋あり、もろくの名鳥多し。名古屋の若宮八幡前近
 ○大佛餅は江戸の羽二重もちに似て、餡をうちにつよめり。味ひ甚だ佳なり。うるろう
 ちまきといふものは、黒砂糖製にてよからず。その外安ものは、挽米のやきもちなり。
 上菓子よしといへども價大に尊し。

七十七 河原のすづみ

納涼は四條二條の河原よし。四條には義太夫或は見せもの等いろくあり。二條河原に
 は大弓楊弓見せ物もあれど、四條尤もにぎはへり。然れども河原は晝の炎暑に石やけて、
 ほてりいまださめず、流れに水みちて、人すくなければ、かへりて二條四條にまされり。
札にも茶屋酒店等川に床几を出し、種々の料理をみさぐ。四條二條は茶店のみなり。納涼の人辨當をもち來りて、河原にてひろく、
 すべて京師の人は、遊山にかならず辨當をもちゆくなり。貧しきものは竹の皮に握りめしをつくみてもちゆき、店物はくちはず、
 只店上のものをくちふものは、旅客と祇園の饅客のみ、ゆゑに物みな價貴し。茶店の茶いづれもわるし。すべて一人三四銭の茶
 代をつくなふゆゑなり。清水智恩院邊の茶店は、素湯に香煎なり○札のすだれは豊なり、夜は茶店なし。是道遠き故なるべし。

七十八 京都の節儉

京にて客ありて振舞をするには、丸山、生洲、或は祇園二軒茶屋、南禪寺の酒店などに、
 一人に價何匁と定め、家内せましと稱して、その酒店へ伴ひ行く。是別段に客をもてな
 すの儀にあらず、家にて調理すれば、萬事に費あり、その上やよもすれば器物をうち破
 るの愁あり、故にかくのごとくす。京の人の狡なることは是にて知るべし。

七十九 洛外の古迹 附近江八景

七月七日、むらさきの、上賀茂、北野まるれり。北野にて、

思ふことかみにうつしてねぎまつる松の葉の筆梅が枝の軸

歸路千本にて、雷したよかなりて、夕だちぬれば、づぶぬれにぬれてかへりぬ。

○下賀茂終明神には、終の木多し。志願成就の人は必ずこの社頭へ終をたてまつる。た
 とへ餘の木をもてきて植うるといへども、程なく化して終となる。予七月八日賀茂に遊
 びけるに請うてもつこくの半終に化したるを一枝手折りてかへりぬ。その外南天つよ
 じの終に化したるもありしが、或は枯れ、或はのこらず終に化したる故手折らず。かよ
 る神木をいたづらに折らんこと、おそれなきにしもあらねど、携へかへりてその奇瑞を

もつこくー木解

人に見せなば、遠きあづま人もいよと信をまさんことうたがひなければ、此よしを神につけ奉りて、これを手折れり。

手折るとも神やゆるさん久方のひらぎかざして歸るあつさに

○七月九日、宇治へのきけり。今日上醍醐、下醍醐邊、稻荷山、ふじの森、深草、東福寺、黄檗など、道すがら一見す。八幡山崎邊洪水にていまだ道甚だ荒たり。宇治橋は三段に切れて落ち、通圓が茶店は床上四五尺も水つきしと見ゆ。興聖寺、平等院、洪水おし入りて、路難儀なり。離宮は高さ故水難なし。橋姫の宮は流れて跡なし。

○和泉式部が稻荷山にて古歌をすしたりといふもみぢは、山上七八町おくの谷間にあり、古木なり。地理を思ふに、田中の社のかへるさとあれば、昔の木にはあらざるべし。

○七月十一日、嵐山に遊び侍り。渡月橋も近日の洪水におちて、川上七八町まはりて渡舟あり。大井川の石、及び紙屋川の石など、すこし拾うてかへりぬ。秋暑にたへざれば、終に佳品を得ず。この邊の石細長くして文編となすべき物あり。

○嵯峨にてうれしきもの、廣澤の池とあらし山なり。廣澤は佳景なり、嵐山は絶景にて侍る。

○さかの落柿舎は、二尊院より四五町間道敷の中にあり、土人もしらす。今は守る人もなくて、その地主も農民の得となる。座敷二疊、勝手一疊、甚だくづれたり。

柿の樹や月ばかりもる秋の庵

○見てうれしきもの、八瀬大原の黒木うり、鞍馬のつるめそ。大原女のさかさ脚半は、むかふすねの方にて脚半をあはせはくなり。女の牛馬を牽きてゆきよするさま、まためづらし。

○見ておどろかれぬるものは、東西の門跡なり。綺麗莊觀言語同斷、誠に美盡して世界の金銀もこゝにあつまるかとうたがはる。しかれども黄檗の雅にしてさびたるにはおとれり。

○見て尊きもの、禁中はさらにも云はず、上下加茂の社、公卿の参内。

○見てやさしきもの、かつぎ著たる女。

○見てすどしきもの、たどすの御洗井、かも川の流れ。

○虫きよには、眞葛が原よし。嵯峨は野々宮邊尤もよけれど、道遠ければわづらはし。

○河鹿はあらし山の麓大堰川にてなくよし。いまだ時候はやければ聞きにえ行かず。

落柿舎は、俳人
去來が住みし草
庵なり、この人
名は兼時とい
ふ、長崎の日向
井元升が二男に
して、若かりし
より、洛に住し、
芭蕉翁の風流を
學びて、俳諧に
名あり、寶永元
年九月没すとい
ふ
つるめそ一祇園
會の役を勤むる
犬神人の稱